

特20
444 No 2896/23

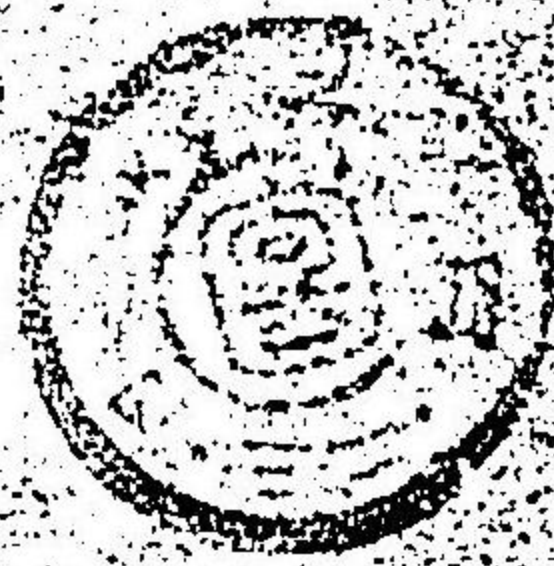
國會製備

秋田縣管內名士列傳全

直接國稅拾五圓以上納稅名鑑

北辰堂出版

官中顧問官正三位高川彌二郎公題字
馬城山人 大井憲太郎君序文
鷹嶺居士 籠谷定雄君校閱
旭津 渡邊真英編述





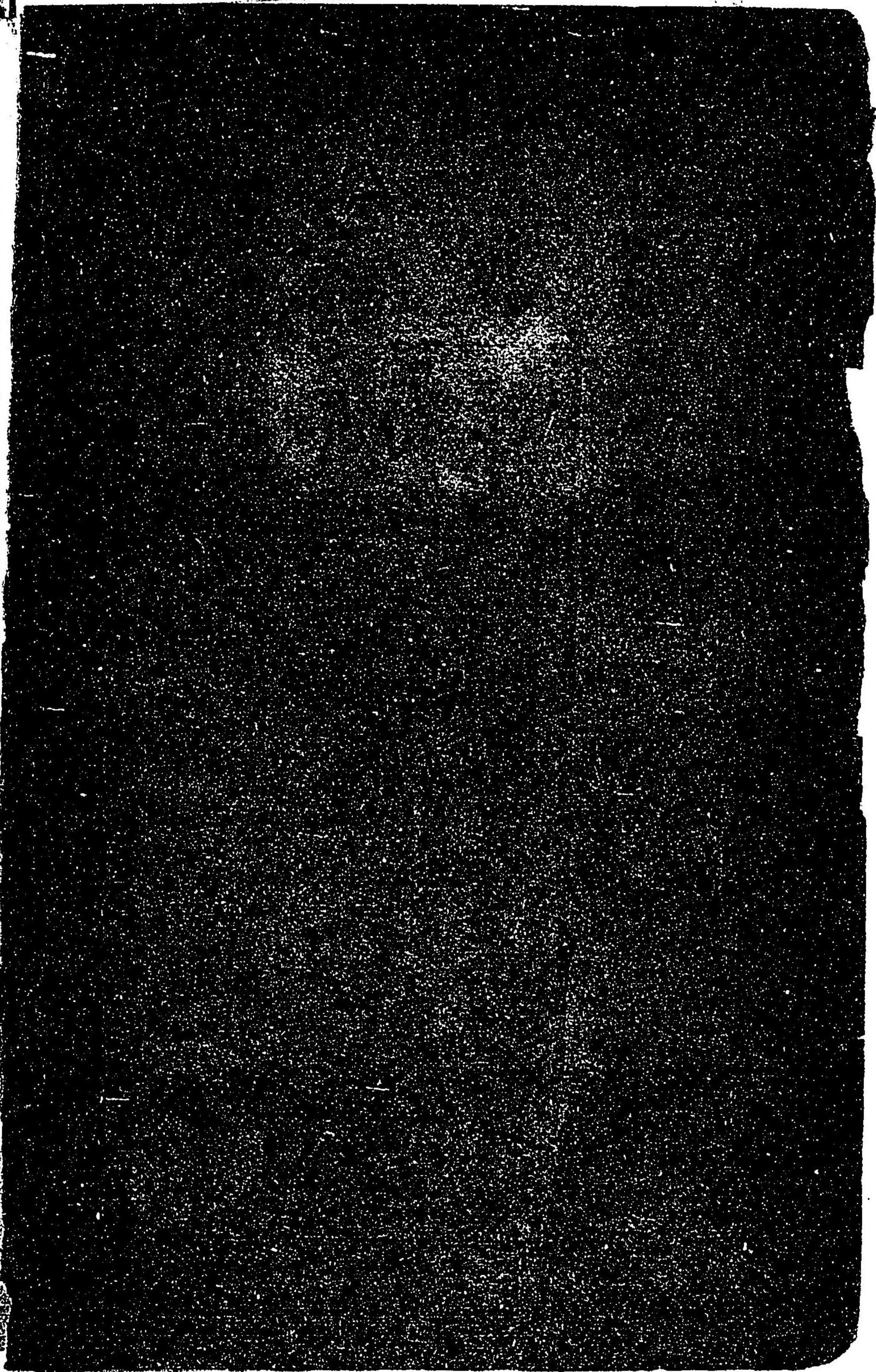
池田甚之助君肖像



山田三雄君肖像



羽生凡然君肖像



士居通豫君肖像



渡部太郎君肖像



小田嶋由義君肖像







像肖君茂良宗



像肖君郎三銚出野



像肖君漸直田成

像肖君治長



像肖君次三



像肖君藏永



坂本龍興君肖像



日黒真治君肖像



嵯峨重郎君肖像





公
心
日
此

念佛者主念書

序

古今無二路。達者共同途。頃日政友
渡邊眞英氏。寄示秋田縣管內名士
列傳及直接國稅拾五圓以上納稅
名鑑。蓋忠愛之餘情。遂成斯著也。予
每讀新著。未嘗不喜焉。嗚呼。自古忠

愛之士。不乏於其人。何其盛哉。書以
弁卷首。

明治廿三年二月十一日

馬城山人大井憲太郎撰

秋田名士列傳序

登高而號。聲不加大。而聞者遠。我秋田縣達人傑士不爲少也。而地僻于東北之隅。是以其名不籍甚。何其不幸之甚也。吾友渡邊真英君慷慨悲歌之士也。一日來叩柴扉。告以本書編述之事。予固同感唯慮前途事業之困難耳。乃問曰。經費如何。而其得失相償與否。亦未可知也。君笑曰。國會議員得其人與不得。實係國民之安危休戚。予之此舉豈遑復顧一身之利害得失乎哉。友人三浦龜太郎君夙贊成之。將有所盡。請君亦幸勿吝一臂之力。予喜曰。予也不肖加以宿痼。然至其爲國家盡力之一念。則自信不讓于常人。君而果如

其言予豈不努力哉。相約而去。以來協心戮力從事于斯。而世事紛擾。動與心違。逡巡數矣。唯渡邊君之熱心銳意。拮据經營。竟閱一歲。編述之事全竣焉。將公于世。以請博雅君子之高評。因求予之一言。嗚呼予也。無學無識。何其可辨。抑君忍堪能成此業。我縣達人傑士之名未顯著者。始至遠聞于天下。則登高疾呼之功。豈不大哉。他日編纂我縣文明史者。必當特筆大書。以傳于千載不朽也矣。聊附蕪詞。以塞其責云爾。

明治二十三年三月上浣日

屏交 如蘭三浦重將謹撰

秋田名士列傳緒言

嗚呼明治廿三年なるを。嗚呼明治廿三年あるかな。回顧すれハ明治十二三年の交。我邦の輿論は到る所囂々噴々と。て。立憲代議政体の設立を唱道と。勢ひ浩水比堤を壊すが如く。殆んど防くべからき。畏くとも我輩聖文武ある 皇帝陛下は夙も輿論の趨く所を察と。曠前絶後の一大聖詔を煥發と。國會開設を明治廿三年に期定し玉へり。實に明治十有四年なりとす。是に於て民心は稍々穩かあることを得ると雖とも。前途十年亦頗ふる遼遠の感なきにあらざりき。嗚呼光陰此過ぎ易き恰も飛丸の如く。將た流星の如く。瞬間早々己に二十三年に曉光赫々としと。吾人此寢床を襲ひ來り。吾人長

夜の夢を攪破せり。嗚呼豈驚き且つ喜ばざるべけんや。
惟た謂らく立憲代議政体は名のみ。名は實に實あり。我邦の
輿論が多年立憲代議政体の設立を熱望して曰まざるもの
は。其名にあらざりて其實にあるものと明らかかり。而して立
憲代議政体を志く果して其實を挙げ能く其功を奏せむ
る。則ち國會は如何にあるのみ。嗚呼國會なるるか。嗚呼國
會なるか。國會は國家安危の繫る所。人民休戚に關する所。
彼れ府縣會若くは市町村會の類と。年を同ふして語るべ
らざるなり。故に之れが議員たるも。及ひ之れが議員を舉
ぐるも。深く警戒謹慎せざるべからざるは。素より論を俟
ざる所あり。

今や我邦人民の智識は昇進……政治思想は發達……せり
天晴立憲代議政体は民に愧ざるべけん。予の信じて疑
はざる所あるが。予久しく職を村吏に奉ふ。縣會若くは市
町村會議員選舉乃實況を目撃し。轉々慨歎に堪へざるもの
あり。何そや彼れ選舉者中、或は私情を爲えに……將ある私利
を爲めに……妄りに權利を弄し。枉げて選舉を行ひ。甚ある
に。乃至りては選舉を賣買せんとするものありと云ふ。然れ
ば則ち彼等の眼中、既に公利なき。將た公益なき。復安ぞ其人
物の如何……主義は如何……目的の如何を問ふに違ふあ
らんや。是に於て俊秀卓越は士ありと雖とも。或は却て其選
に當ることを屑しと勢ざるに至る。嗚呼議員選舉は弊一あり

何ぞ斯に至るや。

客年二月帝國憲法發布の擧あるに會ふ。予や不肖を顧みず、自ら起て本書編述の事を創圖せしむ。蓋し斯も感ずる所あり。聊る彼れ選舉者の迷夢を煥起し妄念を掃除せんと欲する。お出るあり。而して友人三浦重將三浦龜太郎二子に謀るに。二子喜で之を賛成す。一臂の力を假さんと約す。以來拮据黽勉。夜以て晷に繼ぐ。奈何せん世事意の如くならざる多く。中途に廢棄せんとせしむ屢々なり。惟た三浦二子の勤勉と江湖諸彦の勸奨誘導とに因り。強て勇氣を鼓し。荏苒一週年を閲ふ。始て一部れ秋田名士列傳を得たり。嗚呼成業乃難き。實に知るべきあり。

既にして一日予、此書を袖に、往く鷹嶺籠谷定雄君を訪ひ。以て其校閱を請ふ。君、之を一見。笑て曰く天下れ豪傑にして始めて天下の豪傑を知る。予、名士にあらざ。安ぞ名士の傳を校勢ん。別に其人を選む可かりと。抑々籠谷君ハ夙に新聞記者として、將た又演説家として、議論れ秀拔……筆力の雄健……あることは世れ既に熟知する所あり。因て之を強請し。幸に燈下一讀れ、勞を取らる。是に於て始て此業れ、完結を告ぐ。予の最も感喜に堪へざる所なり。

然り而して更に讀者諸彦に向て敢て一言すべし。あり。他か、人を見るの難き。聖人猶ほ且つ之を難し。況んや予れ無似を以て漫りに名士の傳を編す。豈僭越ならざらんや。況んや

六
智識と財産との相隔ること大に甚たきも此あり。而して標準を直接國稅納額に取る。安ぞ矛盾齟齬あると云ふを得んや。國會議員の選被選權の既に國法に規定あるを奈何せん。而して此書を専ら國會議員選舉に参考に供するに在り。故に斯れ如きのみ。亦誠に己むを得ざるなり。是を以て初め予、博く管内直接國稅貢納諸氏に略傳を掲載せんと欲し。普く材料を四方に求めしが。今に至て僅か二十一名を得のみ。又管内に稅額を調理するに於て。日子と經費とを消棄勢あると。更なるものあり。今や此書未だ完全あらざり。雖とも。時期既ら迫り。恐らくは六日。其書。十日の菊に属せんことを。修正増補の暫らく第二第三出版の時に譲らん。

み。若も夫れ僭越の罪……鹿慢の尤……は予の甘んじて受くる所なり。讀者諸彦冀くも微意に在る所を察して以て瀏覽乃榮を賜せらんことを。聊か此書の沿革來歴を記して。以て緒言とあすと云爾。時に帝國議會開設元年二月書窓に盆梅一朶、始めて清香を送るの處に於て。

編者 旭涯 渡邊眞英謹識

凡例

一 本書編述は目的は緒言にも陳べたる如く専ら國會議員撰舉の参考に供せんとするに在り。故に博く管内直接國稅拾五圓以上貢納諸氏の傳を掲げんと欲して未だ之を得ず。將た之を得て詳ならず。書中或も精なるものあり。或は粗あるものあるは。則ち其得る所同一からざるに由る。固より編者の意にあらざり。讀者諸彦焉を諒せよ。

一 諸氏に納稅額は特に實際の調査を遂げ。最も精密仔細を要せしむ。奈何せん實查以來數旬を經過せしもあるを以て。其間に賣買讓與等の異動なきにあらざるべし。且つ縣會議員の撰被撰權に關係なき限りは。他郡若くは他町村

の所有地租を省略せしめあり。又地租及び所得税に於て、
 総て錢厘を略して圓留とせり。然れば現在の納額に照す
 ときは或は多少の差違あるも亦免れざる所あるべし。
 一男子の年齢二十五歳未滿あると女子とは総て之を除き
 たれど就中多額の納税者は或は二十五歳未滿と雖とも
 特に之を掲載せり。

一村名は総て舊名を廢し單に新名を掲げたれど人名を列
 記するに舊村名の順序と納税額の多寡と此二つに因
 り。
 一書中地とあるは地租金にとも所とあるは所得税なり。

國會
 準備

秋田縣管内名士列傳目次

(イロハ順)

池田甚之助君傳	一頁
羽生氏熟君傳	二頁
畠山雄三君傳	三頁
土居通豫君傳	八頁
大久保鐵作君傳	十五頁
小田嶋由義君傳	二十頁
渡部小太郎君傳	二十二頁
川井忠雄君傳	二十八頁
金澤松右衛門君傳	三十頁
勝又平太郎君傳	三十二頁

目次

奈良	茂君傳	三十四頁
成田直衛	君傳	三十六頁
野出鏞三郎	君傳	三十八頁
麓長	治君傳	四十頁
安達永藏	君傳	四十二頁
佐藤三次	君傳	四十三頁
坂本藤兵衛	君傳	四十五頁
嵯峨重良	君傳	四十六頁
目黑貞治	君傳	四十七頁
日景辨吉	君傳	五十八頁
菅禮治	君傳	六十三頁

人員總計	一頁
直接國稅最多額納稅者	三頁
直接國稅拾五圓以上納稅者	全
秋田市	七頁
南秋田郡	三十九頁
北秋田郡	五十七頁
鹿角郡	六十三頁
山本郡	八十三頁
河邊郡	九十九頁
由利郡	百四十一頁
仙北郡	

平鹿郡
雄勝郡

百八十五頁
二百〇三頁

目次終

國會
準備
秋田縣管内名士列傳

鷹嶺 籠谷 定雄 君 校閱

旭涯 渡邊 眞 英 編述

池田 甚之助 君 傳



東泉の功なからんや。池田甚之助君は我縣の陶朱なり。抑々范蠡なる
人にして世々農を業とし。富、管内に冠たり。君も亦父祖の笑談を繼
ぎ。或は官選となり。或は公選となるも。君の戸長たること依然たり。
一。頃日再ひ此議あり。君も亦た發起人となり。次て創立委員に擧られ。上京して大に尽力す
る所ありしと云ふ。蓋し君の財産家たることは。世誰か之を知らざらんや。宜なり。我縣の財
産家を稱するものは。必らず先づ指を君に屈すること。然るに翻つて君の功業事績を觀察す
を邑民に繋ぐを徹するに足る。回顧すれば明治十八九年の交。鐵道敷設の議。我縣に勃起し。
一時輿論轟然たりしか。時機未だ熟せず。僅か兩三年の間にして。宛も煙散霧消に歸したり
き。頃日再ひ此議あり。君も亦た發起人となり。次て創立委員に擧られ。上京して大に尽力す
る所ありしと云ふ。蓋し君の財産家たることは。世誰か之を知らざらんや。宜なり。我縣の財
産家を稱するものは。必らず先づ指を君に屈すること。然るに翻つて君の功業事績を觀察す

名士列傳

此は。未だ天下に赫灼たるものあらざり。是を以て往々君を難するものあり。亦故なきにあら
ず。今や君は我縣鉄道布設の發起人となり。將た創立委員となり。以て我縣の利益幸福を振
起増進せんとす。其功や偉なり。况や本年の帝國議會に向ひ。君は進て貴族院
議員となり。更に大に社會に尽く所あらんとし。今より交を天下の志士に續ひ。蓋を宇内の
仁人に傾け。以て遠謀深議する所ありと云ふ。果して然らば君か功を天下に成し。名を萬世
に輝すは蓋し此時よりす。予輩豈社會人民の爲めに。一太白を擧て之を賀せざらんや。
列傳氏曰。池田君の富は一縣に秀く。而して功。庶民に及ふなし。是を以て世或は未だ之を
知らず。今や君は將に進て大に爲すあらんとし。既に鉄道創立委員となり。又更に鵬翼を
張て。政治海天に雄飛せんとす。所謂る三年鳴かす飛はす。飛ときは天に沖り。鳴ときは人
を驚すものにあらざるを得んや。吾人刮目して君の向後の運動如何を視んとす。

羽生氏熟君傳

一日客あり。談、偶々秋田名士の事に及ふ。客曰く。或は學者なるや。將た讀者なるや。抑々以
て事務家なり。羽生氏熟君の如き。是亦我縣の名士と稱すべしと。客評果して當るや否や。之
を知らずと雖とも。蓋し君の事務家たることは。之を君が三十年來の閱歴に徴するも。自ら
其然るを知る。君は舊佐竹藩士。文久元年。年甫めて十三。出て藩侯に仕ふ。奥羽戊辰の亂
僅かに定まり。幕臣榎本大島二氏兵を擁して北海道に據り。勢再び猖獗。我藩兵を發して之

を討つ。君、斥侯として之に赴き。歸るに及び更に右筆に任す。之を君が官海に乘出すの端舟
とし。維新以降職制屢々革む。或は書記と稱し。又史生と唱ふるも。其職は一れみ。所謂る刀
筆の吏に過ぎず。然るに君は夙夜匪懈怠らず。漸次累進して遂に顯職に至る。豈亦凡庸士人
の企て及ぶ所ならんや。明治五年君初めて權少屬となる。其年十有一月由利郡民蜂起し。明
年一月仙北郡民暴動し。君皆出張して能く鎮定の功を奏す。六月進て少屬となり。明年權中
屬に任じ。三等警部を兼務す。幾もなく又中屬二等警部に進み。第一大區區長を兼務せり。既
にして君、諸職を辭せんことを請ふ許さず。會々地租改正の事あり。更に其總代人を兼ね。君
夙に大に見る處あり。皇帝陛下羽州御巡幸の事を建議する前後二回。終に其職を辭し。
馳て宮城に至り。行在所に就き。事情を具上し。御巡幸の事を切願す。當時。皇帝陛下は。奥
州御巡幸あらせられ。宮城御駐紮中なりし故なり。同九年再び第一大區區長に任す。時に政
費多端にして。民力の堪へ難きを慮り。悉く其俸を出して以て民費の幾分を補ふ。同九月太
政大臣に建議す。其要に曰く。府縣大小區町村制を廢して。州郡村制を施さ。并に州郡村會を
設くること。國稅事務は大藏省に於て管轄し。警察事務は警視廳に於て統理すること等な
り。同十月轉して中屬に任す。累進して二等屬に至る。同十一年春君、士族就産の事の爲めに
職を辭し允さず。同年舊秋田藩の有志諸氏相謀り。秋田神社を設立す。社は藩祖義宣公を祭
る。而して君専ら其事を管す。今や巍然たる麗廟秋城の南に屹立し。日々參詣絶へず。年々祭
祀頗ふる盛なり。要するに義宣公の威德庶民に浸漸し万世に赫灼たるものあるに由ると雖

ども。抑も亦君が力預て少しとせず。同十二年八月秋成社成る。即ち是君が多年經營せし士族就産社なり。君之を社長に擧ぐる。(俸給は辭して受けず)。同十三年三月事を將て出京し。羽州御巡幸の事を建議す。君の羽州御巡幸の事に就き建議すること。是に至て既に三回に及び。其熱心想ふべし。又岩倉大臣に對し。更に一篇の建議を呈して曰く。各省を廢し。太政官に於て万機を總攬する事。地方分權の事。國憲を制定し國會を開設する事等なりしと云ふ。抑も君の時事に就き。建議すること前後數回。亦以て其凡人俗吏にあらざる知るべきなり。同六月職を辭し。以來拮据匪懈。専ら秋成社の事業を擴張することを謀れり。同十四年七月故佐藤信淵翁に贈位の事を建議す(翁の學術及び其經倫は世既に之を知る。故に茲に之を異す)後ち翁は正四位に叙せらる。同八月同志を謀り。一祠を創設し。以て平田篤胤先生を祭る。之より先き朝廷先生々前の功勳を混實し。特に位階神號を賜ふ。是に於て君、此舉あり。同九月。皇帝陛下羽州に御巡幸あらせらる。而して秋田街御駐紮の日有栖川宮一日君を召して。心を勸業に竭し。専ら地方の浩益を興し日又士族就産の事に盡力せしは。奇特の至り云々。褒詞を賜りしと云ふ。嗚呼君の羽州御巡幸の事に就き建議する一再に止まらずして。而して今や此千載一時の盛事に遭遇し。加之ならず。有栖川宮の恩言に浴することを得。君の喜ひ知るべきなり。同十五年六月秋田縣會議員の擧會あり。君、河邊郡より議員に擧らる。同十七年八月秋成社長の定期改選に於て。君、再擧せられて社長となる。同十八年縣會議員を辭す。之より先き君、秋成社長を辭じ。社員強請し君、遂に之を諾す。同八月河邊郡大

張野に一寺を建設し。大張山と號し。寶澤寺と稱す。蓋し大張野は秋成社員開墾の地なり。同十九年一月鉄道敷設の事を縣令に建議す。二月病に依り秋成社長を辭す。四月秋田縣一等屬に任ず。同八月進て書記官に任じ委任官五等に叙し上給俸を賜ひ。第二部長を命せらる。同二十二年二月千葉縣に轉任し。今現に千葉縣に在り。近來久しく消息を絶せり。故に君の近狀を審にせずと雖も。抑も君の事務家たることは。予輩の夙に信する所なり。然らば君の前途倍々高官顯職に進むことは。何ぞ疑ひを容れんや。附言君の或は職務勉勵として賞賜を得。又私財を投して窮民を救助し。罹災を賑恤す。因て褒賞を賜へること。一再に止まらず。一々列記せんには徒らに冗長に渉るを恐る故に之を畧す。

列傳氏曰く。羽生君は事務家なり。君にして若し西南出生の人たらんには。何ぞ唯に碌々一書記官に止にするものならんや。不幸東北に生る。寔に惜むべきなり。然りと雖も東北豈復昔日の東北ならんや。天晴君が事務家として。政治舞臺に躍出るの日も。蓋し遠きにあらざるべし。聞く君、性質勤勉事に當て倦まず。其事務に執掌する時の如き。徹夜寐すること數々なりと。而して常に腦病を憂ると云ふ。嗚呼是亦才子善く病むものか。惟た國家の爲めに自愛せよ。

畠山雄三君傳

我縣會議員中老練家を問はく。何人も畠山雄三君なりと答ふへし。回顧すれば。明治十有二

年縣會創設以來曾く一回も撰擧に漏れたることなく。將た開會中一日も缺席せしを聞かざるは、我四十一名の縣會議員中君を措て復さるべからず。然れば其老練家となれるも亦宜ならずや。君は山本郡仁鮎村の人。幼にして穎敏伶俐の名あり。明治六年一月副戸長に任じ。七月進て戸長に移る。同十年九月更に第三大區書記を命せられ之を辭す。同十月區總代に擧らる。之を君か他日代議士たるの楷梯とす。同十二年政府府縣會議を開設す。即ち自郡より議員に擧らる。君が六十餘萬人民の代議士として。議場に出席し。老練家として名を世間に知らるゝに至れるも。蓋し此時よりす。既にして成田直衛氏議長と。君は副議長として。頗る其敏を稱せらる。明年縣會議員の定期改選に會せしを以て。正副議長も亦之を更選し。君再び副議長に擧らる。同十四年始めて府縣に常置委員を置く。君又之れが委員に擧らる。同十六年成田氏議長を辭するに當て。更に議長に擧らる。同十八年大久保鐵作氏議長に擧られ。君は常置委員たり。是に至りて世の速了者輩、竊に君を評して曰く。畠山君は必ず常置委員を辭するならん。君は既に商業家たり。而して其事務は日に繁劇を加ふ。故に復常置委員の職務に睡醒たるの違まわらざるべしと。偵かに君は老練家なり。安ぞ彼等速了者輩の見る如くならんや。君は尙ほ依然在職せり。同廿一年大久保氏議長を辭し。君再び議長に擧らる。而して常置委員を兼ね。同十二月通常會議の際。議論百出。會場騒然。遂に議會解散を命せらる。當時君は議長として常置委員を兼ね。故を以て特に攻撃の衝に當り。竟に其職を辭せり。同廿二年四月議員を改選し。更に臨時會議を開く。再び議長及び常置委員に擧

らる。君、思ふ處やありけん。直に起て常置委員を辭す。今尙ほ現に秋田縣會議議長たり。曩日明治十五六年の交。政黨四方に勃興し。我縣に秋田改進黨あり。嶄然東北の一隅に屹立し。黨勢頗る張る。當時君之れが常議員たり。今や天下の形勢一變し。秋田改進黨は夙に解散を告げ。現に秋田大同俱樂部なるものあり。是乃ち我縣自由主義の團體なり。而して君又之れが常議員たりと聞けり。然れば我縣政治社會に於ても。亦有有力の人たること固より疑ふべきなし。唯未だ君の政治部面に立て。花々數運動をなせしを聞見せざるは頗る遺憾とする所なるが。畢竟行藏自ら時あるべし。何ぞ怪むに足らんや。其他君の或は秋田畜産會員となり。若くは勸業諮問會員となり。及び常置委員たるの日。衛生會員を兼務し。又は村會議長たるの類は。皆茲に之を畧す。要するに君が既往の履歴ふ於て。専ら取て記すべきものは則ち縣會に在り。君は實に我縣會の元老なり。

列傳氏曰く。畠山君は穎敏……伶俐の人。是を以て君は速く政治家たり。又能く商業家たり。而して聞く君の商業に於ける。殆んば百發百中の妙あり。君にしと純然たる商業家とあらんには。忽ち大勝を商戰場裏に制し。天晴名將の譽れを天下に發揚するは。猶ほ手を反すがとさきのみと。嗚呼政海風悪く波荒し。豈航行し易からんや。如かず去て商海に泛び。活潑たる其大伎倆を縦横に演出せんには。寧ろ快ならずや。唯た夫れ君の決然袂を拂ふて政治家を辭し商業家となるの時未だ至らざるか。予輩敢て之を君に問ふ。謂ふに君も亦笑ふて之を首肯すべし。呵々。

土居通豫君傳

日本立憲政黨新聞の紙上に椽大の筆を揮ひ、道頓堀の劇場に懸河の弁を鼓し。正々の旗堂々の陳。以て自由主義を揮推し。國民の政治思想を喚起せしは。土居通豫君なり。君は元高知縣人。其先、伊豫の河野氏より出づ。當時勤王を以て世に聞へたる土居通増の裔なり。君字は子順。其號香國。一に梅容と號し。又鳥巢山下人と號す。其家世々土佐の國老深尾氏の臣なり。考名は通萬。妣土居氏。嘉永三年八月十八日高知縣藤岡郡佐川村鳥巢山下に生る。幼にして慧敏。書を讀み書を善くす。人、奇童を以て稱す。或人其畫に巧なるを見て。君をして師に就き術を極めしむることを其父に勸説し。君之を小技とし。敢て專修の意なし。蓋し君の家元、藩士たりしが。祖父仁兵衛氏早く没し。爲めに家祿を削られ且つ士格を下らる。母土居氏は乃ち仁兵衛氏の長女にして深く之を慨す。故に君の纒に東西を弁せる頃より。常に君を戒めて曰く。汝幸に男子たり。宜しく文武の業を研磨して吾家を興すべしと。君幼にして母堂の養陶を受け。深く其心に銘する所あり。兒童と戯る必らず自ら將と。而して戰闘の狀に擬す。一日隣兒と闘ふ。隣兒、君を欺く之を論争して聽かず怒て刀を揮ひ之を斬る。中らず其衣を斷つ。偶々君の母之を認め後より來て其刀を奪ひ。大に後來を戒む。年甫めて十二。師に隨ひ聖劍は鏡心明智流を學び。柔術は武内流を修め。又北條流長沼流等の兵法を講じ。皆傳書を受く。又好て砲術を學習す。君の武事に於ける斯の如きを聞見し。先輩諸氏戒めて曰く。武

事を修むるも文事を修めざれば國家を治むるに足らずと。是に於て君、翻然悟る所あり。郷賢名教館に入り。節を折て専ら歴史を讀み。好で詩賦を作る。後ち城下に出で。奥宮備後翁の門に入り陽明學を修め。勉めて其學ぶ所を實行に顯さんと期す。時に中山秀雄、廣田正郎、宮崎簡亮、仁尾惟茂、中屋重道等と。薪水の勞を俱にせり。幾もなく君は拔擢せられて。國老深尾氏の屬從となる。時に年十八。既にして維新革命の際。深尾氏、君等をして士籍を脱せしめんことを圖る。君深く之を慨し。同僚諸氏と遷署して。其所分の不當なる所以を上陳す。事、輒すく行はれず。一夜同僚門田東。小野榮五郎二氏と謀り。親しく執政の家に至り。具に意見を述へんとし。門田東曾て勤王を唱へ。慷慨の士なり。既に其門に至る。門田氏竊に其袂を引き謂て曰く。執政我徒の言を擁護す。故に事行はれず。今夜飽まで論議を尽し。尙ほ諾せざるに於ては。余寧ろ彼を刺さん。後事唯た君に托すと。意色既に決せり。君曰く之を刺して國家に利ある。之を刺す可など。奈何せん事若し斯に至るときは。大事忽ち破れん。如かず淳々誠意を吐露し。若し聽れざるに至りては。更に去就を決すべきのみ。一俗吏を俱に死するは。果して何の益があるぞ。門田氏意漸く解け。即ち君の言に従ふ。然れども其意見、竟に用ひられず。藩侯、君等を諭して曰く。士籍にあらんと欲するものは本貫士族の附籍たるべし。而して悉く其祿を沒收せん。民籍に入るものは。其祿を從來の儘に支給せん。君等云ふ人間生れながら天祿あり。勉めて怠らざるときは何と寒餓の憂あらん。士籍は祖先の死を以て國に竭し以て得たることとの表章なり。子孫たるもの豈輕しく擲棄すべけんやと。因て家祿

名士傳

を藩侯に還して以て士籍を存す。更に其父に請ひ所有の田地若干を賣却しく學資に充て。藩
費致道館に入る。先輩山崎正策氏、君か篤學の志を嘉し。資を贈て之を輔く。藩廳竟に君を拔
擢して得業生となす。當時君の同學中、結城贊、山本憲、阪崎斌、松村常蛇、村山木郎、細
川瀾、北川柳造、織田純一郎、桑原深造等。最も親善なりしと云ふ。是に於て君の學業大に進
み。藩侯召して文章軌範を講せしめ。之を賞し物を賜ふ。君性、義侠の風あり。一夜向窓に書
生、山本憲を誹謗せしを憤怒し。之を詰し。遂に激論に涉り。之を決闘せんとし。慨然刀を把
て起ち。三尺は秋水將に席上に進らんとす。塾長松村某來て之を制し。事漸く解くることを
得たり。會々藩費の改革あり。君夙に時勢の變遷を視て。而して洋學の講せざるべからざる
を察し。即ち藩費を退き結城贊と與に策を東京に負ひ。専ら英學を修めんとす。之より先き
君十六歳にして母堂を失ひ哀悼度に過ぎ。爲めに病根を醸せり。是に至りて祖母、君の遠遊
を欲せず。強て之を抑留す。君も亦祖母の心に背くに忍びず。暫く其志を遂ふし。同郡寒原村
有志者の招聘に應じ。同地に學校を開設し。生徒を教授する年あり。區長田宮某、君の凡庸の
才にあらざるを觀、官に告て之を戸波、永野、鷹の巢、三村の村長となす。君、赴任するに及
て。村内の有志を會合し。之に云て曰く。苟も村治に對し。意見が狭むあらは宜しく來て之を
言ふべし。一も隱すあるべからず。又若も我に失あらば敢て譁る所なく之を告げよ。官廳の
令違は豫め期日を定め有力者を會し解説せんと。諸人悦服して去る。以來君は村吏の微職を
以て賤とせず。孜を勤勉。且つ教育の忽諾にすべからざるを論し。學校を設立し。自ら之を教

授す。蓋し此三村は古より治め難しと稱す。君赴任せしむ村内の高嶺忽ち解け。村民各々其
堵に安す。是君か廿五六歳の時なり。明治八年板垣退助氏等大坂に會す。古澤滋氏同郷人山
田某を介し。遠く君を招のしむ。君謂く男子豈小成に安すべけんや。時機失べからずと。懇に
父及祖母に説き。馳て大阪に至るの日。惜むべし會既に散す。因て東京へ出て。古澤氏の家に
寓し。當時有志者の設立に係る愛國社に入り。革學を攻修し。専ら政治、法律等の書を讀む。
幾もなく擧らきて元老院權中書記生となる。沼間守一氏之り局長たり。故に法律若くは演說
に於て。大に得る所ありと云ふ。當時横川榮長と稱する投書家あり。其名、諸新聞紙に赫灼
たり。報知新聞社主筆藤田茂吉氏。始めて北君なるを探知し。請ふて其投書家となす。然れど
も人多く未だ之を知らず。或は横川榮長とは如何なる人物なるやを疑ふものありしと。渡邊
國武氏、高知縣令となるに及て。該縣中風に轉任す。時に長次官の更迭に會し。事務錯雜。
名狀すべからず。加ふるに属僚心中恟々たるあり。安して職務を執るものなし。君は庶務、驛
遞、文書等、兼て之を負擔し。獨力辨理し。憂も澁滞なかりき。明治十年西南の亂起る。高知の
有志者亦紛に計畫する所あり。之より先き君の該縣に至るや。植木枝盛、大江卓、吉田正春、
坂本南海男、細川瀾、諸氏と謀り。劇場旭日座に於て。政談演說會を開く。之を高知縣政談演
說會の嚆矢となす。此時に方り板垣退助氏大に見る所あり。片岡健吉氏をして政府に建言せ
しめんとす。板垣氏の囑に應じ。君、其建言書を卿す。後ち片岡氏以下數人縛に就く。君も亦
共謀の嫌疑を蒙り。殆んど其職を免せんとし。而して廣瀬某、能く其情を知り。君の爲めに

宛を陳し、事遂に寐みぬ。諸友人等或は辭職を勸む。君曰く官其職を免せんには則ち止む。然らず何ぞ自ら職を退くべけんやと。固く執て動かす明年徳島支應在勤を命せられ。庶務課長となる。赴任の日阿波國の有志輩。君の容顏柔順。恰も婦人の如きを一見し意謂く黄口小兒のみと。麻門に大書貼紙して曰く。土居屬尙は乳臭し。安ぞ阿波國人民の休戚を托するに足らん。遂に去て本國に歸るべしと。君、觀て微笑して曰く。余は固より一屬吏のみ。然るに余をして阿波國人民の休戚に任せしめんを。余の榮や大なりと。遂に一詩を賦す。

君不見。子房顔色類婦人。雖然博浪一擊倒強秦。

又不見。項羽能拔山蓋世。雖然烏江一敗離不逝。

雄姿弱質向足評。精神到處乃忠誠。男兒事業在

少壯。堅忍甘受俗見誘。

幾もなく本廳に歸り。長次官の更迭に遭ふ。北垣國道氏縣令となる。氏、君の才能を知り。三等屬に擢ぎ。而して庶務課長となす。以來持振匪懈頗ふる縣治に効功を奏せり。乃ち縣會の紛擾所理の事の如き。或は土阿兩國分離の件の如き。北垣縣令の所置は。皆君か所論を取れるものなりと云ふ。又諸有志者と謀議し。高知教育會なるものを組織し。君、推擧せられて之れが會長となり。且つ同會雜誌發行の事に任す。北垣氏の京都府知事に轉するや。君亦隨て移り。二等屬に任ぜ。庶務課長たり。而して大に該府舊來の弊習を釐革すること。に尽力せり。會々府會と府廳と法律の見解を異にする所あり。議論甚々。殆んど壊裂に至らんとす。君

、弁明委員の重任を受けて。番外の椅子に着き。而して府會に向て弁明すること三日間に涉り。遂に議會の容る、所となり。平和に其局を結ぶことを得たり。又傍ら學務課長某等と謀て。京都教育會なるものを設立し。教育の事に尽瘁せり。此時中嶋信行、古澤滋氏等大坂に在り。立憲政黨を組織し。一大新聞を發兌して以て其機關に供するの計畫あり。古澤氏、書を贈て一臂の力を借らんことを求む。君は知事に向て事情を具陳し。官を辭して坂に之き。立憲政黨新聞社に入り。操縦の事に任す。傍ら小室信助、田口謙吉、澤邊正修、永田一二、河津祐之、等諸氏と協力して黨勢の擴張を企圖し。或は近畿各地に於て演說せしと幾回なるを知らず。蓋し是君か積年の養ふ所を實地に試むるの時にして其高論卓説は都鄙の間に喧傳せり。爾來國事に奔走し。書生を鼓舞し。傍ら河津祐之氏等と俱に大坂出版會社の事務を輔けて著述翻譯をなす。或は諸有志と謀りて訴訟鑑定所を設立し。社會の冤枉を伸長せんことを期圖す。明治十七年春立憲政黨の總會を開くに當り。時勢の止むべからざるより。黨員概ね解散に決しぬ。是に於て君は大に感ずる所あり。孤憤奮論七篇を起草し。立憲政黨新聞紙上に連載し。慨然筆を投じて該社を辭し。東海諸道を漫遊して東京に至る。而して小野湖山、向山黃村、石川鴻齋、諸翁の門を叩き。其他風流諸子と往來し。吟咏以て鬱悶を遣る。偶々父の喪に丁り。坂に歸り。謹慎門戸を出てざるもの累月。然るに君が時事に感ずる所は愈々深く。倍々切にして。謂らく。方今の志士と稱するもの未だ維新革命の志士に及ばざること遠ふ

し。畢竟するに精神の鍛練足らざるが故なり。君は夙に陽明の學を修め。又禪學を喜ひしが。竟に基督教徒の言行見るべきものあるを察し。奮然新約全書を誦讀し。頗ふる獲る所あるもの、如し。而して君は若し荷も日本男兒の氣風を養成せんや欲せば。先づ日本女子の教育を擴充せざるべからざることを唱道し。明治十六年頃女子教育概論を稱するものを版行して。以て世に問ふ。當時女子教育の事を云ふもの甚々稀なりき。此著一とたひ出て、頗る社會に感動を與へ。遂に大阪梅花女學校の教授を托せらる。君喜て其任に當り。女生を薰陶する歳餘。又謂く良政を行はんと欲せば。先づ國民の心術より改良せざるべからず。即ち宮川經輝、伴直之助、森本介石、木間重慶、諸氏と謀り。太平新聞を發刊し。道義主義を主張し。又傍ら吉東次武等と協議し。泰西學館を創起し。自ら校長の任に當り。諸生を教養せり。然れども事皆意にあがず。竟に諸事を閉き。各地を遊歴し。天下の實況を視察し。更に徐ろに經營する所あらんとし。先づ紀伊、大和、山城、河内、伊賀諸國に遊び。將に大に天下に漫遊を試んとするや。遽然細君疾ひ病なるの報至り。志を斷して歸坂し。細君疾漸々愈るに向んとし。秋田縣より召さる。蓋し君曾て言ふ政治に、宗教に、興業に、商業に、東北地方は必らず足踏目眩せざるべからざるの地なり。會々此召あり。喜て來り。一等風に任じ庶務課長兼議事課長となる。明治廿年通常縣會を開くや。君は弁明委員たり。偶々議會を議。協はず中止の事起る。一時物議紛紜たりき。嗚呼是皆君の本意ならんや。勢ひ斯に至れるのみ。其年十二月河邊郡長に轉するや。郡内各村を巡回し。自治、教育、勸業、衛生、道路、兵役、諸稅等の村民

の最も注意せざるべからざる事柄を丁寧演説し。以て大に民心を喚起せり。翌廿一年南秋田郡長に移り。孜々として心を郡治に竭し。頗る善策する所ありしと云ふ。客秋仙北郡長に轉任し。赴任日淺く。未だ大に紀述すべきものを得ず。嗚呼仙北郡治の弊。根柢は以て利劍を試むるに足らんや。聞く君、客年帝國憲法の發布あるや。直ちに衆議院議員となる資格を作り。以て本年の撰舉場に唯唯を决せん。其れ或は然らんか。列傳氏曰く。蓋し土居君の夙に政海に立て。大聲疾呼。自由主義を唱道し。民心を喚起せしこと。世の既知する所なり。頃日人或は君を評して曰く。君は自治黨なり。又曰く君は國粹保存黨なり。然れども予輩の聞く所を以てすれば。嚮に後藤伯、東北漫遊の日は君親しく往て伯を訪ひ。加之ならず大同團結派の中江篤助、大石己巳、大江卓等の諸氏は。皆君が故舊たり。且つ我縣に在て。大同派中の重立ちたる大久保鐵作、目黒貞治等の諸氏は頗ふる親密の交りあり。而るを況んや君。自て自由主義を採て天下に唱道せし以來。未だ其主義を變換せしを聞かず。果して然らば依然自由主義を抱持するの士ならん歟。寧ろ君が再び政海に立ち。正々堂々主義を社會に發表するの機を俟んのみ。

大久保鐵作君傳

奥州の山。羽州の水。實に秀靈あり。將た明媚なり。豈一輩俊傑の士の此間に賑起するなからんや。抑々大久保鐵作君其人なるか。予此書を編述するに當り。首として君の傳を得んと

欲し。一日往て君を訪ひ。告ぐるに此舉を以てし。且つ其履歴を聞かんことを求む。君笑て曰く。余は今將に社會の歴史中に向て歩を進めつ。行かんとするものなり。今後の事は知らず。或は傳ふべきものあらんが既往に於ては更に語るべきなしと。善哉言や。然とも予の如く處を以てすれば。君が既往の經歷に於ても亦尋常と同じからざるもの、如し。豈傳ふべからずとせんや。因て茲に其概畧を掲記せん。君は舊佐竹藩士なり。祖父盛泰、頗る文武の業に精し。嘗て藩の顯職に任じ。奉仕年あり。父を盛春と稱し。後ち父職を襲ふ。亦藩費の出身とす。君弱冠にして根本通明翁の門に遊ひ。漢籍を攻修し。夙に篤學の名あり。且つ詞章を以て稱せらる。然れども君に在ては則ち緒餘のみ。又小野崎通亮氏等諸先輩と國學を講究し。群書に涉獵し。常に平田篤胤、佐藤信淵兩翁の人となりを欣慕せりと云ふ。既にして廢藩置縣。藩費も亦廢止に屬す。君、將來斯文の振はざるを憂ひ。且つ歐學の我縣に行はれざるを歎じ。明治四五年頃同志と謀り。拮据經營。共和義塾なるものを設立し。専ら英學を擴張せんと期し。一時殆んど一千余名の生徒を薰陶するに至り。後ち事故あり之を閉ち。君は同窓諸氏と東京に遊學せり。秋田私立英學の設立は蓋し該塾を創始とす。明治八年君、朝野新聞に入り。探航の業に従ふ。時に名聲忽ち走て都鄙の間に籍甚せり。會々新聞條例の發布あり。成島柳北、末廣重恭等諸氏と。前後相次て。圍圍に投せらる。同十年春父親の易費に遇ひ。秋田に歸展す。其秋又母親の不幸に罹り。爾來秋田に留り。同志を糾合して時事を憂憤し。青年を鼓舞して學事を獎勵す。政治的に教育的に大に其力を致せり。當時雜誌社と稱する團體あり。

我縣の有志者概ね之れが社員たり。世、濟、多士を賞す。而して君實に之れが牛耳を取れり。我縣に政論の勃興せしは則ち此時とす。同十四年有志諸氏と共に秋田日報なる新聞を創設し。君朝も筆を執て編輯事務を總攝せり。同十六年政友相謀り。秋田政進黨を組織し。獨立不羈以て天下の責に應るを期す。君又夙に奥羽七州聯合の策を講じ。憲を衝き。藩を侵し。風俗を掃り。雨に沐と。屢々東北諸州を巡遊して。以て共同團結の必要を説きしが。東北の形勢。靡然として之に傾向す。其年八月山形縣に於て東北留を開き。七州の人士會同して政治上に結合を計れるか如き。君が經營せし所最も多しとす。爾來各州輪番に開會し。客年四月(明治廿二年)其第八會を山形縣米澤に開くに至れり。之より先き君は秋田青森函館三縣の聯合新聞を設立し。以て東北政治上の機關に供せんことを首唱し。三縣の有志と謀り。青田の間に往來する頻々變回なるを知らず。且つ北海諸道の志士を連絡して政治上の運動を試んとし。福山江刺各地に遊説し。所在有志を鼓發し。明治十七年より同十八年に至る。殆んど一歳を奔走馳驅の間に費し。而して其功績の終に全く擧らざりしは。真に惜むべしと雖も。君が嘗て苦非常の勞力は。今猶ほ人口に藉く所なり。他日北海文明史を編纂するものは。必らず特筆大書すべし。同十八年春再び函館を東京に赴き。廣く天下の志士と交り。大に將來政治世界の洗滌振興を期せり。其秋秋田に歸るや。恰も縣會開設の期に際し。擧られて議長及常置委員となり。從來萎靡の面目。軟弱の風習を一洗し。而て雄然たる地方議會獨立の權利を維持するを以て己が任とせり。故に我議會改良進歩の最も著るべきものあるは則ち此時とす。抑々

君の議會に立つや。勉めて各地區々の情契を絶ち。以て管下一般の公利公益を推進するを目的となす。或は他の支山を省き。力を土木工事に致し。則ち國縣道路に開整修繕を加へ。以て往來交通の便を開けるの類。較々見るべきもの多し。而して我縣將來の文明進歩を期するは。獨り鐵道敷設の舉に在ることを唱道し。遂に之を議院に計りて。滿場一致の賛成を得るに至り。山形青森兩縣に通牒協議し。東北の脊體を貫通し。一大鐵道を興起せんことを企畫し。十九二十年の間は専ら此事に向て熱心奔走せり。然れども時機未だ熟せざるが爲め。終に其好果を觀ずと雖も。抑も我縣に鐵道敷設の輿論を喚起せしは。君を以て嚆矢となす。他日我秋田縣鐵道歴史に於て。君が首唱の功は。當に録して第一位に在るべし。

維新以降我邦政治社會の權衡は。太た其平均を缺き。怡も偏僻偏重の傾きあり。苟も我邦將來の文明富強を増進せしめんと欲せば。東北、鎮西相和し。相應し。蜻蛉首尾一致協同して。以て國家の大勢を維持せざるべからずと。君が夙に懷抱する所の經綸なり。是を以て往年、京に在るの日。常に鎮西諸士に當に計るべき其人を擇て之と交游し。肥、薩、豊、筑、有名の志士は。概ね君の知友たり。明治十有六年九州改進黨員諸氏の一行。奥羽地方を巡遊し。而して鎮西、東北、政治的、社交的の交際を親密ならしむるに於て。君、與て幹旋の力あり。諸氏亦頗ふる満足する所なりしと云ふ。君久しく内地漫遊の希圖あり。且つ親しく鎮西に入り。大に知友諸氏と謀る所あらんと。世運踴躍。其志を果さず。廿一年春蓋し前途に感ずる所やありけん。君は縣會議長及常置委員を辭し。決然袂を揮て。千里旅遊の途に上れり。而して東京

より直に鎮西に出で至る所に政友諸氏を訪問し。足跡殆んど九州の地に遍し。途次又長防藝備を經。更に四國に出で京坂及び東海諸道を歴遊せり。聞て我東北政治家の西遊は。君が此行を以て先鞭となすと。君の東京に還るや。會々後藤伯は既に東北漫遊を畢て大同團結を規畫す。怡も其所説の吻合するものあり。因て互に結托して以て前途の事を計れり。其年九月九州改進黨員肥後山に委員會を開く。君、艇舟再び九州に赴き。而して其會に臨み。共に將來を約して歸る。同十一月乃ち秋田縣會の開期に際し歸縣す。時に議會と知事との間に在りて。頗ふる紛議を生し。時論囂然たり。君來て議會に臨むや。鶴の一聲。知事の非行を攻撃し。忽ち滿場の賛成を得。遂に議案全部を否決し。役員の選舉を拒絕するに至り。即ち法律の問ふ所となり。議會は爲めに解散を命せらる。是に於て君は諸氏と與に秋田俱樂部なるものを組織し。政治上運動の機關となせり。同二十二年一月又東京に出で。天下の志士と左提右携、大同團結の事に尽力し。大同俱樂部なるものを設立し。君は其常議員として久しく京地に滞り。客年八月歸郷せり。嗚呼今や潛龍眠て東陸に在り。知らず君は將來に向て如何なる活劇を演じせんとするや。況や社會の多事日に頓煩を極む。君、豈起て之に應ずるの策なかるへけんや。予將に毫を洗ふて。君か向後の歴史を編せんことを。

列傳氏曰く。時務を知るは後傑の士なり。抑々大久保君の如き。其人にあらずや。聞く君常に二十一回猛士の風を愛し。東走西馳の間必らず其傳を讀し。風窓雨燈。時に出して之を讀み。以て無聊を破ふると。蓋し其資質自ら相感するものあるか。嗚呼二十一回猛士も亦

是世俊傑の士なり。惟た彼は傳を載て國軍に入る。眞に惜むべきなり。然れども其風
 に時勢を察し維新革命を唱せし偉功は手取逐に滅すべからず。今や時は明治二十三年
 の曉に属し。君の齡、未だ強に備たず。而して其國家に尽瘁せし事は、君を本處に構ふる
 所の如し。況んや前途の運動に於ける推して知るべきあり。我東北間より賑起し。第二維
 新の功業を成就するものは。君にあらざして其れ誰れぞ。君が滿腹の經綸。之を實地に施
 すの日も。將に遠きにあらざらんぞ。嗚呼君の技術廿一回。狂士に勝るか。將た時勢の同
 じからざるに由るか。予輩は惟た君か。莞爾として笑て。國會議場に入るに時を俟んのみ。

小田島由義君傳

政治家なるか。實業家なるか。抑も又軍務家なるか。予輩の未だ推俛するを得ざるは。小田島
 由義君なり。然れども其傳を讀まんば。自ら思ひ、半ばは過るものあらんか。君は舊南部藩
 士内田高孚の第四子なり。其家世、陸中鹿角郡尾去澤鐵山に住す。弘化二年十二月十二日
 生る。幼名丑太郎と稱し。年甫めて十三。同國同郡北輪田小田島由秀氏(南部藩士)の嗣とな
 る。因て今の名に改む。十二歳にして。盛岡(舊南部藩の城下)に遊學し。安永七年。年甫めて
 十八。家に歸る。之より先き養父由秀氏病没し。君乃ち家系を襲ふ。君、郷に歸りしより。以來
 五年。慶應三年の春。藩、學生を徵す。君、選れて貢士とす。藩費作人館に入る。明年明治戊辰
 の亂起り。郡内騷然。人心恟々たり。藩、兵を四境に派し以て敵の來るに供ふ。當時君、未だ

藩論の那邊に在るを詳にせずと雖も。既に其事態の容易ならざるを知る。且つ我鹿角郡の
 最も危急に属するを覺き。意謂らく碌々として書を窓下に讀むの秋ならんやと。決然巻を擲
 て起ち。郷に歸りて直ちに軍伍に入る。八月秋藩と戦ふ。君、一隊の長として先陣に在り。爾
 後専ら人民を鎮撫し、地方を警護すること任せり。既にして戦熄む。其十二月竊かに藩地
 け形勢を觀察せんと欲し。微行して盛岡に出づ。明年二月又更に農夫に仮装し。京に至り身
 を商估に擬し。居ると三四月。自ら感ずる所あり。勿く郷に歸り。深く紅塵を避け。家を母
 僻の地に移し。暫く社會の動靜を窺ふ。幾もなく藩主、封を白石に遷し。同時に郷士は擧て士
 職を解く。以來君も亦全く農に歸せり。明治二年鹿角郡を以て三戸縣の管轄を脱し。刈刺縣
 に属せしむ(之より先き廢藩置縣三戸縣と稱し而して鹿角郡は之に属せり)其年一月大參事
 國府義胤氏同郡を巡視し。君を抜て縣立鹿角學校寸陰館長に任す。後ち戶籍、社寺、山林、鐵
 山、主簿等の事を兼務するに至り。花輪支廳に奉職せり。明治五年江刺縣廢せらる。而して鹿
 角郡は秋田縣に属す。時に君は縣用を將て京に在り。蓋し君、夙に出京の志あり未だ果さ
 ず。今や幸に此機に遭ふ。且つ縣も亦廢せられたるを以て遂に京地に留る。同十一月工部省
 出仕となる。明年四月北陸諸道の鐵山凡そ七十八ヶ所を管檢し。同八月歸京し。又更に大藏、
 眞金兩鐵山に出張す。明年七月進て少屬に任す。十一月歸京し。同十年二月官制更革し。八等
 屬となる事と會計の事に任す。同十二月七等屬に進む。同十一年九月六等屬に任じ鐵山局に
 入り三池鐵山分局に在勤す。同十二年十一月工部省五等屬に任す。同十三年四月九州地方に

出張す。同十四年二月以降陸中國閉伊郡釜石鑛山分局に在勤す。翌十五年四月君、家事を以て職を辭し歸郷す。其年六月恰も縣會議員選舉會あり。君其撰に當ると雖とも。歸郷日淺く未だ地方の事情に通曉せずと稱し之を辭す。翌十六年又縣會議員補缺選舉會あり。再び高點を占め。遂に縣會議員となる。同十七年二月更に縣官に轉す。同三月秋田縣鹿角郡長に任じ。八等月俸を下賜す。同十八年一月七等月俸を下賜す。同十九年九月雄勝郡長に轉任し。奏任官六等に叙し中級俸を給ふ。同廿年四月正八位に叙す。抑も雄勝郡は養蠶を以て産となす。君、同地に赴任するに及て。専ら其業を隆盛ならしめんとを計り。自ら京積の地に赴き。蠶糸の販路を擴張する等。頗ふる周旋盡力する所ありき。同二十一年六月再び鹿角郡長に任じ。奏任官六等に叙し。上級俸を賜ふ。今や現に其地に在り。能く心を郡治に用ゐ。力を浩益に致すを以て。好評ありと云ふ。

列傳氏曰く。聞く君、人となり温厚篤實。且つ齡、言に壯を過ぎ。頗ふる世故に練熟せしを以て。絶て輕浮の言なく又急激の行ひなし。今や自郡の長として。熱心郡務に従事す。人望を博せりと云ふ。亦固に得難きの人と云ふべし。

渡邊小太郎君傳

政治家あり。政治家あり。渡邊小太郎君なり。君は實に我縣の政治家なり。君は舊南部藩士にして弘化三年十月十一日を以て陸中國鹿角尾去澤村に生る。(維新以後我縣の管轄に屬せ

り)幼にして武を好み常に勇壯の遊をなす。稍々長するに及て劍を學ひ腕力を以て任す。後ち同藩江幡翁(江幡五郎後に那珂通高と稱す)の門に入り漢籍を攻修し。益學年あり。明治元年會々家祿奉還の令ある。乘に先ち奉還して農に歸せり。明治四年四月竊に感する所あり。決然國を辭して北海道福山に遊び。商業に従事せしも。時世未だ可ならざるものあり。其志を果さず。去て函館に來り。居ること茲に幾年。是亦志の如くなる能はず。明治七年五月始めて東京に出て。北海道開拓の事に關する意見書を開拓使並に元老院に呈す。爾後少しく見る所あり。法律を研究し。明治九年五月東京府に於て。代言試験に及第し。以來代言の業に従事す。全十三年五月。司法省甲第壹號の布達あり。代言組合を設立し。正副會長を舉ぐるに當り。適々該組合中に黨派を生じ。互に撰舉を争ふ。君は同志諸氏と東京有馬學校に據て。競争を試む。別に星亨氏、高梨哲四郎氏の黨派あり。三黨恰も鼎立の姿をなし。而して撰舉するに及んで。元田直氏終に高點を占め。他は悉く失敗せり。同十三年親議會なるものを組織し。同志を糾合して自ら主幹となり。法律を研究し。傍ら演説討論に従事せり。同十四年來商工有志の需に應じ。數々商業演説をなし。以て大に商業社會の醉眠を覺破す。又大井憲太郎氏等と謀り。東京芝愛宕町青松寺に定期政談演説會を開く。以來政治上に向て奔走尽力すると十年恰も一日の如し。蓋し君は元來自由黨なり。而して謂らく代言人なるものは元より社會の上流に立つものなり。故に代言組合に於る勢力の有無は施て黨勢に盛衰に及ぶと明なりと。是に於て同志と謀り。同十九年春期代言議會を開くに當り。改進黨員中の代言人諸氏と大に論

議を開はし。竟に勝利を博し。同二十年二月常議員并に議長に擧らる。其年春開議會に於て松尾清治郎氏、組合會長に撰まれ。君は仁杉英氏と副會長に擧らる。然るに改進黨員中の代官人諸氏は大に之を憤り更に次會に於て。正副會長信任缺乏改進黨の議案を提出せり。時に君は議長席に在り。其議案の不當なる理由を弁明し。之を排斥せんとし。議場の議論は自ら兩派に分れ。甲論乙駁宛から亂麻の如く。將に腕力に及んとし。君は斷乎として動かす。終始一の如く。殆んど數旬の長きに涉り。改進黨員より提出せし議案は遂に輿論の排斥する所となりて止みぬ。是全く君が膽略に因るものなり。同二十一年井上伯條約改正の事に關し。在京有志諸氏と開化樓上に會す。實に九月十八日夜なり。而して地方遊說委員を撰定し。君は茨城地方遊說委員に擧げられ。同三十日發程す。然るに其前日、後藤伯を訪ひ。這回の改正條約草案は。決して我國利民福を増進する所以のものにあらず。率ろ之を傷害する太甚たしきものなることを詳述して去る。既にして茨城地方に遊說し。到る所に有志者の賛成を得。同十月三日歸京す。同四日非條約派有志大懇親會を殘草園遊館に開く。君、星亨、大石正巳、尾崎行雄、加藤平四郎、角田眞平諸氏と共に此會に向て大に尽力する所ありしと云ふ。又十月九、十兩日を以て。政談大演說會を開くことを決し。九日は無事に散會し。十日の演者は山川善太郎、吉田蘇六、尾崎行雄、大石正巳、星亨、諸氏と君を併せて六名なりき。第五席君は「明治元年の聖詔を讀む」て演題にて。侃々諤々論じ去り論じ來れる要領は。抑も條約改正の如き國家の重事なれば。國民たるもの。之に對して十分の意見を陳ふるは當然の事なり。然

るに我政府が却て之を掩蔽せんとするの傾きあるは。畏れ多くも廣く智識を求め。而して万機公論に決するとの。聖旨に背戻するものにあらずや云々の趣意なりしが。監警官は治安に妨害ありと認め。中止を命するや。數千の聽衆。一時に激昂し。場内騒然。恰も鼎の沸の如くなりき。警官は辛く之を制止し。壯士廿名を引致し。君は無事歸宅することを得たり。同十二日官史侮辱事件被告の召喚あり。同十九日公判開廷。翌二十日重禁錮十月罰金三拾圓の宣告を受け。君は之を不當として控訴し又上告すると雖も。皆採用せられず。終に銀治橋監獄に拘せらる。以て至る。實に明治二十五年五月三十一日なり。六月一日市ヶ谷監獄に送ら。即ち黒窓刑衣れ人となる。其夏秘密出版事件の獄起り。君は獄中より召喚を受く。而して素より君の預知せざることを以て。尋問一回にして事全く解く。其獄に在るや。嚴格方正。能く獄則を守り。且つ傍ら囚徒に讀書を教授し。頗ふる教化の功を奏せり。故を以て屢々賞票を得たり。同二十二年二月十一日畏くも我 皇帝陛下は帝國憲法發布の盛式を舉行し玉ふ。之れと同時に更に勅令を發して大赦の恩典を施す。是に於て君も亦無事出獄することを得たり。嗚呼世の中は三日見ぬ間に櫻ならぬも。君が鉄窓の下に吟嘯せし其間に政界は既に幾多の變遷を経り。其出獄するに及んで。或は別天異地の感ありしならん。加ふるに君は久しく獄中に在り。身体疲勞し。且つ病患を發し。爲めに順天堂醫院に入りて治を受く。維時政界の多事。殆んど名狀し難し。況んや大同剛結の大旗を新に東京に懸すあり。然り而て君が政友星亨氏等、屢々來て加盟の事を謀る。君初め別に見る所あり。容易に之を賛成せ

さりしが。後ち大井憲太郎氏等同志者數名を共に大同團結に入り。又更に東京俱樂部なる者を設立し。君、常議員に擧がる。幾もなく星氏は遠く歐米漫遊の途に上る。同五月に至り。大同派の大會あり。政社非政社の兩論勃興し。辨論數日。君は大井氏等と非政社論を首唱し。遂に兩論分立するに至り。君は大井氏等と大同協和會なるものを組織し。非政社派を團結せり。時に板垣伯出京し。之を先き大井憲太郎氏は關西地方に遊説し。君は小林樺雄氏の出席を求め。而して同伯に面して。我國前途經綸の大策を論陳せり。幾もなく伯は故山に歸る。適々官設鐵道拂下の説あり。加ふるに條約改正の事あり。然れども條約改正の事は。世人未だ詳知せざるを以て。専ら官設鐵道拂下の事に就き物議喧し。君曰く條約改正の事は。實に國家の危急存亡に關し。輕重緩急素より鐵道拂下の比にあらず。而るに之を論ずるもの甚た少れなるは。豈浩歎の至りならんや。慨然起て諸士に謀り。一日政談演說會を淺草園遊館に開く。諸士皆鐵道拂下の事を論ト。君獨り外交政略なる演題を掲げ。這回の改正條約を批難し。正々堂々數千言に涉り。大に聽衆の喝采を博せり。又更に有志者を謀り。相談會を開き。條約改正中止の事を建議せんと欲す。異論頗ぶる多し。君憤然として曰く。條約改正は國家の重事なり。苟も日本國民たるもの。豈黙止すべけんや。余は一人と雖も之を建議せん。因て植木枝盛、曾田慶三郎氏等と共に。建議書を叩し。遂に元老院に捧呈するに至る。實に七月七日なり。以來東奔西馳。殆んど寢食を忘れ。誓て這回の條約改正を中止せしめずんば止まざらん。嗚呼君の國事に熱心なる誰れか感賞せざらんや。同七月下旬大井憲太郎

氏、大坂より歸る。告ぐるに建議の事を以てし。氏も亦深く之を賛成し。倍々進て全國の輿論を喚起し。以て條約改正を中止せしめんと期し。氏并に小池平一郎氏等と謀り。條約改正中止論者大懇親會の事を首唱せり。而して君は其事務を諸氏に委託し。同八月東京を出發し。東北に漫遊せり。即ち宮城、岩手、秋田、山形、諸縣に遊び。到る處其有志者と會晤し。國家前途の事を談論し。同十月一日無事歸京せり。然るに有志輩は同七日を期し。條約改正中止の大演說會を中村座に開くの議あり。君、長途の勞を省るに違まらす。同日臨席し。政治思想の改良なる演題を論述し。給旨剴切、頗ふる時事に適し。大に聽衆の感動を喚起せりと云ふ。爾後君は秋田大同俱樂部に入り。又自郡より秋田縣會議員に擧がる。唯た客冬の縣會議場に於て。君の名論卓説を聞かざりしは。些しく遺憾とする所なるのみ。聞く君は以來自由黨再興の事に盡力し。先づ板垣伯の意見を問ふべしと。有志者中より委員二名を撰定し。君、大井憲太郎氏と之に任し。客年十一月七日、東京を出發し。同十二日高智に着し。親しく伯の意見を叩けり。而して更に同十二月中旬を期し大坂に會合の事を約して去り。同十七日着京し。既に其期に及び。君、大井氏等と大坂に參會し。然るに板垣伯は愛國公黨の議を提出し。以て大同團結、政社派と非政社派との調停を試む。君は起て之を賛成し。爾後歸京し。専ら愛國公黨組織の事に向て盡力中なりと云ふ。

列傳氏曰く。渡邊君は政治家なり。將た君は熱心なる政治家なり。君か多年政治社會に運動せし歴史は。予輩の敢て遺れざる所なり。然れども既往の歴史を以て。直ちに前途の標

準をなすを得ず。嗚呼世豈難逢なからんや。況んや野界の譽遷に於ては最も著るべきものあり。請ふ君再思せよ。然れども君は老練家なり。若し子輩昔口小兒の言、以て取るに足らずとせば。予輩復何をか云はんや。

川井忠雄君傳

雄飛雌伏、豈時なからんや。聞く川井忠雄君は、英邁の士なり。活潑の人なりと。然るに觀く其人に接するときは大いに異なるものあり。是焉を雄飛雌伏、自ら其時あるものにあらずるを得んや。君は舊佐竹藩士。天保十四年生る。幼にして鋭敏、頗ふる氣概あり。安政六年九月出て藩侯に仕へ大小姓となり、藩費明德館に精學を兼ね。元治元年八月藩侯に扈從し。東京に抵役し、明年三月歸國す。應慶二年二月明德館書記に任ず。明治元年奥羽春秋兩度の役。君、皆從軍し。前には斥候たり。後ち戰士利頭を命じ小隊長たり。一日奮然として曰く。男兒軍に臨む、先鋒たらずんば、何の益かあらんやと自ら請て先陣に加はり。接戦廿四回、就中九死に一生を得たるもの七回。鎮定の後、功を賞し。小銃一挺、銀十五枚を賜ふ。其年十一月秋田藩大目付に任じ、爾來運綿して顯職に在り。同三年八月秋田藩大風に任じ公用人を命せられ上京す。明年春夏之交、古賀氏等の獄起る。我輩初無敬治、中村無助諸氏、前後相隣て。閉園に投せらる。君も其嫌疑に坐し。職を免之藩邸に幽せられ。訊問數回。同年九月遂に無罪の宣告を受け。十月秋田に歸る。同六年七月第三大區區長に任ず。同七年三月請ふて其職を允

さる。同四月事を將て京に之く。同九月敦賀縣十二等出仕に任じ。同八年權中屬に任ず。同九年八月廢廳。奉職中の賞として金若干圓を賜ふ。同年九月石川縣十一等出仕に任ず。同十年七月判事補に轉之。金澤裁判所詰を命せらる。同十一月弘前裁判所詰となる。爾來或は本庄區裁判所長となり。或は秋田支廳長となる。同十四年十月會々舊主家の事あり。君は我藩士族一千余名の惣代として上京し。幹旋尽力、其功頗ふる多しと云ふ。同十五年二月檢事補に任じ。東京始審裁判所詰に移る。同十六年六月大藏省屬に任じ。同十七年八月鹿兒嶋縣屬に轉じ。農商課長兼授産場長となる。同十八年六月秋田縣仙北郡長に任じ。同十九年九月同縣平鹿郡長に轉任し。奏任官六等に叙し。上級俸を賜ふ。同廿年某月正八位に叙す。同廿二年七月同縣河邊郡長に轉任し。以來日猶淺しと雖も。郡政能く理り。治績頗ふる譽る。因て大に民望を得たりと云ふ。予輩豈亦國家の爲めに欣然たらざらんや。附言。君の或は窮民を救助し。又は職務勉勵として。木盃及び金圓等の賞を賜ふこと數回。一々列記せんふは。徒らに冗長に渉る故に茲に之を畧す。

列傳氏曰く。川井君は。夙に風流文雅の士たり。日本刀及び珍書奇畫の類。處藏頗ふる多し。是を以て人或は君を評して曰く。川井君は。英邁の士。活潑の人。然れども今や齡、不惑を過く。豈復昔日の川井君ならんや。悠々自適。即ち風流文雅を樂むものなりと。或る人以て君に語る。君笑て曰く。余の美術品を坐右に陳するは。古人の精神を愛觀し以て胸中の積鬱を散するに過ぎざるのみ。物品何ぞ志氣の盛否に管せんやと。知るべし君が平生の豪

氣は未だ全く除かず。陰然別に貯ふ所のものあることを吁々。

金澤松右工門君傳

智慧ありと雖も。勢に乗るに如かず。磁基ありと雖も。時を待つに如かず。金澤松右工門君は此語を服膺するものにあらざるを得んや。君は南秋田郡土崎港町の人にして、世々一郷の豪商たり。兄某天死し、君、二男を以て嗣を承く。畜性孝順。殊に活潑進取の氣象に富み。荷も自ら之を爲さんとす。敢て他人の毀譽褒貶を顧るに違あらず。其商業戰場に立つに當てや。擧拔奇敏。恰も良平の妙あり。故に君が家は君の代に及んで。倍す資財を増殖せりと雖も。常に父母の訓戒を守り。堅く驕奢佚樂の風習を禁せり。然れども事荷も公益に關するときは。金銭を擲つこと。宛も土芥の如く。毫も之を吝むの色なし。明治戊辰の役。奥羽の諸藩、錦旗に抗敵して。我藩獨り大義を採て賊中に孤立し。四境敵を受け殆んど危急に迫る。君奮然として曰く。是誠に國家の大事なり。我輩、身商家たるも。安ぞ黙々として此大事を坐視するを得んぞ。因て父松右衛門君に對し。明かに心事を告げ以て從軍れ事を請ふ。松右衛門君之を留めて曰く。汝の志は實に好みすべし。汝戰場に臨み一兵卒を斃すも猶ほ我家の光榮たる大なり。然れども汝は元是商家の子のみ。兵戈戰闘は。豈汝の長する所ならんや。然れば汝は徒らに白刃一閃の下に命を損さん上り。退て家政を理し専ら經綸の事に任じて。軍費の幾分を補はば。豈國恩万分の一を報するに足らずとせんや。善何の功向を良平の下に在ん。

汝、再思せよと。慰諭懇到。是に於て君も亦豁然悟る所あり。而して遂に其言に従て。從軍の念を断ち。直ちに金百九十兩を出して軍費に献納し。藩侯之を賞し。姓氏を用ゆることを許す。(藩制商家にして姓氏を用ゆることを禁じたり)實に慶應二年二月なり。次て三月に至り戦亂愈々激しく。物情紛紜たり。加ふるに秋田城外舞馬の災を以てし。庶民殆んど寒餓に苦む。君、金六百五十兩を献じ以て窮民救助の資に供す。藩侯之に獨禮用達を命じ。更に二代帯刀を許す。同五月又軍費として。金百五十兩を獻じ。因て永代帯刀を許さる。明年九月又金三百七十兩銚七百貫目白米九十四俵玄米八十八俵寢具八十八人分を獻じ。藩侯親しく賞詞を賜ひ。且つ居下御免となる。明治元年四月又金七百兩を獻じ。藩侯之れに扇章上下衣を賜ふ。同四年四月我藩軍艦を購はんとす。君、金二千七百兩を献せしに因り時服を賜ふ。明治維新以來倍々其志を勵し。力を公益に致し。明治九年四月、窮民救助として白米六石六斗を獻じ。木杯一個を賜ふ。同八月土崎小學校新築費として。金五拾圓を獻じ。木杯一個を賜ふ。同十三早七月會々土崎市街祝融の災あり。君、金貳百圓を献して以て窮民救助の費に充つ。銀盃一個を賜ふ。同十一月土崎警察分署新築費として金百圓を献し。銀盃一個を賜ふ。同十四年七月、聖駕東巡の日。世話係として専ら周旋尽力せしを以て酒饌料を賜ふ。同十月土崎港町及び相染新田村窮民救助費として白米三十三石五斗五升を獻じ。銀盃一個を賜ふ。同十九年四月秋田市街回祿の際。窮民救助費として。金百八拾圓を獻じ。三層木杯を賜ふ。同十一月相染新田村火災あり。金貳拾圓を獻じ。木杯一個を賜ふ。同二十二年三月南秋田郡役所新築費と

して金拾五圓寄附し。木杯一個を賜ふ。之より先き明治十六年三月君、第十學區學務委員に任じ。兼て學務委員に任せらる。然るに君、夙に見る所あり。幾もなく職を辭して。遠く漫遊の途に上り。先づ東京より。京坂地方を歴遊し。各地商業の實況を視察し。數旬にして郷に歸るや。彼の繁劇なる商務を學て。當舖に委託し。笠岡村邊に美田數百町歩を購求し。而して新居を其傍に卜し。遠く塵煩を避け江山風月に吟嘯し。悠々自適。復俗事を顧みざるもの如し。是果して眞なるや否や。

列傳氏曰く。金澤君は。既に國家の爲めに一身を銃丸の下に致さんとし。家台、之れを留め君も亦翻然悟る所あり。忽ち其言に従ふ。以來幾年にして而して其國家の爲めに尽瘁せしこと。何を當に百戰の功れみならんや。嗚呼此父にして此子あり。此子にして此父ある。豈感賞に堪へんや。惟た君か近狀に就て或は之を訝かるものありと雖も。今や世は十九世紀の末季に屬し。君は有爲の志を拘き將た有爲の才を職せ。豈徒に桃源夢裏に老朽するものならんや。其時機を俟て雄飛せんとするや。固より疑ひを容れざるなり。

勝又平太郎君傳

明治二十二年二月十有一日。畏くも我皇陛下は憲法發布の盛典を舉行し。五ふ。君は是千載の一時と云ふべし。然り而して各府縣會議長は皆其式に參せしが。我獨り縣會は解散中に

在り。之に預ることを得ず。嗚呼我縣六十餘萬人民は一人の此盛式に參加するものあらざ。豈千古の遺憾にあらずや。是に於て慨然案を拍て起ち。雪路岐嶇。百五十里。單身騎下に馳上り。我縣民に代て。誠衷を具狀せしは。勝又平太郎君なり。嗚呼君の熱心、固に想ふべきなり。君は鹿角郡毛馬内町の人。(舊南郡藩)父を周治と稱し。劍道一流の師範たり。嘉永五年五月廿九日生れて慈母を喪ひ。義母の手に成長す。資性温厚篤實。幼にして父に従ひ武を講じ。夙に穎敏の稱あり。明治維新の後ち。郷士は一般農に歸し。故に氏も亦農籍に入る。明治七年小學校役員となる。同八年辭職す。同九年會々地籍調整の事あり。君、総代となる事了て職を解く。同十年十月初めて町村に公撰總代を置く。君、其撰に當る。同十二月學校世話役に兼任す。同十二年三月秋田縣會議員に擧らる。同十三年二月學務委員に撰任す。同十四年二月事を將て京に之く。因て縣會議員及び學務委員を辭す。同十五年再び縣會議員に擧らる。辭して受けず。同九月警察分署新築の際。大に尽力せしを以て。褒狀を賜ふ。同十六年畜産協議委員に撰任し之を辭す。同十七年二月縣會議員に擧らる。同十八年臨時縣會に於て副議長に擧らる。同八月村會議員諸氏と謀り。村會議場のテーブル椅子其他器械物品を寄附し。褒狀を賜ふ。同十九年山林共進會に出品し褒狀を受く。同二十年九月縣會議員を辭す。同月所得稅調査委員に擧らる。同二十二年二月君、單身風雪を侵して東京に出て。曠前絶後の盛式に我縣人民、一人の參加するを得ざる遺憾の情を具陳し。特に縣民總代人の參列を許されんことを切願し。夙夜奔走、或は内閣に候し。又或は官内

省の門を叩き。君が熱心尽力に至らざる所なしと雖も。竟に其志を遂ぐる能はざりしは亦已むを得ざるなり。而して事、遠く九重の天に達し。畏くも。皇帝陛下の親裁を煩し奉れるに至れるは是全く君が熱心尽力の致す所と謂ふべし。縣民たるもの。君に向て深く之を謝せざるを得ず。幾もなく郷に歸り。又縣會議員に擧らる。同四月郡徴兵參事員に遷任す。輒近我縣鐵道敷設の議あるや。君、夙に發起人として大に尽力する所ありと云ふ。亦其財產家たる知るべし。

列傳氏曰く。勝又君は熱心家なり。財產家なり。君、既に熱心と財産の二者を併有し。政治にまれ事業にまれ。苟も進て大に爲さんと欲せば。何の難きことあらんや。嗚呼鹿角に角を争ふは。中原、鹿を争ふに孰與ぞ。然れども是亦君の資性の然らしむる所。已むを得ざるものある歟。吁。

奈良茂君傳

富て驕らざると。貧ふして諂らはざると。兩ながら豈容易の事ならんや。抑も奈良茂君の如き富て驕らざるとの所謂る傑士と稱すべし。君は南秋田郡金足村小泉の人なり。其先喜兵衛君弘治年中。大和國奈良來りて此地を開く。因て奈良を以て氏とす。父喜兵衛君(世々家系を襲ふもの皆喜兵衛と稱す)に至るまで凡十餘代世々農家たり。祖先以來屢々金穀を献す。功に由り。天保年間士籍に列し。海防衛士に加へらる。文久年中父喜兵衛君致仕

し。君、即ち家系を襲ふ時に年二十五。嘉永の年、金千七百兩を献す衛士たることを免かる。明治元年我藩軍艦を購はんとす。君、金三千兩を献じ以て其費に供し。又軍糧に充て米千石を献じ。賞詞を賜ふ。又金七百兩を藩侯の内府に献じ。時服を賜ふ。明治七年君、其家祿を擧て朝廷に獻納せり。蓋し金穀を獻せしは。世間其人に乏しからず。家祿を擧て尽く之を獻したるは。君を措て復あるべからざるなり。因て褒狀及び銀杯を賜ふ。其文左の如し。

其方儀深く方今の御趣意を奉体し且つ内外御國事多端公費非常の秋に際し給祿現米九石悉皆獻納候段頗ふる奇特の至候依之爲褒賞目録の通り下賜候事

明治十一年西南の役。君、綿撤糸用として。白木綿貳百反を獻じ銀盃を賜ふ。同十四年聖駕東巡の日。我縣第六勸業場内に御小休所を建設し。風箏を奉迎し。三層天盃及び金五拾圓を賜ふ。同十六年皇居御造營の際。櫻埋木を獻し褒狀及び木盃を賜ふ。抑々君の窮民を救恤し。或は又罹災者の爲めに。財を投し資を與へ恩を施し慈を布たる事實は。一々枚擧に追まわらず。且つ君は數々縣會議員に擧げられ。若くは其他の職員に任せらる。も。嗣子尙幼にして家政を整理するに堪へず。加るに同族子弟を教養するの重任を負擔するを以て辭して受けず。故に其功の赫々世間に開ゆるなきは。常は自ら遺憾とする所にして。更に時機を俟て。大に運動する所あらんとすと云「聞く君、世の富豪子弟の動もそれは驕奢を誇り。將た浮華に流れ。終に祖先以來拮据經營せし巨万の財産をも。一朝空しく烟散霧

消に歸せしむるに至るもの。往々にして之あるを目撃し。深く自ら戒むる所あり。専ら驕奢を禁じて節儉を勤め。身を以て家を率ひ。施て一門同族に及ぼし。是を以て一門同族皆繁昌に赴き。君が家は亦倍々富豪を重ね。實に管内一流の財産家たりと云ふ。

列傳氏曰く。奈良君の財産家たることは。世の既に知る所なり。而して能く自ら節儉を以てし。施て一家一族に及ぼし。一家一族、皆繁昌することを得。畢竟するに君が至徳の致す所。豈亦感賞せざるべけんや。惟た憾らくは未だ赫々、世間に煥發するの偉業を睹さることを。嗚呼蛟龍、終に池中の物にあらず。君が飛て天に昇るの日も。迷きにあらずるべき歟。

成田直衛君傳

智識に富むものは。概ね財産に乏しく。財産に富むものは。概ね智識に乏しきは。世間滔滔皆是なり。成田直衛君の如き智識と財産の二者を兼有するものなり。豈幸福の人と云はざるべけんや。君は北秋田郡鷹巣村の士なり。嘉永元年九月某日生る。幼にして文武兩道を講じ。安政四年父に隨て山本郡能代港に移住す。(當時我藩、士族を各港に移住せしめ以て海防に備ふ)以來倍々文武を勵み。拮据年を積み。其業大に進み。嶄然同儕の間に頭角を顯せり。明治戊辰の役從軍功あり。藩侯刀一口を賞す。同五年海防の成兵解く。君も亦郷里鷹巣村に歸る。同六年東都に負笈し。漢洋二學を兼修し。映雪照螢殆んど三歳を閱

して歸郷す。同九年戸長となる。同十年秋田縣十五等出仕に任ず。而して勸業の事を視察の爲め上京し。留まること數閱月。君が此行勸業事務に於て頗ふる得る所ありしと云ふ。其年官制改革し。更に十七等出仕に任じ。次て十等屬となる。同十一年職を辭し。是より孜々として民間の事業に尽力せり。又同郡諸氏と謀り。眞契社なるものを設立し。而して君、之れが社長となり。演說討論に従事す。蓋し我縣の北部に政治思想の發起せしは。之を創始となすと云ふ。君又殖産興業の我縣に急務なるを感し。牧場を開設し。牛馬數百頭を飼養せり。同十二年府縣會の開設あり。君其郡々議員に舉らる。次て議長に任ず。同十三年議員半數の改選あり。君、再び議員に舉げられ。次て議長に任ず。又畜産協議委員及其會頭となる。同十四年始めて府縣會に常置委員を置く。君、之に撰任す。同年聖駕東巡し。君、自ら數千金を擲て。行在所を新築し。鳳輦を奉迎す。因て三層銀盃、紅白羽二重二疋、金百五拾圓を賜ふ。同十五年縣會議員半數改選し。又議長に舉らる。既にして自ら謂らく議長は豈我事有物ならんやと。自ら其職を辭す。同十七年農商務省諮問會員を命せられ。出京し。君、曾て謂らく上海は東洋の一大貿易場也。苟も國を思ふ者は必らず一往、其實況を観察せざるべからずと。而して該會結了に及ひ。遽然橫濱を解纜し。鵬程万里。上海に航行し。而して親しく彼地の實狀を探檢し。歸路四國九州及び山陽山陰等各地を歴遊し。政治并に産業等の狀況を查察して還る。同十八年本縣勸業諮問會員を命せらる。同十九年秋田縣山本郡長に任じ。奏任官六等に叙す。同廿年正八位に叙す。同二十一年各郡長總代として宮城縣外一府八縣水産

共進會に出張す。聞く君の山本郡長たりしより。較し治績の觀るべきもの多く。民望頗ふる盛なるありと。抑々君の山本郡に於る第二の故郷とも云ふべし。故に其郡に長として而して民望を博せしは。或は由縁なきにあらずと雖も。安んずる君の長所にあらずと知るを知らんや。附言君が公益の爲めに義捐寄附せし金額は殆んど數千圓。因て受くる所の銀盃并に木盃等十有餘箇其他瘡狀の類。枚舉に遑まらずと。謂ふに君の資格を以てするときは固より當に然るべきなり。

列傳氏曰く。成田君は老練の人なり。着實の士也。故に其一舉一動も必ず再思三省を俟て而して後ち行ふや必せり。近頃我縣の中正黨てん政黨の出現せるあり。而して是は専ら君が唱道組織に係るものなりとは。予輩の夙に聞知する所なりしが。這回君は愈々其職を辭し。我こそは中正黨員なりと。名乗りて政治戰場に躍り出てくるは。天晴勇士の振舞なるが。果して然るときは彼れ中正黨の勢力の消長は忽ち君が榮譽に影響を及ぼすは免れざる所なり。噫中正黨の起る。日尙は淺し。予輩遠かに君の價値を上下するを欲せずと雖も。將來必らず之を論評するの機あるべし。阿々。

野出銷三郎君傳

柔能く剛を制し。弱能く強を制すとは。野出銷三郎君の謂ひ歟。君は元會津藩野出旭溪翁の第三子也。安政五年八月十一日岩代國北會津郡若松に生る。資性温和篤實幼にして文武の業

を好み。七歳始めて藩塾に入り。踰數年を積み。明治戊辰の役。年甫めて十一にして。家翁に從軍の事を請ふ。家翁許さず。一夜入定る筈に其家を脱し。猪苗代口陣中に赴けり。蓋し其幼より俗兒と異なれる知るべし。明治三年藩疾。封を斗南に遷し。君、家翁と皆隨て移る。以來夙夜經史を講究し。奈何せん斗南地僻にして師友に乏しきを。常に以て憾となす。家翁亦其子弟を教養するの地にあらずと。因て家類を携へ。本縣由利郡本庄町に移住せり。實に明治四年なり。其年君は東北諸州を歴遊し。到る處有志者を訪ひ。時事を談論せり。君か此行頗ふる見聞を博ふし。大に得る所ありしと云ふ。既にして自ら謂らく苟も將來社會に爲すべしとせば。必らず専門の學科を講究せざるべからずと。是に於て法學を研究し。夜以て晷に繼ぐ。同十三年代官規則改正し。君、年來練磨せし利劍を實地に試むるは則ち此時なりと。驟起。試に應じ。即ち狀師となる。同十五年更に見る所あり。東京に負笈し。業務の餘暇法學專門の博士學士の門に出入し。法律を研磨し。傍ら英人に就て英學を講習し。又我邦法學の不振を歎じ。新聞に演説に之を論ずること數々なりと。遂に同志を糾合し法律研究會なるものを設く。同二十年春期代官人組合會議に於て常議員に舉らる。其夏東京法律質議會の幹事に任ず。之を先き大井憲太郎氏等國事犯の獄起り。氏外數氏各々所刑あり。氏等之を不當とし。大審院に分疏し。君に代官の事を囑托せり。同二十一年四月公判開庭也。君、屢々大審院に出頭し前裁判の不當なる所以を痛論駁撃し竟に其全部を破毀し名古屋重罪裁判所に移すに至れり。君の功や大と云ふべし。其夏、法學友會の常議員に撰任せらる。蓋し法學博士

名士列傳

學士代官士等を以て組織せしものなり。同十一月大井憲太郎新井章吾兩氏、再上告をなし、君、復之れの代官弁護をなせり。同十二月後藤伯を始め大同團結派の在京諸氏と協議し。火曜會なるものを設立す。又或は東關各地に遊歴し。大同團結の事を唱道せり。同廿二年大同團結派の諸氏と謀り。東京俱樂部を組織し。次て常議員に擧らる。同七月由利郡に歸省す。時に條約改正の事、我邦の一大問題となり朝野議論、轟々噴々たり。君亦這回の改正卿案に我國權を毀損すること太甚たしきものあることを論辨し。由利郡内各地に遊説し。施て河邊郡に至り。有志者の賛成を得。遂に兩郡有志者數百名の総代として出京し。條約改正中止の建白を元老院に捧呈せり。爾後條約改正は暫らく延期となり。而して君は倍々奮て國事に尽力しつゝあると云ふ。

列傳氏曰く。蓋し野出君の容貌言語。温和篤實。一見誰か復君の此政海狂濤激浪の間を進行するの勇士たるを知らん。然るに翻て其行事を觀來れば頗る驚喜に堪たるものあり。而して聞く君は更に前途に向ひ愈々奮て將に大に爲すあらんとし。現に本年の帝國議會に於ける。君は我縣某選舉區候補者の一人として。擧場頭に躍り出んとす。是に至て予輩は倍々君が勇氣に服せり。嗚呼。婦人の如く張子房あり。何を敢て君に怪まんや。

麓長 治君傳

曾て我縣會議員中、着實家を以て稱せられしは。麓長治君なり。君は北秋田郡扇田村の人。天

保十三年生る。世々農家たり。然るも君が祖先、佐竹家に功勞ありしを以て。特に苗字佩刀を許し三人口を賜ふ。幼少好て國典を讀み。頗る得る所あり。奥羽戊辰の役、從軍功あり。一人口を賞す。明治三年阿仁地方十六ヶ村親郷肝煎に擧らる。同六年秋田縣第二大區六小區戸長に任す。同七年五月徵兵議員となる。同八年九月秋田縣第二大區副區長兼學區取締となる。同九年秋田縣第十一番中學區取締業務を命せらる。同十年九月秋田縣學務御用掛補に任す。同十一年職を辭し。畿内諸道に遊歴す。同十二年三月秋田縣北秋田郡扇田村外四ヶ村戸長に任す。同七月北秋田郡書記に轉す。同十三年之を辭す。同十月秋田縣會議員に擧らる。同十四年常置委員となり。次て地方衛生會員を兼ぬ。同十五年五月秋田改進黨常議員となる。同八月秋田縣山本郡長に任す。同十六年二月慈母病に罹り職を辭して家に歸る。同十七年再び縣會議員に擧られ。又常置委員及地方衛生會員となる。同十八年九月秋田縣勸業諮問會員に任せらる。同廿年十二月縣會議員半數改選の期に會し再び議員に擧られ。次て常置委員、地方衛生會員となる。同二十一年四月感する所ありて常置委員を辭す。同十一月再び常置委員に擧らる。辭して受けず。同廿二年一月縣會解散し。以來君は常に扇田村に盤居し。復俗事の胸懷に入るなすが如し。知らず其養ふ所果して何をに在るや。

列傳氏曰く。麓君は我縣の老政治家なり。曾て秋田改進黨に在りて幹事たり。又常議員となり。頗る諸々の名ありき。今や國會の國期は。既に明日に迫り。政治社會は日一日より將に多事を加へんとす。然るに君は悠然として米白川の傍に退隱し。實に風塵を避て閑日

月を送るものか抑、亦別に大に期する所のものあるか。嗚呼英雄、人を欺く。予輩は君の心事の果して那邊に在るを知らず。

安達永藏君傳

集めて散することを知らざると。散して集ることを知らざるとは。皆以て經濟を知るものと云ふべからず。能く集め能く散じ始めて經濟を知るものなり。抑も安達永藏君の如き眞に經濟を知るものと云ふべし。君は北秋田郡二井田村安達辨藏君の第二子也。嘉永四年八月四日生る。伯父清左衛門君子なく君を養て嗣となす。君、八歳より十七歳に至る前後十年。大館町高橋専右衛門氏の門に遊び文學を研究す。既にして家系を承繼し。能く家訓を守り。専ら節儉を旨とし。以て一身を修め。以て一家を率ひ。是を以て遂に一郷の模範となり。一郷靡然として謹儉の風に向ふ。蓋し君、蕪陶の力に因るもの也。明治四年國家多事。君、金一千圓を藩疾に獻す。明治九年教育令の發布に由り。新に學校を各村に設くるの際。金五拾圓を獻じ。木杯一個を賜ふ。更に金拾五圓を區内の學校に獻じ。又木杯を賜ふ。同十二年二月十五日戸長兼學區取締に任せらる。同六月四等郵便取扱を命せらる。同十三年十二月三十日金五圓を警察署に獻じ賞狀を賜ふ。明治十四年 聖駕東巡の日。御用係となり。一關寅之助氏と謀り。陳場岱に御休憩所を新設して以て風益を奉迎す。因て其功を賞し金百廿五圓白羽二重二疋を賜ふ。同十月扇田村警察分署新築の際。金七圓を獻じ賞詞を賜ふ。同十五年九月道路橋梁

新築費として。金七拾圓を獻じ三層木杯を賜ふ。同十一月再び扇田村警察分署新築費として金三圓を獻じ賞詞を賜ふ。同二十一年三月公立大館病院建築費として金五圓寄附せしを以て賞詞を賜ふ。同七月米白川筋損所修繕の爲め人夫百人寄附せしを以て木杯一個を賜ふ。去十六年公立大館病院設立以來。君は聯合會員となり。又市町村制の實施あるや。村會議員に擧がる。同廿二年五月更に村長に任ず。之を先き明治元年。所有田地三町五反五畝十五歩を同姓及び其部下の小農一百餘人に分與し。以來貯蓄して以て不圖火災に備ふ。初めは其食を以てせしも數年の久しき。頗ふる巨石に達し之を入る。能はず。遂に倉庫を新築して以て純然たる基本財産となすに至れり。君が村民の爲めに尽力の功大なりと云ふべし。

列傳氏曰く。世の會長と稱するもの。多くは小民を害し。動もすれば小民の利益を奪ふて。以て自己の利益に供す。是を以て小民心、窃かに之を恨み之を憤るを雖も。其力の足らざる。如何ともする能はず。齒を切り腕を扼し。常に報復の時を俟つもの所在皆是也。安達君は然らずして之を愛育すること。宛も慈母の赤子に於けるが如し。村民其徳を欣慕して已まざる。亦宜べならずや。

佐藤三次君傳

輕快なる辨舌。瀟洒たる風采。我縣會議員中、一見すれば則ち佐藤三次君なるを知る。君は舊矢島藩佐藤三平君の長子なり。安政四年十二月由利郡矢島に生る。幼にして穎敏。廢藩置縣

の際。諸藩の士、競ふて農商の業に従ふ。君の父も亦君を商估たらしめんと欲し。君も同郡鹽越港某の許に遊りて丁稚となす。君、時に年甫めて十三。居ること茲に數年。謂らく商估となり徒らに錙銖の利を争ふ。豈我志ならんや。如うす去て學業に就き以て他日青雲の地をかざらんにはと。斷然意を決し。走て家に歸り。父に向く具に其實を告げ。之を請ふ切之。父其止むへからざるを知り之を許す。同藩今井翁の門に入り。漢籍を講究し。既にして又謂らく將來世に所するには洋學を修めざるべからずと。因て之を父に請ひ笑を東京に負ひ。中村敬宇翁の門に入る。實に明治九年なり。以來筮壘幾年。同十二年春教員某と議論合はず。去て慶應義塾に入り。同十三年秋卒業し。同憲諸氏と謀り。講究會を設立し。學術を研究し。居ると數卷寫。其間或は論文を草して新聞社に寄せ。又傍ら翻譯も從事す。或は各地に漫遊を試み。學術と實踐と兩ながら大に得る所あり。一日友人に語て曰く。我邦の東京は恰も佛國の巴里の如し。獨り政權の集點なるのみならず。智識も財産も皆集點たり。是を以て東京は日に繁榮に赴き。地方は月に衰頽に屬し。今にして之を救はずんば。終に我邦の大患を醸成すべし。如かず各自去て郷地に歸り以て之を救ふの策を講せんにはと。諸氏皆曰く善し。是に於て同十七年君は故郷矢嶋に歸る同郷の有志諸氏相謀り。某會を組織し。君を推して之が會長となし。學術を講究し。傍ら演說討論を研磨せり。其秋由利郡選出、秋田縣會議員の補缺選舉に會し。君、議員に舉られ。以來連續して。縣會議員たり。聞く縣會議員の定期改選毎に。君は最高齡を占むと。且現に常置委員に任じ。而して衛生會員を兼ね。蓋し縣會に在て議論の細密仔

細なることは。我議員中恐らく比ひ罕なるべし。列傳氏曰く。佐藤君は眞才子なり。故に其伎倆は處として不可なるなし。今や既に縣會議員として而も辨々の名あり。然れども翻て之を思ふに。君の家君、曾て君の商估たらんことを欲し。君、之を辭きて去る。予は蓋し君の爲めに之を惜むもたれなり。竊に謂ふ當時君は未だ三田老翁に學ばず故に然りしにあらざるか。嗚呼人生榮達何ぞ必らずしも青雲にあらんや。若し君之を疑は、去て三田老翁に問へ。

坂本藤兵衛君傳

富は倚頼を凌ぎ。兒は仲謀に駕す。幸福、君の如き世、比ひ罕なり。坂本藤兵衛君は平鹿郡増田村香澤甚兵衛氏の四男にして。天保十年三月十五日生る。幼名徳四郎と稱し。資性溫和にして。最も理財に長じ。専ら儉約を務む。然れども敢て亦鄙吝に陥ひらず。万延元年千屋村故坂本藤兵衛氏の養子となる。明治十二年父藤兵衛氏病卒し。即ち家系を承け且つ其名を襲ふ。同十三年六月戸長に任せらる。同十四年五月更に學務委員に擧らる。同廿二年市町村制の實施あるや。収入役に任ず。抑も君は公暇心を理財に用ぬ。是を以て其家倍々富み。現に地價四萬貳千七拾余圓を所有すると云ふ。君の公益の爲めに金圓を義捐し。因て賞賜を得たること。蓋し勢なからずと雖も。今茲に一々之を列記せず。嗚呼君の富は既に已に斯の如く。而して賢兒理一郎君あり。名聲夙に世間に奔る。將來必らず大に爲すあるべく。隨て君が家

聲は層一層の高きを加へん。豈美ならずや。
列傳氏曰く。藤兵衛君を父として理一郎君あり。理一郎君を子として藤兵衛君あり。人生の幸福、宛も坂本氏の一門に集れるもの非か。惟た本傳は専ら藤兵衛君の事を紀するに在り。而して理一郎君の前途に向ては更に大に傳ふべきものあること必せり。予輩毫を呵まて之を俟んれみ。

嵯峨重良君傳

容貌雄偉。音吐鐘如。而して其反對党を攻撃するに當て單當直入。所謂る流星光底、能く長蛇を撃するは我秋田縣會議員中、獨り嵯峨重良君あるのみ。君は南秋田郡太平村平塚甚兵衛氏の第二子にして、弘化二年八月十五日生る。幼名勇治。資性機敏にして、學問あり。荷も一事を任ずるときは、不屈不撓竟に精神を貫徹するにあらずれば止まず。會て人に語て曰く、守成は我事にあらずと亦以て君か氣概の一般を知るに足れり。年甫めて二十。出く、嵯峨氏を冒す。後ち見る所あり木材商となり數々濫用を辨じ賞を受く。奥羽戊辰の役。和田、戸島、境、刈和野諸驛。皆賊巢となり。往來太平郷に由る。時に新庄藩の老弱男女八百餘名。難を避て我藩に來る。君、郷里に在り。人馬の繼立。食糧の輸送。其他百般の事を周旋尽力し。功を以て賞を賜ふ。以來頗ふる地方の人望を博し。明治十三年五月目長崎村會議員に擧らる。同十四年及十五年の間。川尻別組齋種實捌委員として數々横濱に赴き。親しく外人と貿易せしを以て

自ら内外の商況を詳にし。大に實業の改良進歩を圖れり。同十五年六月始めて秋田縣會議員に擧らる。同十七年三月再選して議員となる。同五月更に目長崎村總代人となる。同十九年縣會議員半數改選し。復其選に當る。其年會々目長崎村外五ヶ村聯合土工の事あり。君、其聯合會議員に擧らる。同十二月秋田鐵道敷設協議委員となる。同廿一年十二月秋田畜産協議委員となる。同廿二年三月秋田畜産協議委員に再選せり。時に南河兩郡聯合病院設立の擧あり。君、其聯合會議員となる。又河邊郡下北手村に數町の地を開き。桑數千株を植付たり。偶々秋田縣會の紛擾あり。君、感ずる所ありて。自ら縣會議員を辭し。以て目長崎村外五ヶ村戸長に任じ。村民を勸奨して太平郷の道路を開き。以て公衆の往來に便す。又或は山谷隧川を開鑿し。稻田數町を墾拓せり。同二十二年秋田縣會解散す。因て縣會議員改選の機に際し。起て戸長を辭し。再ひ縣會議員となり。次て常置委員に擧らる。又太平村會議員となる。同五月初秋田地方衛生會員を命せらる。同十月秋河病院會議員となり。次て同副議長に擧らる。嗚呼君も亦多事なるかな。

列傳氏曰く。嵯峨君は熱心家なり。實業家なり。蓋し君の實業に於ける頗ぶる見るべきもの多し。要するに君は事に當て屈せず難に臨て撓まざるの資性。遂に能く素志を貫徹し實業を成就するものか。是亦凡庸人の企て及ぶべからざる所なり。

目黒貞治君傳

儀表堂々。辨論誇々。我縣會中。嶄然自頭角を顯はし。聴くもの耳を欬ち。視るもの目を寓し。而して相語て曰く。二十番議員なり。曰く目黒貞治君なりと。即ち二十番議員と云へば人。其目黒貞治君なるを知り。將た目黒貞治君と云へば人。其二十番議員なるを知る。嗚呼君の縣會に於ける。有方家……熱心家……たることを知るべきなり。君姓藤原。其族目黒。南秋田郡雄鹿中村(舊瀧川村)の人。目黒氏の宗たり。門業頗ぶる多し。而して同村開闢の家を稱す。世々里正を勤む。君が中祖小一郎君。曾て里正たり。時に同村の地瘠を税重く。農民の艱難なるを愛ひ。慨然自ら起て藩侯に直訴す。藩侯、其志を憫むと雖とも。奈何せん國法の在るあり。直ちに捕へて獄に繋ぐ。鐵欄の下に三星霜を閱し。始て青天白日の身となり。爲めに地租、殆んど其半を減するに至る。是全く小一郎君の力に由るものとし。村民の崇敬する。と今尙は衰へずと云ふ。君、實は同郡金足村(舊浦山村)伊藤甚一郎君の第二子にして嘉永五年九月五日生る。幼にして穎敏。書を讀み弁を能くし。人、奇童と稱し。家君深く其才を愛し。因て師に就き學を修めしめんと欲す。君年甫めて七つ。同村(舊岩瀬村)小野氏の門に入り。漢籍を講讀せり。若常は群兒と處る。恰も戰鬪の狀に擬し。或は義經と稱し。若くは秀吉と唱ひ。自ら將帥となりて。群兒を指揮し。敢て命に違ふものなし。既にして君年十二。家君疾ひ病なり。一日慨然として歎じて母堂に謂て曰く。嗚呼余未だ貞治の成業を睹るに至らざ。先づ黄泉の客となる。惟た之を憾とす。然りと雖とも死生は命あり如何ともすべからず。余死して後ち。汝、余が志を継ぎ宜しく之を教養すべしと。凄然として泣く。母堂、其遺言を服膺

し。只願君が勉學を奨勵せり。君年十六。始めて舊秋田藩城下に來り。江橋翁の門に入る。君年、幼と雖も能く家君の遺訓を其心に銘して忘れず。拮据匪勉。夜を以て晷に繼ぎ。居ると既に五年。學業大に進む。會々目黒氏、子なく強情じて嗣となす。時に年二十。幾もなく君は里正に擧らる。明治六年政府將に地券を發せんとし。因て實地の調査を徵す。當時官民、未だ其事に熟せず。頗る調理に苦む。君は里正として容易に之を整理し。殆んど管内の模範となるは全く君が算術に長せしに由る。或人、君に官海に遊ぶことを勸説す。然るに君は専ら民間に在りて公衆の利益を増進し。社會の幸福を維持するを以て已れか任とせり。故に辭して受けず。君、我縣産業の振はざるを歎じ。桐樹は尤も我縣の地質に適するにも拘はらず。之を繁殖せしむるものあらざるは實に惜むべしとし。自ら資本を投じて桐苗數十万株を種藝し。成木の日。管内並に北海道其他各地に輸出せり。明治八年會々地租改正の事あり。君、戸長に任せらる。辭して受ず。隱然尽力して能く其事を了せしむ。君又夙に法學の起さるべからざるを感じ。同志を糾合して。法規會なるものを設立し。法學を講究せり。全十一年瀧川學校新築成る。是亦君の唱道經營する所なり。同年我縣、始めて勸業區畫を設け。而して一區一人の自由試驗人なるものを置く。皆管内の篤志家を以てし。君亦其撰に當る。其年又山林原野の地租改正あり。君は雄鹿地方山林原野の持主百數十人を會し。長五里餘、幅三里餘の土地を丈量し。僅々一日にして全く結了を告ぐ。人、其敏に服せり。全十二年地租改正丈量完結し。地價を定るに方り。君は協議委員として。痛論切議、大に人民の便宜を與へたり。全

十三年縣令、我縣に興業會社設立の事を勸奨し。爲めに有志を集め諮問會を開く。君亦之に任す。同十五年南秋田郡撰出縣會議員の補欠撰舉會あり。最高點を以て議員に當選し。直ちに互撰せられて精算報告及豫算議案の調査委員となる。時に縣令と議會との間に法律の見解を異にし。參事院の裁定を請ひ。全く縣會の勝利に歸せり。委員の尽力、蓋し少なからざるべし。又畜産協議委員に舉がる。其年我縣に政黨組織の議起る。君も亦其發起人となり。又規則方法調整委員に舉げられ。遂に嶄然秋田改進黨なる一大政黨を組織するに至れり。又新聞を發兌して以て同黨の機關に供せんとし。幹旋尽力して一大新聞を刊行せり。秋田日報是なり。議論の正確……筆力の秀拔……當時、東北に雄飛せり。其年縣會議員定期改撰し。最高點を以て議員に舉がる。君又常に奥羽七州聯合の急を説く。同十六年秋田改進黨が。委員を奥羽諸州に派出するの議を實行せしは専ら君の贊畫する所なりと云ふ。之れより先き全國の縣會議員將に東京に會せんとし。君夙に之を贊成し。頗ふる尽力する所ありしが。惜ひかな政府は治安に妨害ありと認定し。之を允許せざりき。同年北長同盟會なるものを組織し。之れが會長に舉られ。専ら法律講究を事とせり。全十七年東北會を我秋田縣に開く。君は委員として大に幹旋し。全十八年我縣通常會議に鐵道敷設の議起り。遂に全會一致の決議を以て。縣令に建議せり。君之れが委員たりき。同年又縣會議員の定期改撰あり。最高點を以て議員に當選し。次て臨時會議に於て。最高點を以て常置委員に舉がる。同十九年鐵道局長、宮城、山形兩縣に出張し。鐵道線路を視察す。君は縣會の委員として山形縣に赴き。親し

く長官に就き。我縣鐵道敷設の急務なることを詳陳せり。同年秋田城外舞馬の大災あり。君は常置委員にありて。或は備荒儲蓄の支出を謀り。其他細民救恤の事に尽力せり。施て惡疫の流行に際し。各所に檢疫部を設け。而して開業醫のみを置くも尙ほ十分ならず。故に秋山縣立病院の醫員をも派出せしめんと要し。縣令に請求せり。縣令曰く。醫學校及び病院の常務あり。派遣するを得ずと。君は臨機應變の策を取らざるべからざることを説き。痛く之を排撃し。遂に其言の如くし。大に豫防撲滅の功を奏せり。曾て某大臣、北海より奥羽諸州を巡視し。施ひて秋田に至る。君往て大臣を訪ひ曰く。我秋田縣は海陸、物産に富み。天與の富土なるにも拘はらず。産業興らず。商業盛ならず。輸として海陸運輸の便ならず。由る。若し一とたひ之を補かんば。將來我縣の繁昌、推して知るべく。獨り我縣の幸福のみならず。則ち我國の富源となることを決して疑ふべからず。唯た速かに陸に鐵道を設け。海に船路を開き。以て我國の富源を作るに如かき云々なりき。大臣大に其言に服し。汗塗、船川港灣を實視して去れりと。又 皇帝陛下の特旨として民情視察の爲め。某伯我縣に巡回せり。君は常置委員を委員に舉られ伯と與に管内各地を巡回し。到る所、地形民情を詳述せり。伯、好土宜を得たるを喜ぶ。而して歸京の後。天皇陛下に其情況を上奏せしことは。當時朝野新聞にも報道する所なりき。會々我縣郡衛の改革あり。或は來て君に郡長たるんことを勸む。官途は素より君の本意にあらざるを雖も。厚情黙し難く。即ち常置委員諸氏に謀る。皆君の我縣會中より出て、官海の人となるを惜む。故に其之を留めて辭せしめたる

と聞く。同年我秋田縣通常會議の國縣兩道開鑿事業議案は繼續年限五年なりしを三年に短縮せしは。則ち君の發議に因るものとす。今や我縣道路の稍々平坦に歸し。到る處車馬の往來に苦まざるは。實に我縣の爲に大なる利益と云ふべし。同二十年我鐵道委員中、出立委員を互撰し。君、其任に當る。偶々母堂、病に罹り起たざりしを以て果さず。君曾て常置委員が地方税を以てする事業を實視するの必要を唱説し。遂に縣會の決議を経。以來常置委員は管内を巡回して事業の實況を調査せり。蓋し縣會が豫算を議定するに於て頗る便宜なることなるべし。適々君、巡回中。鐵道局技師某。鐵道線路檢定の爲め。奥羽地方に出張せしとの京報到着せり。因て君は直ちに青森縣下弘前に至り。同地の常置委員及び鐵道委員等に協議し。共に青森に赴き。技師に面接し。備さに事業方法を談じ。技師は更に來て秋田森青兩縣の線路を檢定することを約して去る。君も亦一旦歸秋し。更に知事及び委員等と謀り。第二部長、土木課長及委員等同伴して山形縣下に聯絡する鑛道線路を踏査し。而して新に好路線を得く。山形縣に至り知事及常置委員等に熟議して還る。歸路技師某、我縣の鑛道線路踏査の爲め出張せしに解近し協議を尽せりと云ふ。其年井上伯條約改正の事あり。輿論轟然たり。君亦伯の改正案に反對し。同志と謀り。委員を上京せしめ中止の事に尽力せり。又時世の急務に由り。同主義者と謀議し。新聞を發兌せり。秋田新報是なり。當時一縣を變動し。都鄙は間に喧傳せり。蓋し地方新聞に在りては。多く見ざる所の好新聞なりき。同年後藤伯將に東北に漫遊を試んとし。福島縣より宮城縣に至る。君は我縣同志と謀り。山形有志諸氏に通

牒しく以て伯の來遊を促せり。時、既に冬季に迫る。伯と明年を約して歸京す。我縣の畜産事業は久しく縣廳の管理に屬しぬ。君は夙に之を民間に回復せざるべからざるを論じ。遂に同年の通常會議に於て其説を主張し。而して可決に至り。委員を互撰し。君、之れが委員長に擧られ。事業方法を調査整理して知事に協議し。始めて純然たる民間の事業となれり。同年知事は我縣通常會議の議事が法律を犯せるものと認定し。之を中止し。以て其筋の指揮を俟つ。一時内外物議紛然たり。君、慨然として曰く。今や我秋田縣會は不幸にも冤を蒙りて中止の難に遭へり。嗚呼我々議員は苟も縣内六十餘萬人民の代表者として議場に立つ。故に一言半句を雖とも。敢て輕々にせざることは自ら信する所あるが。今や此冤に遭ふ。豈黙止すべけんや。因て本會より委員を出京せしめ事情を具申して。以て其筋の公正なる裁判を請はんと。正々堂々。論じ來り論じ去り。遂に委員二名を上京せしむるに至る。幾もなく其中止を解られたりき。施て臨時縣會を開き。君は常置委員に擧げらる。又畜産事業は全く民間に歸せしを以て。隨て組織方法の變更を要し。新に委員を擧ぐ。會議を開設せり。君は委員に擧られ。次て議長に任じ。又組織方法取調委員となれり。現今實施の規則方法は概ね君か力に成れるものなりと。抑も君の畜産事業に従事せし以來數年。其功、實に甚なからざるなり。同年秋田縣立病院廢止し。南秋田河邊兩郡(當時未だ市あらず)聯合病院設立の議就る。君は聯合會員に擧られ。拮据經營。遂に之を設立せり。同二十一年將に我縣臨時會議を開かんとし。常置委員は擧て其職を辭せり。當時風説子曰く。我縣會議員中。某々一部の人々は前會の役

員擧の結果に頗る不平を抱けり。故に會議の圓滑を望みて諸氏は事斯に至れり。其れ或は然らんか。同年九州福岡政社の委員來秋し。政治上聯合の事を約し去る。其夏後藤伯の來遊あり。君は同志諸氏と謀り。大に管内の有志を會し。親睦會を開く等。幹旋尽力最も多かりしと云ふ。以來大同團結の旨義を擴張し。政社を組織することを計畫せり。同年東北北越の同主義者聯合して大親睦會を越後新潟に開設し。名けて十五州會と云ひ。以て東北政治上に於ける一大團結を樹立せんとす。君は我縣有志の委員として。該會に出席し。遂に純然たる東北の一大團體を組成するに至れり。蓋し我東北十有五州の政治上に於ける聯合團結は之を創始となす。同會は毎年東北諸州輪番に開會すると決議し。昨年四月山形縣に於て彼の東北會と同時に其第二回を開會したりき。以降君は専ら地方の同志を糾合するに尽力せり。同年通常會議に知事と議會との間に紛議を生出し。正副議長及び常置委員等は悉く其職を辭し。尙ほ且つ議會は議案の全部を否決し。役員の選舉を拒絶せり。因て主務大臣は議會の實況を調査せしむる爲め。黒田參事官を出張せしめたり。君は縣會より委員に擧られ。親しく同參事官に面し。事情を具陳せり。明年議會は解散を命せられたり。然るに其れ等多事の故を以て。君が夙に經營する所の政社の組織は。頗る遲緩に屬せしが。時節到來し。將に嶄然たる政黨の樹立を見んとし。而して月に浮雲あり。花に暴風あり。我縣有志の議論は二派に分立せり。一は有形組織を取り。一は無形組織を取る。君は飽きて有形組織ならざるべからざることを主張し。同志を糾合し。秋田政社を設立し。隱然之が牛耳を取れり。

同年三月縣會議員を擧り。施て臨時會議を開く。君は議員に擧られ。次て常置委員に任ぜ。又同會議長に擧らる。蓋し本會に於て役員に當選せしは。概ね秋田政社員なりしと云ふ。又君、常置委員に任ぜし。會で議會の一大問題となり。將た議會の一大紛擾を醸し。遂に議會解散の結果となりし。彼の大曲よりして。備手に達し。又鹿渡よとして。鶴形に出る線路は。親しく其地に臨み。實況を精査し。知事に照會し。輿論を採納し。國道變更の事を其筋に稟議せしむ。又我二十一年の通常縣會は解散せり。是を以て。二十二年度の豫算は則ち原案執行となり。知事の專行に一任せり。假令專行に一任するも。知事は道理上。徳義上。より敢て議會の精神を背くべからず。第二次會を通過せし支出は。宜しく縣會の決議に據るべし。未だ經過せざるものは。常置委員に協議して。而して後ち實施のことを。知事に忠告し。以て其言の如くせしむ。又東京に於る大同俱樂部の常議員は。一團體々一名なるが。君は秋田政社の常議員に擧らる。然れども地方の運動も亦忽せしべからざるを以て。辭して他人を出せり。其夏大隈外務大臣の條約改正問題起る。輿論轟然。恰も疾風迅雷の如し。君は憤然として曰く。是非上伯の條約改正案と大同小異なるもの。み。何を彼れを非とし是を是とすべけんや。而して此事たる素より國民問題なるを以て敢て政社の内外を問ふべからずと。是に於て博く管内の志士に謀り。中止の事を唱道し。又曰く。一篇の建議。一言の忠告。或は廟議を動かすに足らず。如かず大舉して。葦葦の下に至り。親しく廟堂大臣に接し。忠誠を吐露し。飽まで中止を請はんに。國家の安危。社稷の存亡。を奈何せんと。檄を四方に傳へ。遊

説を各地に派出し。人民を勸奨し。大に同志を得て。先ずるものは既に發し。後るものは將に發せん。偶々條約改正延期の電音あり。或は中途に車を返へせしもありしが。東京に至れるもの亦數名なりき。君の如きも將に發せんとし。未だ發せずして事寝みぬ。以て倍々奮て大同團結の旨義を擴張することに尽力せり。

今や天下の同主者は大同團結なる大旗の下に來集し。翻視すれば區々たる我秋田縣の同主義者は兩派に分立し。二様の旗色を飄揚せり。是國家の爲めに喜ぶべきの顯象なるや。決して喜ぶべきの顯象にあらず。故に時機を俟て必らず共同合併せざるべからずと。君の夙に論ずる所なりき。果せるかな。時至り機熟し。君は秋田政社の委員となり。而て一派……乃ち大同會の委員と相會し相議し。首尾能く兩派合併の好果を得て。秋田大同俱樂部なる一大政黨を樹立せり……巍然樹立せり……是我縣の爲め……否、邦家の爲め……實に賀すべきなり。次て君は同俱樂部の常議員に擧られ。大に盡力しつゝありと云ふ。近來我縣に鐵道敷設の議論再燃し。君は其首唱者たり。客年知事を同伴し各地に遊説しつゝりき。我縣の輿論は靡然として此議を賛成し。以來委員は上京して計畫中なり。日ならず好果を見るべし。是亦君の力預て樹なからざるなり。又南河兩郡及び秋田市聯合病院の組織を變更するに際し。君は委員に擧られ。組織方法を調整せり。而して會議に於て。君は其管理者に擧げられたり。我縣客冬の通常會議は頗る中外の注目を惹きたり。如何となれば曩日我縣の政黨は兩派に分立し隠然相闘くの嫌ひなきにあらずりき。而して我常置委員は悉く舊政社派より組成せり。

況んや其常置委員は概ね新任議員をせり。或は調査の練熟をらざるもあるべし。仮令今日は均しく大同俱樂部員たるも。合同以來日淺し未だ十分の調和を得ざるは免れざる所ならんか。果して然らば議場の……圓滑……平和……は恐らく望むべからずと。杞人は夙に之を憂ひしが議會の實況は大に之に反するものあり……至圓……至平……些の暴風……些の激浪……なき終始圓滿の間に議事を結了し。加之のみならず常置委員の意見は全然、議場を通過せり。嗚呼是獨り我縣のみならず爾ふに全國の議會に於て亦比ひ稀なるべし。實に我秋田縣歴史中、特筆大書するに足れり。畢竟我縣會議諸氏の注意の至る所。以て我縣の進歩を卜すべしと雖も。抑々常置委員諸氏の勞豈少とせんや。而して常置委員に在て最も其勞を取られしは則ち君なり。故に客年の決議に於ける君の力は預て大なるものありと。曾て傳説する所なるが。其れ或は然らんか。況んや我縣海陸運輸の事を論弁し。雄物米白兩川を疏通して龍湖に瀉き。施て船川港灣に運河を通す。以て我縣輸出入の便に供せん。然れども是素々一朝一夕の業にあらず。隨て巨額の經費を要す。故に先づ本年度に於て測量費を置き。實地を測量せしめ。而して後ち着手するや否やを議決せんとの建議を提出し遂に可決に至るが如き。又前々年度に精算報告書中知事の所置。徳義上に於て甚だ穩當ならざるもれあり。知事直接の弁明を請求せんと發議して。是亦可決し。知事躬から來て其過ちを謝し。事、滑らかに局を結ひたるか如き。要するに君が議會に熱心なるに由るものなり。君の議會に於ける概ね斯れ如し。他は推して知るべし。聞く君も亦我縣の衆議院議員の候補者……有力

なる候補者……なりと。其れ然らんか。
 列傳氏曰く。自黒君は剛毅……樸直の人なり。其縣會議場に立つに當りてや。恁々の論。講
 々の議。宛も疾風の脚を吹くが如く。滿場殆んど抵敵なし。嗚呼君は實に我縣會中の熱心
 家……有力家……なり。豈唯た縣會のみならんや……以來幾年。政治社會の崎嶇羊腸た
 る行路を歩し去り歩し來り。千辛屈せず……萬酸撓まず……否。君が勇氣は毎歴一難一倍
 來るが如し。是豈凡庸士人の企て及ぶ所ならんや。抑も君は政治社會の熱心家……有力
 家……なるかな。

日景辨吉君傳

殖産家なり興業家なり。蓋し我東北七州殖産家あり興業家あり。敢て其人に乏しからずと
 雖とも。藍綬褒章の燦爛たるを共に其名を天下に輝かせしは果して幾人かある。我縣の日景
 辨吉君なり。然れば則ち君の殖産家たり興業家たることは。世既に之を知る。何ぞ予の之を
 紀述するを俟たん。惟た夫れ君の今日あるは。決して偶然にあらず。而して或は未た之を知
 らざるものあらん。是本書に編ある所以なり。君。幼名忠善。字は士紀。後ち辨吉と改む。故八
 右衛門忠成君の長子なり。母は大澤氏。嘉永元年十二月生る。其先建前朝後介忠廣より出づ。
 忠廣。安部氏に仕ふ。子孫亂を避て出羽秋田釋迦内村に來り住し。世々郷士と稱す。天保四年
 藩内。凶あり。祖父八右衛門君。自ら家産を授して以て濟救費に供せり。因て辛ふして生活を

得たるもの少なからず。藩侯、其功を賞し。擢て士列に入る。嘉永六年父八右衛門君、會々藩
 命を以て。南秋田郡北浦村に戌役し。君も亦隨て往く。文久四年年甫めて十七。出て藩侯に仕
 ふ。君、夙に平塚北村二翁に就て經史を講讀し。次て藩費に入り。益雪幾年。傍ら刀槍弓馬砲
 術兵法を學ぶ。明治戊辰の役。船川土崎兩港に往來警衛す。既にして廢藩置縣。即ち釋迦内村
 に歸る。明治八年七月三條太政大臣、東北諸州を巡視し。將に秋田を經て而して青森に至ら
 んとし。途に君か家を過ぎ。乃ち國詩一首を賜ふ。

五保古の道を飛羅久は國のためいとよ美とべき功なり氣理

之を先き君、家君と與に専ら首唱尽力せし所の釋迦内村と立花村との間、新道漸く成る。其
 路線中、橋を架する者あり。石田秋田縣令初め此橋を渡り。日景橋の名を命じ。以て其偉業を
 後世に傳へしむ。之を我縣新道開鑿の嚆矢となす。大臣の國詩も亦之を賞せしもの、如し。
 同九年七月釋迦内村總代人となり。同九月更に第二大區總代人となる。同十一月父忠成君病
 歿す。同十年三月君が新道開鑿の功を賞し。褒狀を賜ふ。又考忠成君曾て新道開鑿費として
 金若干圓を獻せし以て。銀杯一箇を賜ふ。同七月矢立峠新道開鑿費としく金若干圓を獻じ。
 銀盃一個を賜ふ。同九月第二大區第一小區戶長に任せらる。病を以て之を辭す。同十二年二
 月秋田縣會議員に舉らる。同十三年一月秋田縣畜産協議委員となる。同四月秋田郡役所新
 築費として金若干圓を獻じ。木盃一個を賜ふ。同五月米價騰貴し貧民飢に苦む。君、慨然自ら
 倉庫を開き。米若干石を廉賣し。以て其急を救ふ。因て銀盃一個を賜ふ。同六月秋田縣地方衛

生會員に奉られ次て副會長に任ず。同十二月警察費として金若干圓を獻じ。木盃一個を賜ふ。同十四年一月君が殖産興業の事務最も多忙に属せるを以て。縣會議員、畜産協議會員、地方衛生會員の諸職を辭す。同九月聖駕東巡し。施て君が郷に臨む。君、其開拓地の丘上に新に清潔なる小亭を起し風聲を奉迎し、十里の田園、千種の植物、君が多年經營せし事業を天覽に供し奉り。且つ自田の新米を獻じたり。而して君は庭上より遙に天顔を拜するの榮を得。又更に三層銀盃并に金若干圓を賜ふ。又其亭に命じ。駐蹕邸と題せる。杉宮内大輔の扁額を賜ふ。既にして聖駕大館街に駐るの日。有栖川殿下、君を召し褒詞を賜ふ。蓋し君は屢々聖恩の優渥なるに沐し。感喜に勝へず。因て聖駕を奉送し平鹿郡角間川村に至る。適々式部寮に召され。褒狀を賜ふ。

日景辨吉

其方儀心を修路墾田農桑牧畜に盡し務めて産業を興し候段奇特に事に候尙將來倍々勉勵可致候事

明治十四年九月十九日

左大臣 熾仁親王

前日聖駕君が郷に駐るの際。親王殿下及び諸大臣交々懇談款話を賜ひ。共に君が多年の功を賞され。徳大寺宮内卿も亦國歌を賜ふ。

新墾の曾のいさはしもたか丘に御車をさへと、めましけ理

其他詩歌文章の贈與頗ぶる多かりしと云ふ。同十五年二月再び縣會議員に奉らる。同十六年

一月釋迦内村會議員となる。同五月釋迦内村公立向陽學校一棟を増築し。尽く其費を獻す。官、改めて日景學校と稱せしむ。同十七年七月釋迦内村外敷町村聯合會議員となる。同八月秋田縣勸業諮問會員となる。同十二月公立大館病院監事に奉らる。同十八年四月藍綬褒章を賜ふ。

日本帝國褒章之記

秋田縣士族

日景辨吉

平素志を公益に注ぎ道路を鑿修して往來の便利を計り荒蕪を開墾して民戸の繁殖を致し植物試驗場を開設して樹木を培養し學校を建築して教育を振興し其他機械牧畜等の爲め棄捐する金額も亦少からず其成績著明なりとす依て明治十四年十二月七日勅定の藍綬褒章を賜ひ其善行を表彰す

明治十八年四月二十四日

奉勅

賞勳局總裁從三位勳三等伯爵柳原前光
元老院議官兼賞勳局副總裁從四位勳三等子爵大給恒
賞勳局主事從五位勳五等 平井希昌

此證を勘査し第五十二號を以て褒章簿冊に登記す

大政官書記官兼實動局一等秘書官從五位勳五等橫田香宙
 嗚呼君が多年の功績、是に至て始めて天下に赫灼たるを得たり。同六月北秋田郡大館町及
 び九十ヶ村聯合會議員となり。又釋迦内村及び四ヶ町村勸業委員となる。同十月秋田縣會議
 員の定期改撰あり。再び議員に擧がる。同廿年二月秋田縣鐵道委員となる。同六月大館町罹
 災者を救恤の爲め米若干石を寄附し。木盃一個を賜ふ。釋迦内村字長而袋罹災の爲め金若干
 圓を寄附し。木盃一個を賜ふ。同八月警察費として金若干圓を獻じ。木盃一個を賜ふ。同九月
 出雲大社教會大補教となる。同十月所得稅調查委員となり。又秋田縣米麥大豆共進會出品總
 代人となる。同十一月大館町及び九十七ヶ町村聯合會議員となる。同廿一年一月時事に感ず
 る所あり。縣會議員を辭す。同三月秋田縣畜産委員となる。國道修築費として金若干圓を獻
 じ。木盃一個を賜ふ。同十月我縣國道を修築せんとするにより。耕地敷反歩及び金若干圓を
 獻じ。三層木盃を賜ふ。同二十二年二月秋田縣物産品評會委員となる。同四月秋田縣會議員
 に擧がる。蓋し前年に於て秋田縣會解散し。更に議員擧行をひし故なり。君少ふして志を
 文學武術に致し。將に大に天下に爲すあらんとし。爾後王政維新、世態人情も亦隨て一變せ
 るを目撃し。翻然自ら覺る所あり。騷然郷を出て遠く漫遊の途に上り。三府五港を遍歴し。歸
 しに及て専ら殖産興業の事を以て任となす。熱心銳意。十年宛も一日の如く。遂に胸邊の憂
 患は燦然として人目を奪ふに至る。嗚呼亦盛ならずや。然りと雖も是固より一朝一夕の積
 りにあらす。世人宜しく君が今日の功績を見て。而して君が多年の辛苦を察すべし。

列傳氏曰く。日景君の殖産家たり。興業家たることは。世人の既に諒知する所なり。然るに
 君は頃日成田氏等と謀り。中正党なるものを組織せりと。果して然るときは君は將に事業
 社會より出て、而して政治社會に入り。更に進て大に爲すあらんとするものか。若し夫れ
 奇論百出。殆んど人頭を解かしむるとは。我縣會中、誰か君に如ん。是實に君が獨得の妙
 技と云ふべし。今や君は此妙技を載して以て政治社會に臨み。更に大に政治社會を玩弄嘲
 笑せんとするか。將に然らざるか。手輩は未だ君の深意を知らず。世人若し之を知らんと
 欲せば請ふ去て陰陽師に問へ。

菅 禮 治 君 傳

商家は猶ほ兵家の如し。而して兵は神速を尊ぶ。商も亦豈神速ならざるべけんや。我縣商家
 多しと雖も。機敏輕妙、夙く商機を察し。能く處變の策を施すことは恐らく菅禮治君に如
 くものあらす。蓋し君は我縣商業家中の泰斗なり。抑々君は雄勝郡川井村の人にして。天保
 十三年生る。以來久しく南秋田郡土崎港町に住す。殆んど同郡の人の如し。君か家曾て佐竹
 藩侯の用達を命ぜられ。舖を江戸に設け。我藩の物産を販賣し。兼て幕府の用達を勤む。當時
 幕府の三家と稱するもの。水戸、紀伊、尾張、三藩亦皆用達を委託せり。維新後我政府通商司
 なるものを設置し。君、東京回船問屋肝煎を命ぜられ。同司に奉務せり。明治五年始めて秋田
 に歸り。縣廳より生産方用達を命ぜらる。同十一年政府金庫公債證書を士族に下附し。君、士

族就産を目的とし。國立銀行を創立す。第四十八國立銀行是なり。而して君は之れか頭取たり。同十三年秋田商法會議所を創設し。次て會頭となる。同十六年勸業諮問會員に任す。同二十年秋田縣會議員に擧られ。又所得稅調査委員となる。同廿一年縣會常置委員に任す。君、夙に我縣商業の振はざるを嘆じ。因て物產委託商會を起し。次て會長となり。遂に縣會議員を辭し。以來孜孜として商業に従事す。同廿二年鐵道創立委員に擧げられ。池田氏等と與に上京し。大に計畫する所ありしと云ふ。

列傳氏曰く。菅君の商業に敏捷なることは。世人の夙に知る所なり。又其政治家にあらざることも世人の能く識る所なるべし。故に君の縣會議員に擧らる、を聞き。心竊に疑ひを抱けるもの多かりき。果せるかな未だ幾くならざるに。君は其職を辭して専ら商業に従事せしと云ふ。抑も君は我縣商業家中の先覺者なり。前進者なり。而して其く一勝一敗は兵家の常なりと。何ぞ獨り商業家に怪まらんや。唯た期す君の前途、倍々奮て我縣の商家を鼓舞振策し。十九世紀はたろか二十世紀の商業社會に雄飛するの實力を養成せしめんことを。予輩は君を信すること厚し。故に之に望むことも亦大なり。請ふ君、焉を諒せよ。

人員總計

直接國稅最多額納稅者 十七人

第一撰舉區人員 千三百十七人

秋田市

八十六人 内百圓以上稅納者十九人

南秋田郡

九人	川尻村	二十二	寺内村
四十八人	廣山田村	六十五	大平村
二十一	上旭川村	四十四	下旭川村
六十九	外旭川村	三十一	土崎港町
十九	飯島村	五十四	下新城村
四十	上新城村	五十五	金足村
二十三	大久保村	六十五	飯田川村
十五	豐川村	六十四	下井河村
四十二	上井河村	三十八	大川村
三十	一日市村	五十五	面瀨村

人員總計

二十六人	五十目村	三十二人	馬川村
二十六人	馬場目村	二十九人	富津内村
十六人	内川村	二十人	天王村
十八人	船越村	三十一人	拂戸村
五十二人	脇本村	二十八人	船川村
三人	南磯分村	五人	戸賀村
十八人	北磯分村	二十三人	男鹿中村
四十八人	五里合村	五十八人	洞西村
計千二百二十六人 内百圓以上納稅者九十八人			
第二撰舉區人員 千六百五十三人			
北秋田郡			
十六人	鷹巢村	十八人	榮村
十六人	坊澤村	十一人	七坐村
二十一	綴子村	二十人	早口村
三十人	山瀬村	十八人	下川沼村
十七人	上川沼村	五十三人	大館町

十九人	長木村	四十四人	釋迦内村
十五人	花岡村	十八人	矢立村
四十六人	扇田村	十八人	十二所町
四人	大高村	三十三人	東館村
二十六人	西館村	二十四人	二井田村
二十二	真中村	十五人	澤口村
十六人	七日市村	二十六人	米内澤村
五十七人	大野村	十八人	落合村
十七人	下小阿仁村	三十三人	上小阿仁村
十四人	前田村	八人	阿仁銅山村
九人	荒瀬村		
計六百六十六人 内百圓以上納稅者五十八人			
鹿角郡			
六十八人	花輪町	九人	尾去澤村
七人	宮川村	十五人	曙村
十五人	柴平村	二十四人	錦木村

人員總計

六十八人	毛馬內村	四人	七瀧村
十五人	小坂村	二十三人	大湯村
計二百四十人 內百圓以上納稅者二十六人			
山本郡			
二十五人	能代港町	四十四人	榑村
四十一人	淺內村	二十人	濱口村
四十二人	鶉川村	六十六人	鹿渡村
二十四人	上岩川村	二十二二人	下岩川村
三十九人	森岡村	三十五人	金岡村
二十七人	檜山町	二十四人	扇淵村
十九人	鶴形村	二十三人	富根村
二十八	響村	二十人	二ツ井村
七人	荷上場村	二十六人	康琴村
二十三	柏毛村	十二人	種梅村
三十五	常盤村	四十人	東雲村
三十八	塙川村	五十人	澤目村

二十九人	八森村	二人	岩館村
計七百四十五人 內百圓以上納稅者三十二人			
第三撰舉區人員 二千二百四十九人			
河邊郡			
十九人	牛島村	十二人	新屋村
四人	濱田村	四十一人	豐岩村
六十九人	仁井田村	三十九人	四ッ小屋村
百一人	川添村	九十七人	中川村
四十七人	豐島林	三十八人	和田村
二十五人	船岡村	十六人	和見山內村
四十四人	上北手村	四十三人	岩見山內村
計五百九十五人 內百圓以上納稅者十八人			
由利郡			
八十五人	本莊町	四十六人	子吉村
四十八	西目村	五十四人	平澤村
五十六人	金浦村	五十三人	越越村

人員總計

三十二人	上濱村	四十六人	上郷村
四十二人	小出村	四十人	院内村
百三十三人	矢島町	二十三人	直根村
六十八人	川内村	二十六人	笹子村
三十人	玉米村	七十五人	下郷村
六十四人	石澤村	六十五人	東灘澤村
五十七人	西灘澤村	四十二人	鮎川村
五十一人	小友村	五十二人	南内越村
七十六人	北内越村	七十七人	岩谷村
百人	下川大内村	四十八人	上川大内村
四十八人	大正寺村	五十人	龜田町
十七人	松久崎村	二十三人	道川村
四十二人	下濱村		

計千六百五十三人 内百圓以上納稅者七十二人
 第四撰舉區人員 二千九百一人

仙北郡

六十七人	大曲村	十六人	花館村
六十五人	神宮寺村	三十一人	刈和野村
四十九人	淀川村	十九人	荒川村
四十三人	土川村	三十九人	大澤郷村
五十四人	強首村	四十一人	南槽岡村
四十一人	内小友村	二十七人	外小友村
十七人	大川西根村	二十七人	廉木村
五千四百八	高梨村	五十五人	四ッ屋村
六十九人	長野村	五十八人	角館町
七十三人	神代村	二十一人	生保内村
五人	田澤村	十七人	檜木内村
七十二人	西明寺村	二十七人	中川村
四十四人	雲澤村	五十四人	清水村
二十三人	白岩村	六十一人	豊川村
四十九人	豊岡村	七十一人	横澤村
七十人	長信田村	七十一人	千屋村

人員総計

五十一人	橫堀村	三十四人	畑屋村
六十七人	六郷村	三十一人	飯詰村
三十七人	金澤西根村	四十八人	金澤村
計千六百九十八人 内百圓以上納稅者百十八人			
平鹿郡			
五十九人	横手町	十一人	山内村
十一人	榮田村	五十八人	醍醐村
四十七人	増田村	二十五人	十文字村
二十八人	三重村	三十四人	植田村
三十人	睦合村	三十五人	吉田村
五十四人	淺舞村	十二人	福地村
三十五人	里見村	三十一人	沼館村
十七人	八澤木村	十七人	大森村
十八人	館合村	二十人	阿氣村
二十三	田橋森村	二十一人	旭村
十一人	淺倉村	二十一	境町村

二十四人	黒川村	三十五人	角間川村
五十人	井形町村		
計七百十九人 内百圓以上納稅者八十六人			
雄勝郡			
六十六人	湯澤町	十八人	辨天村
二十人	幡野村	十七人	岩崎町
五人	東成瀬村	八人	西成瀬村
四十一人	駒形村	十一人	川連村
二十四人	三梨村	九人	稻庭村
八人	皆瀬村	十二人	三關村
六人	須川村	十二人	小野村
十人	横堀村	二人	秋ノ宮村
四人	院内村	六十九人	山田村
三十九人	三輪村	三十七人	西馬音内村
十三人	元西馬音内村	二十二	新成村
十六人	明治村	九人	田代村

人員総計

九

五人

仙道村

計四百八十三人

內百圓以上納稅者三十九人

合計八千二百二十人

內百圓以上納稅者五百六十六人

直接國稅最多額納稅者

地租及所得稅	郡市町村	姓名	生年月
地四千七百三拾九圓 所貳百四拾九圓	仙北郡高梨村	池田甚之助	弘化二年十二月生
地千九百五拾壹圓 所六拾壹圓	北秋田郡前田村	庄司兵藏	文久元年五月生 三十年未滿
地千八百七拾七圓 所六拾圓	南秋田郡金足村	奈良茂	天保八年四月生
地千六百六拾圓 所七拾七圓	平鹿郡角間川村	本郷吉右衛門	天保九年正月生
地千六百貳拾壹圓 所八拾圓	南秋田郡下新城村	金澤松右衛門	嘉永三年三月生
地千六百圓 所七拾貳圓	平郡鹿館合村	土田彦七	安政二年十二月生
地千六百圓 所六拾三圓	秋田市大町二丁目	辻兵吉	嘉永五年九月生

最多額納稅者

地千貳百六拾三圓 所三拾五圓	仙北郡大曲村	柳田清兵衛	元治元年五月生 三十年未滿
地千貳百圓 所四拾六圓	全郡全村	田口岩藏	天保七年十月生
地千五百五圓 所四拾五圓	仙北郡飯詰村	江畑宇三郎	天保十四年九月生
地千五拾壹圓 所三拾八圓	全郡千屋村	坂本藤兵衛	天保十年三月生
地千拾三圓 所四拾五圓	秋田市大町二丁目	本間金之助	弘化二年十一月生
地九百三拾四圓 所三拾四圓	北秋田郡鷹巢村	成田直衛	嘉永元年九月生
地八百七拾三圓 所四拾三圓	河邊郡新屋村	大嶋長兵衛	弘化二年三月生
地八百六拾九圓 所四拾六圓	雄勝郡湯澤町	小川長右衛門	天保五年正月生
地八百三拾貳圓 所四拾七圓	全郡西馬音内村	柴田與之助	天保九年四月生
地七百九拾四圓 所八拾貳圓	秋田市川端三丁目	那波三郎右衛門	大保二年十一月生

直接國稅拾五圓以上納稅者

秋田市

東根小屋町 地貳拾貳圓	武田三祐	中龜ノ町上丁 地十六圓 所九圓	土居通豫
長野町 地四百二十五圓 所十九圓	羽生氏熟	龜ノ丁西土手町 地貳拾三圓	飯島良佐
中谷地町 地二十三圓 所三圓	内山五郎	手形谷地町 地貳拾六圓 所四圓	上松廣平
中長町 地七十三圓 所三圓	大野民也	全新町下丁 地二十圓 所三圓	小田内通志
地拾五圓 所六圓	大久保鐵作	手形西新町 地百二十一圓	石川源吉
地拾六圓 所八圓	川井忠雄	地八拾九圓	橋本又藏
土手長町	菅原健治	地九拾四圓	小貫龜松
樋口順泰		全堀端町	

秋田市

地貳拾貳圓 保戶野愛宕町	羽生要藏	地七十三圓 所三圓	奈良右左衛門
地二十圓 所三圓	根本弘明	地拾五圓	笈川周助
地五十八圓 所三圓	船山忠定	地拾五圓	中島直治
地拾六圓	町田忠治	上中島中丁	鈴木常吉
全川端町		地七拾三圓	鈴木常吉
地貳拾三圓 地二十五圓 所三圓	佐藤寬吾	鷹匠町	石橋弘毅
全本町	川尻豐吉	龜ノ丁堀反新町	大和田胤永
地貳拾七圓	稻見春之助	地貳拾三圓	長野下新町
全中町		地貳拾九圓	高宮易五郎
地三百貳拾壹圓	森澤利兵衛	築地東上町	大和田清風
地十五圓 所十九圓	森澤利吉	地三拾壹圓	全下本町
地拾五圓	須田七郎右衛門	全中町	江畑文吉
地拾七圓	日理宗憲	地三拾貳圓	
地貳拾八圓	出虎之助	全中町	

地三拾八圓	高橋政貞	地六百二十五圓 所三十三圓	本丁四丁目	平野三郎兵衛
築地西町		地二百二十五圓 所八圓	全五丁目	佐藤山三郎
地三拾七圓	綿引俊助	地三拾圓	全六丁目	加賀谷敬吉
全下東町		地七十二圓 所四圓	全橫町	那波良助
地六百十三圓 所四十六圓	淺彌七	地三十二圓 所六圓	全船大工町	加賀谷源右衛門
地三拾貳圓	淺又右衛門	地百五十五圓 所四圓	馬喰町	後谷利左衛門
地百四十圓 所三圓	戶嶋榮太	地三百八十八圓 所二十九圓	上鍛冶町	村山三之助
地七十六圓 所六圓	江畑忠夫	地百三十二圓 所八圓	地貳拾四圓	松倉庄右衛門
全南新町下町	栗谷信幸	地貳拾四圓	四十軒堀川端	鏡屋五郎右衛門
地三拾九圓	坂本南右衛門			
全三枚橋				
地四十二圓 所三圓	全醫王院前町			
地貳拾貳圓	佐藤長治			
地拾五圓	小泉吉太郎			

秋田市

五

四

地四十五圓 鍛冶町上川端 佐藤佐吉	地百五十八圓 十軒町 帶谷文平	地二百六十四圓 追回町 安藤精一郎	地貳拾六圓 大町一丁目 藤原政之助	地三拾四圓 高堂庄吉	地三百九十圓 平野政吉	全二丁目 山崎長兵衛	地十九圓 全三丁目 遠藤小太郎	地五十一圓 川端一丁目 高堂兵右衛門	地二十六圓 全二丁目
地十八圓 上通町 竹谷金之助	地五拾六圓 中通町 佐野喜助	地六拾貳圓 地貳拾七圓 上肴町 嘉藤治兵衛	地二百六十四圓 地二十三圓 地五十一圓 茶町菊ノ丁 加賀谷富太郎	地二百四十五圓 地四十一圓 地八十一圓 地七十五圓 地三十五圓 全扇ノ丁 田宮多七	地拾五圓 茶町梅ノ丁 石川健治	地二百三十一圓 上川口 鈴木喜右衛門	地七拾壹圓 富樫奎兵衛	地拾七圓 加賀谷善助	地拾九圓 加賀谷林藏
地貳拾三圓 富樫金五郎	地拾八圓 桑原七兵衛	地三拾壹圓 富樫奎兵衛	地拾七圓 加賀谷善助	地拾九圓 加賀谷林藏	地貳拾七圓 加賀谷久吉	地三拾八圓 加賀谷龜藏	地拾五圓 加賀谷六左衛門	地貳拾貳圓 土田傳助	地貳拾貳圓 池田重助
地拾八圓 川村永之助	地拾八圓 伊藤東之助	地拾八圓 渡邊藤兵衛	地拾七圓 仙北屋五郎	地拾九圓 杉山岩五郎	地貳拾七圓 杉山金之助	地三拾八圓 堀井正之助	地拾五圓 佐藤與助	地貳拾貳圓 長崎惣吉	地拾五圓 星野直吉

地三十圓 那波伊四郎	地四十二圓 佐藤文右衛門	地四十六圓 川村周吉	地十八圓 川尻村 川村永之助	地拾八圓 伊藤東之助	地貳拾壹圓 渡邊藤兵衛	地拾五圓 仙北屋五郎	地拾四圓 杉山岩五郎	地貳拾三圓 堀井正之助	地拾六圓 佐藤與助	寺內村 長崎惣吉	地拾五圓 星野直吉	地貳拾貳圓 長澤安太郎	地三拾七圓 長澤善助
地七拾壹圓 上川口 加賀谷長兵衛	地三拾壹圓 富樫奎兵衛	地拾七圓 加賀谷善助	地拾九圓 加賀谷林藏	地貳拾七圓 加賀谷久吉	地三拾八圓 加賀谷龜藏	地拾五圓 加賀谷六左衛門	地貳拾貳圓 土田傳助	地貳拾貳圓 池田重助	地拾八圓 星野甚之助	地三拾三圓 星野三之助	地貳拾貳圓 長澤安太郎	地三拾七圓 長澤善助	

南秋田郡

南秋田郡

地三拾七圓	鎌田五郎兵衛	地三拾貳圓	川邊權兵衛
地拾六圓	片岡祐治	地貳拾圓	川邊岩五郎
地九拾貳圓	片岡惣三郎	地貳拾三圓	倉部禮藏
地八拾六圓	石川彌吉	地貳拾五圓	田中龜松
廣山田村	石川惣之助	地三拾七圓	石井鶴松
地拾九圓	加藤吉兵衛	地貳拾圓	三浦房松
地拾五圓	佐藤市之丞	地拾八圓	船木三太
地拾八圓	佐藤市之助	地貳拾三圓	川邊五兵衛
地四拾六圓	佐藤岩治	地拾五圓	小玉彦太郎
地三拾六圓	大森西之助	地拾六圓	兒玉富五郎
地三拾貳圓	藤澤重兵衛	地拾六圓	佐々木儀助
地七拾八圓	佐々木久之助	地四拾三圓	加藏福松
地拾六圓	佐々木林藏	地拾八圓	朝倉銀藏
地五拾貳圓	鈴木久吉	地拾八圓	佐藤銀治
地拾八圓	川邊權平	地三拾貳圓	佐藤久三郎
地百六十五圓	湯澤幸一郎	地百五十圓	鈴木傳八
所四圓	川邊多助	地貳拾壹圓	鈴木鐵五郎
地拾九圓	川邊孫十郎	地拾七圓	佐藏門十郎
地貳拾圓	川邊吉五郎	地貳拾五圓	鈴木彌七郎
地四拾三圓		地五拾三圓	川和田金助

地拾五圓	佐々木助藏	地拾九圓	嵯峨直治
地拾八圓	佐々木久藏	地貳拾四圓	嵯峨久之助
地貳拾壹圓	佐々木兼松	地拾五圓	加藤孫三郎
地拾五圓	嵯峨清藏	地貳拾六圓	加藤三藏
地六拾五圓	鎌田藤之丞	地九拾七圓	永井重之助
地貳拾八圓	鎌田龜治	地貳拾七圓	佐々木易藏
地六拾貳圓	佐々木辰之助	地貳拾圓	田口清治郎
地四拾五圓	鎌田重五郎	地拾八圓	名古屋古之助
地百八十五圓	鎌田藤兵衛	地貳拾三圓	工藤喜一郎
所四圓	鎌田藤治郎	地拾六圓	工藤三之助
地拾六圓	加藤善三郎	地拾六圓	利部久藏
地拾六圓	佐藤嘉太郎	地拾五圓	佐藤孫之丞
地五拾四圓	池田善八	地拾五圓	佐藤市之丞
地六拾圓	太平村	地拾九圓	利部仁左衛門
地貳拾圓	柳田林藏	地拾五圓	利部五助
地拾九圓	櫻田專五郎	地貳拾九圓	嵯峨和助
地拾九圓	櫻田清太郎	地拾八圓	長谷川新太郎
地貳拾壹圓	田中重三郎	地拾六圓	佐々木金治
地拾五圓	嵯峨寅吉	地三拾貳圓	佐々木善藏
		地三拾九圓	渡邊文助

地拾七圓	佐藤 善七	地拾六圓	永井 巳之松
地貳拾三圓	渡邊 利右衛門	地拾七圓	永井 三藏
地拾六圓	佐藤三五右衛門	地貳拾貳圓	佐藤 永助
地貳拾圓	鎌田 新助	地貳拾五圓	鎌田 經藏
地拾六圓	鈴木 久作	地拾五圓	阿部 留三郎
地四拾五圓	鈴木嘉右衛門	地三拾五圓	阿部 金兵衛
地貳拾七圓	高橋 長治郎	地拾八圓	阿部 金左衛門
地三拾七圓	高橋 正三郎	地拾六圓	鎌田 善藏
地貳拾三圓	高橋 久松	地百三拾五圓	佐々木 源治
地四拾圓	鈴木 孫左衛門	地拾六圓	佐々木 由松
地拾八圓	鈴木 敬十郎	地貳拾五圓	佐々木 左市郎
地拾七圓	鈴木 專十郎	地拾九圓	森合 久三郎
地拾九圓	鈴木 久松	地四拾貳圓	鎌田 順治
地貳拾六圓	鎌田 喜右衛門	地三拾貳圓	須藤 多七
地三拾三圓	鎌田 孫四郎	地貳拾圓	嵯峨 彦兵衛
地貳拾圓	鎌田 銀次郎	地拾六圓	嵯峨 重良
地拾八圓	鎌田 又吉	地貳拾圓	石井 賢治郎
地拾五圓	伊藤 伊右衛門	地五拾九圓	須藤 善左衛門
地拾五圓	鎌田 多郎左衛門	地六拾六圓	嵯峨 弁藏
地貳拾九圓	鎌田 政吉	地貳拾七圓	佐藤 善八郎

地三拾六圓	木曾 寅吉	地拾七圓	金子 專助
地四拾五圓	三浦 寅松	地拾五圓	大嶋 多郎兵衛
地三拾圓	三浦 嘉兵衛	地三拾六圓	石田 源藏
地四拾五圓	三浦 直治	地貳拾九圓	石郷岡 勘助
地拾六圓	木曾 金治	地四拾壹圓	鎌田 永治
地貳拾三圓	木曾 三郎兵衛	地貳拾貳圓	鎌田 九兵衛
地貳拾三圓	佐藤 清藏	地三拾三圓	高村 勝藏
地拾七圓	船木 由松	地九拾五圓	鎌田 清左衛門
地四拾八圓	船木 仁右衛門	地貳拾三圓	高村 甚助
地三拾壹圓	船木 八兵衛	地三拾貳圓	鎌田 金之助
地貳拾四圓	萩原 寅松	地四拾五圓	高村 三郎右衛門
地拾五圓	米塚 善五郎	地四拾七圓	高村 嘉右衛門
地貳拾七圓	萩原 辰之助	地四拾四圓	鎌田 直治
地拾八圓	萩原 清吉	地拾八圓	高村 勝廣
地貳拾七圓	萩原 文治	地三拾四圓	石郷岡 忠右衛門
地貳拾貳圓	米塚 勇藏	地十九圓	橋本 富治
地三拾八圓	萩原 勘右衛門	地拾五圓	小笠原 傳兵衛
地貳拾五圓	齋藤 清十郎	地四拾壹圓	松澤 市之助

南秋田郡

十一

地貳拾八圓	西村吉五郎	地八拾七圓	柳田易藏
地拾五圓	松淵萬之助	地貳拾壹圓	布川富之助
地三拾圓	松淵治助	地五拾八圓	小川孝之助
地四拾貳圓	松淵養吉郎	地拾七圓	小川喜助
地三拾貳圓	佐々木喜右衛門	地拾八圓	武藤七五郎
地貳拾四圓	佐藤甚九郎	地三拾貳圓	佐藤銀藏
地貳拾七圓	石塚三太郎	地貳拾八圓	町田長秀
地五拾七圓	石塚善兵衛	外旭川村	
地貳拾貳圓	石塚重藏	地拾七圓	佐藤慶吉
地拾八圓	石塚佐藤兵衛	地貳拾八圓	渡邊勘四郎
地貳拾壹圓	工藤龜吉	地拾五圓	加々谷仁助
地五拾六圓	石塚才吉	地四拾四圓	渡邊米藏
地拾五圓	三浦善太	地貳拾壹圓	石川福松
地五拾九圓	石塚庄左衛門	地四拾三圓	渡邊九右衛門
地三拾四圓	石塚市藏	地四拾八圓	石川米藏
地九十二圓	工藤小右衛門	地百拾圓	佐藤作藏
所三圓	工藤庄兵衛	地百圓	佐藤七五郎
地拾六圓	三浦嘉兵衛	地貳拾圓	佐藤丹藏
地五拾圓	杉館久米藏	地四拾壹圓	佐藤福太郎
地貳拾四圓	石塚源四郎	地百拾壹圓	石川舊治

地三拾四圓	小野清治	地拾九圓	藤原金藏
地拾七圓	長崎甚左衛門	地拾九圓	加賀谷竹松
地四拾七圓	佐藤金平	地拾六圓	加賀谷米藏
地貳拾七圓	小野三平	地拾七圓	加賀谷龜藏
地六拾八圓	鎌田善藏	地貳拾四圓	熊谷新三郎
地五拾三圓	小野吉三郎	地拾八圓	熊谷新九郎
地百三拾九圓	佐藤岩五郎	地貳拾壹圓	保坂福太郎
地貳拾壹圓	宇野八藏	地八拾六圓	保坂富藏
地拾九圓	佐藤倉吉	地三拾九圓	熊谷三治
地六拾圓	鎌田久吉	地十七圓	加賀谷佐吉
地貳拾四圓	三浦金藏	地拾五圓	熊谷祐吉
地三拾壹圓	鎌田專左衛門	地拾五圓	熊谷專之助
地四拾六圓	鎌田專七	地十七圓	佐藤禮助
地三拾四圓	三浦市右衛門	地三拾八圓	佐藤長兵衛
地五拾五圓	三浦五右衛門	地三拾六圓	佐藤多市
地八拾貳圓	三浦長吉	地三拾八圓	關谷九兵衛
地四拾三圓	三浦銀藏	地九拾壹圓	佐藤清五郎
地貳拾貳圓	三浦三治	地拾六圓	中村勘左衛門
地拾七圓	鎌田利助	地貳拾三圓	中村市五郎
地拾五圓	藤原三之丞		佐藤和助

南秋田

地拾七圓	中村勘之丞	地四十八圓	須磨良八
地六拾四圓	關谷甚一郎	地貳拾八圓	加賀谷豐吉
地八拾貳圓	中村善右衛門	地貳拾四圓	館山瀧藏
地三拾七圓	中村清三郎	地三十四圓	野口銀平
地貳拾五圓	佐藤慶助	地四十四圓	大橋茂兵衛
地貳拾三圓	佐藤清四郎	地四十四圓	金森正助
地貳拾八圓	關谷喜市	地貳拾圓	近江谷榮治
地四拾貳圓	中村兼藏	地二百六圓	金子小四郎
地拾五圓	佐藤乙松	地二百三圓	高橋鶴吉
地拾六圓	清水與兵衛	地百九十二圓	松本與右衛門
地拾七圓	安田喜兵衛	地百七十三圓	村山金十郎
地拾六圓	佐藤市五郎	地百二十五圓	加賀谷東十郎
地貳拾四圓	佐藤長吉	地八十三圓	坂本長治
地三拾貳圓	石塚七五郎	地四圓	加賀谷倉松
地七拾七圓	三浦孫左衛門	地貳拾五圓	出口喜助
地七拾九圓	三浦庄助	地貳拾七圓	麻木久治
地拾七圓	佐藤勘之丞	地貳拾壹圓	鳴海儀助
地九十一圓	土崎港町	地拾九圓	菊地丹十郎
地九十六圓	加賀谷保告	地百十六圓	
地五拾五圓	加賀谷榮治	地三圓	

地百六十四圓	石田恕助	地三拾壹圓	保坂善七
地三拾五圓	小野新吉	地拾五圓	高橋辨治
地四拾七圓	越後屋萬藏	地貳拾七圓	小玉作兵衛
地四拾五圓	越後屋權四郎	地貳拾貳圓	保坂善藏
地拾七圓	能登屋又兵衛	地拾七圓	保坂弟藏
地拾六圓	水戸瀬金五郎	地貳拾六圓	保坂辨治
地四拾五圓	船木伊吉	地三拾四圓	保坂重兵衛
地七十五圓	菅禮治	地貳拾三圓	佐々木長助
地九十五圓	加賀谷惣左衛門	地四拾四圓	佐々木清治
地二百四十三圓	加賀谷惣左衛門	地貳拾貳圓	保坂長之助
地二十三圓	加賀谷惣左衛門	地貳拾壹圓	保坂三藏
地百八圓	麻木松治郎	地拾九圓	渡邊兵治
地三十一圓	飯島村	地貳拾壹圓	
地百拾貳圓	保坂與兵衛	地三拾壹圓	石川善七
地拾七圓	中島辰五郎	地三拾壹圓	石川三藏
地三拾三圓	保坂孫右衛門	地三拾圓	佐藤貞藏
地貳拾五圓	筒井菊松	地拾八圓	三浦兵助
地拾五圓	保坂榮吉	地拾九圓	佐藤淺吉
地拾六圓	小松久藏	地拾六圓	石川平治
地貳拾四圓	藤田福松	地拾九圓	伊藤東四郎

地拾七圓	地拾六圓	地拾五圓	地拾九圓	地五拾貳圓	地三拾七圓	地貳拾貳圓	地三拾三圓	地貳拾八圓	地六拾五圓	地拾五圓	地拾六圓	地貳拾圓	地拾六圓	地貳拾三圓	地六拾九圓	地四拾圓	地貳拾四圓	地拾五圓	
佐藤喜太郎	伊藤貞治	石黒八十吉	須藤良藏	齋藤周助	齋藤才治	佐藤重左衛門	佐藤榮助	萬藤勇藏	萬藤耕造	佐藤福松	佐藤定松	嘉成惣四郎	嘉成惣十郎	嘉成惣十郎	佐藤作右衛門	佐藤慶助	佐藤與太郎	佐藤林藏	佐藤與七
地拾五圓	地拾七圓	地拾八圓	地四拾七圓	地貳拾貳圓	地五拾圓	地拾七圓	地拾五圓	地貳拾五圓	地拾五圓	地拾五圓	地拾六圓	地拾六圓	地拾六圓	地拾六圓	地拾五圓	地拾五圓	地三拾九圓	地三拾九圓	地貳拾貳圓
漢邊榮吉	字佐美嘉助	字佐美龜藏	細谷國吉	字佐美永吉	字佐美常吉	字佐美平治	中川辨治	中川安藏	中川六郎兵衛	中川常吉	三井甚吉	中泉喜代治	中泉傳兵衛	藤原甚太	安田利助	安田權兵衛	安田惣十郎	安田安五郎	高田倉之助

地拾八圓	地貳拾八圓	地貳拾八圓	地七拾九圓	地拾七圓	地拾五圓	地拾六圓	地拾六圓	地貳拾貳圓	地貳拾七圓	地五拾六圓	地貳拾八圓	地貳拾八圓	地三拾七圓	地三拾七圓	地三拾七圓	地貳拾八圓	地三拾圓	地拾八圓	
安田金八	澁谷喜代松	澁谷茂助	澁谷市松	澁谷久米五郎	安田岩松	佐藤永治郎	齊藤助重郎	佐藤宇吉	齊藤榮吉	佐藤吉兵衛	齋藤平兵衛	渡邊伊兵衛	石井三左衛門	佐藤久吉	齋藤松五郎	佐藤專藏	田中與太	中島市五郎	
地六拾圓	地拾九圓	地拾六圓	地貳拾九圓	地四拾六圓	地貳拾八圓	地貳拾四圓	地拾六圓	地拾七圓	地拾六圓	地六拾九圓	地三拾七圓	地拾五圓	地貳拾貳圓	地拾九圓	地拾九圓	地拾五圓	地八拾八圓	地拾九圓	
佐藤角兵衛	小林喜八	若狹吉五郎	佐藤八太郎	佐藤榮助	鎌田與市	鎌田與市	渡邊重治郎	鈴木喜左衛門	泉吉五郎	佐藤三治	大淵慶藏	佐藤三藏	佐藤專藏	齋藤林藏	大淵仁三郎	大淵多郎左衛門	白岩作太郎	古木三九郎	古木甚右衛門

地貳拾七圓	地四拾六圓	地貳拾三圓	地四拾四圓	地四拾三圓	地四拾五圓	地貳拾四圓	地九拾五圓	地貳拾貳圓	地貳拾三圓	地拾七圓	地三拾貳圓	地拾九圓	地貳拾四圓	地拾九圓	地貳拾五圓	地拾七圓
古木三太	多田嘉吉	相澤仁助	佐藤七之助	山田八重郎	篠田子之助	齋藤長之助	佐藤政治	佐藤甚兵衛	保田三十郎	佐藤吉之丞	安田圓兵衛	相馬周吉	丸野内多市	佐藤長之助	佐藤彌助	佐藤金四郎
地三拾五圓	地五拾四圓	地貳拾四圓	地拾六圓	地貳拾三圓	地三拾三圓	地三拾五圓	地拾六圓	地拾五圓	地拾七圓	地貳拾貳圓	地貳拾四圓	地貳拾三圓	地貳拾四圓	地八拾四圓	地九拾壹圓	地三拾壹圓
奈良世加	安田喜市	佐々木吉太郎	奈良右三郎	高橋會兵衛	高橋長助	安田市松	堀田萬藏	佐藤周吉	佐藤助十郎	伊藤勘十郎	三浦惣兵衛	古井銀藏	伊藤駒治	三浦龜太郎	三浦真治	三浦野祐爾

地拾八圓	地六拾八圓	地貳拾八圓	地拾九圓	地貳拾六圓	地三拾七圓	地三拾貳圓	地拾六圓	地四拾壹圓	地五拾七圓	地百六十七圓	地拾九圓	地拾六圓	地貳拾五圓	地貳拾九圓	地貳拾八圓	地拾九圓
小野勇吉	青木源八	小野清太郎	小野八右衛門	小野庄吉	奈良禮助	青木庄治郎	小野作太郎	菊地長藏	德原源之助	佐々木金三郎	水澤久兵衛	佐々木吉右衛門	水澤市太郎	高橋馬之助	高橋喜治	高橋理喜
地七拾五圓	地三拾八圓	地拾九圓	地拾六圓	地貳拾六圓	地五拾六圓	地貳拾五圓	地三拾貳圓	地拾五圓	地拾八圓	地拾六圓	地四拾貳圓	地三拾四圓	地三拾九圓	地三拾九圓	地二拾三圓	地二拾三圓
佐々木耕太郎	伊藤正一	佐々木庄三郎	藤原長助	菅原善六	菅原万吉	菅原作太郎	菅原右一郎	菅原駒藏	菅原辰五郎	鎌田傳治	菅原多兵衛	櫻庭庄左衛門	菅原源一	館岡新三郎	富山喜八郎	菅原與一郎

地拾六圓	菅原多吉	地拾七圓	佐藤孫兵衛
地百拾九圓	高橋嘉右衛門	地拾七圓	門松作右衛門
地拾五圓	千田重三郎	地六拾五圓	伊藤福治
地拾八圓	菅原多治右衛門	地三拾六圓	門間助左衛門
地貳拾六圓	島山長四郎	地貳拾八圓	寒川井治吉
地貳拾壹圓	菅原金四郎	地貳拾九圓	鏡勘五郎
地三拾四圓	小林千代吉	地拾五圓	鏡勘長八
地貳拾三圓	進藤祐治	地拾七圓	山口銀右衛門
飯田川村		地貳拾壹圓	佐藤忠之助
地八拾七圓	鏡源之助	地拾八圓	淡路金治郎
地四拾圓	鏡喜左衛門	地貳拾九圓	原田善治
地四拾圓	鈴木泰助	地六拾六圓	淡路島藏
地六拾壹圓	佐藤八之丞	地五拾八圓	加藤禮助
地三拾二圓	高橋榮助	地拾五圓	淡路幸祐
地三拾五圓	伊藤福太郎	地貳拾壹圓	菊地嘉吉
地四拾三圓	三浦三五郎	地三拾九圓	菊地長藏
地四拾三圓	齋藤鶴治	地貳拾五圓	菊地宇吉
地七拾圓	伊藤源六	地貳拾圓	三浦長吉
地貳拾四圓	伊藤定吉	地八拾五圓	
地三拾三圓	伊藤由藏		

地貳拾七圓	加藤傳十郎	地貳拾六圓	寺岡金藏
地百三十四圓	三浦勝三郎	地四拾九圓	小玉久米之助
地拾五圓	三浦金藏	地三拾六圓	門間良太郎
地三拾壹圓	加藤傳左衛門	地五拾六圓	小玉多助
地拾五圓	三浦仁市	地八拾壹圓	二田是儀
地五拾四圓	菊地富之助	地三拾五圓	伊藤長市
地四拾四圓	菊地新藏	地貳拾五圓	門間佐太郎
地貳拾圓	菊地久之助	地拾九圓	門間堅助
地貳拾三圓	伊藤助吉	地五拾三圓	山平友治
地拾八圓	原田長吉	地五拾貳圓	田仲善治
地五拾貳圓	鈴木已之松	地貳拾圓	小玉三助
地拾五圓	鈴木富藏	地貳拾七圓	古戶三之助
地三拾八圓	原田利吉	地貳拾四圓	古戶午五郎
地五拾壹圓	伊藤五三郎	地六拾圓	奈良冷助
地貳拾四圓	菊地西松	地貳拾四圓	鈴木定吉
地拾八圓	門間金藏	地貳拾五圓	鈴木勘助
地三拾五圓	干種彦三郎	地十九圓	鈴木岩藏
地貳拾三圓	門間源藏	地百二十二圓	鈴木庄三郎
地貳拾壹圓	伊藤源藏	地百三十二圓	
地貳拾壹圓	二田藏治		

地拾九圓	地九十三圓	地百五十二圓	地貳拾貳圓	地貳拾壹圓	地拾八圓	地貳拾九圓	地拾五圓	地百三圓	地三拾五圓	地貳拾四圓	地五拾圓	地貳拾五圓	地拾五圓	地拾八圓	地拾九圓	地貳拾壹圓	地拾九圓
佐々木 與平治	平野 卯之助	澤井 岩太郎	川上 梅之助	澤井 善治郎	澤井 萬治	澤井 小助	石川 理紀之助	小武 海房松	櫻庭 金四郎	小武 海兵衛	藤田 多十郎	藤田 吉太郎	小武 海春松	白川 三之助	藤田 小八	藤田 小八	藤田 小八
地貳拾圓	地拾五圓	地貳拾三圓	地三拾圓	地貳拾壹圓	地拾九圓	地八拾四圓	地拾八圓	地拾九圓	地貳拾四圓	地拾九圓	地拾七圓	地拾五圓	地拾六圓	地貳拾七圓	地拾五圓	地拾七圓	地三拾七圓
藤田 清藏	伊藤 浦清助	三浦 清吉	兒玉 金松	兒玉 甚兵衛	伊藤 甚久藏	伊藤 甚久藏	伊藤 甚久藏	伊藤 甚久藏	伊藤 甚久藏	伊藤 甚久藏	伊藤 甚久藏	伊藤 甚久藏	伊藤 甚久藏	伊藤 甚久藏	伊藤 甚久藏	伊藤 甚久藏	伊藤 甚久藏

地四拾九圓	地三拾九圓	地三拾六圓	地貳拾五圓	地六拾貳圓	地拾九圓	地拾六圓	地貳拾六圓	地貳拾壹圓	地拾七圓	地拾八圓	地三拾八圓	地三拾八圓	地三拾四圓	地拾五圓	地拾九圓	地三拾二圓	地貳拾七圓
鷲谷 喜兵衛	伊藤 利吉	小玉 久太郎	島山 清左衛門	鈴木 又吉	漆 今吉	漆 吉十郎	漆 長右衛門	森田 福太郎	中山 金四郎	鈴木 政吉	伊藤 七太郎	遠藤 富藏	中道 三藏	伊藤 多郎	中道 金治	伊藤 藤林藏	伊藤 藤和吉
地拾五圓	地拾七圓	地四拾壹圓	地拾七圓	地貳拾九圓	地貳拾貳圓	地貳拾五圓	地貳拾三圓	地五拾五圓	地四拾四圓	地貳拾三圓	地三拾六圓	地拾八圓	地三拾貳圓	地拾六圓	地拾貳圓	地拾七圓	地貳拾三圓
中道 喜四郎	伊藤 常五郎	伊藤 藤與四郎	伊藤 藤與四郎	伊藤 藤與四郎	伊藤 藤與四郎	伊藤 藤與四郎	伊藤 藤與四郎	伊藤 藤與四郎	伊藤 藤與四郎	伊藤 藤與四郎	伊藤 藤與四郎	伊藤 藤與四郎	伊藤 藤與四郎	伊藤 藤與四郎	伊藤 藤與四郎	伊藤 藤與四郎	伊藤 藤與四郎

地貳拾五圓	地六拾五圓	地三拾八圓	地貳拾四圓	地貳拾圓	地拾五圓	地拾七圓	地四拾三圓	地三拾九圓	地拾五圓	地拾九圓	地三拾八圓	地拾五圓	地貳拾四圓	地貳拾五圓	地貳拾五圓
高橋清吉	高橋庄助	石井岩太郎	佐藤金五郎	工藤喜男	石井金藏	港久四郎	伊藤真吉	小林重藏	加藤孫太郎	安田專助	三浦菊松	齋藤周太郎	齋藤彦太郎	三浦善七郎	齋藤多十郎
地貳拾圓	地三拾八圓	地四拾五圓	地貳拾圓	地貳拾七圓	地貳拾三圓	地貳拾三圓	地貳拾三圓	地貳拾七圓	地貳拾七圓	地貳拾七圓	地貳拾七圓	地貳拾七圓	地貳拾七圓	地貳拾七圓	地貳拾七圓
菅生重吉	菅生順治	菅生佐吉	武場五兵衛	工藤長之助	工藤駒藏	渡邊久米藏	伊藤彌吉	伊藤善左衛門	鈴木菊松	伊藤豐治	齋藏多一郎	小玉五郎	小林久三郎	藤原利吉	小林善之助

地拾五圓	地貳拾四圓	地四拾七圓	地五拾五圓	地七拾貳圓	地貳拾四圓	地貳拾三圓	地拾八圓	地五拾九圓	地貳拾九圓	地貳拾六圓	地拾七圓	地四拾五圓	地三拾八圓	地拾九圓	地貳拾貳圓	地拾四圓	地貳拾四圓	地拾六圓
伊藤藤助	嶋崎喜八郎	小藤良之助	伊藤榮太郎	八柳喜市	淺野敬助	北島安藏	玉淵助右衛門	伊藤多郎治	木村松助	木村雄藏	佐藤和助	佐藤辰五郎	佐藤善右衛門	佐藤善兵衛	笹川與吉	島崎多市	小藤万五郎	小玉今吉
地貳拾圓	地四拾貳圓	地拾九圓	地三拾五圓	地貳拾壹圓	地貳拾壹圓	地貳拾壹圓	地貳拾壹圓	地貳拾壹圓	地三拾三圓	地四拾三圓	地拾七圓	地拾七圓	地三拾六圓	地貳拾八圓	地貳拾壹圓	地拾七圓	地貳拾貳圓	地拾六圓
小玉長治	小玉永吉	佐藤重四郎	小玉長三郎	金子寅藏	小玉重藏	小玉孫太郎	小玉源藏	小玉乙松	千田久松	加藤万吉	佐藤常松	加藤常吉	加藤常吉	加藤常吉	加藤常吉	加藤常吉	加藤常吉	加藤常吉

地百十一圓	地拾九圓	地貳拾壹圓	地七拾七圓	地三拾六圓	地貳拾貳圓	地拾六圓	地六拾壹圓	地貳拾壹圓	地拾八圓	地百六圓	地貳拾四圓	地拾七圓	地六拾五圓	地三拾九圓	地貳拾九圓	地四拾圓	地貳拾六圓	地拾八圓	地貳拾七圓	
島山源之丞	小林九右衛門	島山萬助	相馬久三郎	土橋三治	伊藤菊藏	島山万五郎	島山龜松	小玉藤吉	土橋新五郎	島山善四郎	齋藤久之助	小野幾松	小野藤八	武田富治	小玉佐市	小野清治	小野藤治	相馬和吉	伊藤傳之助	
地拾五圓	地百七圓	地五拾貳圓	地拾五圓	地拾五圓	地拾六圓	地三拾七圓	地拾八圓	面	地拾七圓	地貳拾圓	地拾六圓	地貳拾四圓	地百九圓	地七拾四圓	地三拾六圓	地拾八圓	地拾五圓	地拾七圓	地百一圓	所五圓
山内長之助	小柳清左衛門	相馬榮吉	相馬常吉	三戶長治	島山彌治	藤井七之丞	三戶甚左衛門	村	北嶋久五郎	小玉淺治	菊地七之助	小玉長十郎	佐藤四兵衛	小玉八之丞	佐藤久之助	小玉長四郎	吉田與七	佐々木多市	北嶋吉右衛門	

地貳拾九圓	地拾九圓	地貳拾九圓	地貳拾六圓	地拾五圓	地八拾貳圓	地五拾五圓	地貳拾貳圓	地拾五圓	地三拾壹圓	地貳拾壹圓	地拾五圓	地貳拾貳圓	地拾六圓	地拾六圓	地拾五圓	地貳拾六圓			
金三平	金兵吉	金孫三郎	金勘長	金清右衛門	北嶋甚一郎	北嶋喜市	齋藤丹治	金民松	加藤與助	北嶋傳四郎	小野吉太郎	近藤長兵衛	小玉嘉右衛門	小野與太郎	北嶋長治	松田與市	渡部久松	村井清之丞	村井和吉
地三拾三圓	地拾六圓	地貳拾四圓	地五拾九圓	地拾五圓	地七拾貳圓	地拾九圓	地貳拾七圓	地四拾二圓	地三拾五圓	地五拾圓	地拾七圓	地貳拾九圓	地三拾七圓	地五拾七圓	地拾六圓	地拾七圓	地百八圓	地拾七圓	地三拾三圓
渡邊榮四郎	渡部新右衛門	渡部善四郎	渡部甚助	工藤八吉	渡部金藏	戶田永之助	村井藤之助	千田平三郎	齋藤多吉	佐々木長助	千田岩五郎	宮田庄司	佐々木火吉	千田謙助	佐川熊吉	櫻庭政吉	伊藤九郎兵衛	櫻庭久治	伊藤久五郎

地貳拾貳圓	櫻庭清松	地貳拾六圓	小玉倉吉
地三拾八圓	櫻庭禮助	地拾六圓	栗山與助
地貳拾貳圓	石井清之助	地貳拾三圓	今村專太郎
地貳拾壹圓	櫻庭久五郎	地三拾三圓	佐川文藏
五十目村		地三拾圓	渡邊宇吉
		地拾七圓	長谷川五郎左門
北嶋孫吉		地三拾壹圓	館岡駒藏
渡邊綱松		地拾七圓	福田仁兵衛
柳原英之助		地拾八圓	石井久治郎
宮田乙松		地拾六圓	大石嘉兵衛
今村久五郎		地貳拾八圓	泉谷庄吉
荒川多一郎		地貳拾壹圓	菊地永吉
渡邊德太郎		地三拾七圓	渡邊佐五兵衛
福田甚助	馬川	地貳拾七圓	伊藤金藏
菅原惣助	村	地貳拾壹圓	猿田伊助
米田貞治		地貳拾八圓	猿田常吉
小玉富吉		地拾六圓	鳥井與四郎
近藤長助		地四拾五圓	鳥井善治
千田敬治		地貳拾六圓	猿田長治

地拾五圓	猿田菊松	地三拾壹圓	村上多兵衛
地九拾貳圓	渡邊祐藏	地貳拾壹圓	齋藤昌一
地七拾三圓	伊藤寅吉	地拾七圓	齋藤新藏
地貳拾三圓	猿田勘左工門	地貳拾四圓	本間小八郎
地三拾三圓	一ノ關重右工門	地拾八圓	齋藤庄助
地三拾九圓	一ノ關卯之松	地貳拾三圓	
地百二圓	館岡重四郎	馬場目村	
地七拾四圓	館岡瀨四郎	地拾六圓	石川房五郎
地六拾四圓	館岡兵助	地拾七圓	石川松兵衛
地四拾三圓	館岡德五郎	地拾九圓	石井永吉
地拾七圓	館岡長治	地貳拾五圓	越高直吉
地貳拾貳圓	館岡茂吉	地三拾三圓	金野柳之助
地三拾四圓	館岡彦五郎	地拾七圓	佐藤利左衛門
地三拾貳圓	館岡清助	地貳拾壹圓	佐藤儀助
地貳拾七圓	武田松之助	地百九十二圓	兒玉孫左衛門
地貳拾七圓	武田安太郎	地貳拾四圓	佐藤良吉
地五拾八圓	館岡梅五郎	地四拾貳圓	佐藤久右衛門
地貳拾九圓	館岡徳松	地五拾六圓	石井三郎左衛門
		地貳拾貳圓	石井有清

地貳拾壹圓	石井定吉	地拾五圓	小玉仁七郎
地拾八圓	伊藤吉三郎	地拾九圓	小玉新之助
地貳拾貳圓	宮城清兵衛	地拾五圓	伊藤久四郎
地貳拾三圓	齋藤升藏	地貳拾九圓	小玉寅五郎
地拾九圓	伊藤市郎左衛門	地拾六圓	阿部藤治郎
地貳拾四圓	伊藤彌吉郎	地拾九圓	阿部千代吉
地貳拾五圓	伊藤清治	地貳拾六圓	原田善治郎
地拾七圓	齋藤爲吉	地拾四圓	島山右衛門
地拾八圓	宮川與助	地拾四圓	推名忠治
地拾七圓	草皆茂	地拾五圓	石井光五郎
地拾七圓	草皆鶴	地拾四圓	小濱重吉
地拾七圓	宮川藤助	地拾六圓	伊藤儀三郎
地拾七圓	伊藤五兵衛	地拾四圓	大石鉄之助
地拾七圓	伊藤六之丞	地拾四圓	大石久米吉
地拾七圓	島山清吉	地拾四圓	小林直吉
地拾九圓	伊藤大治右衛門	地拾四圓	大石孫右衛門
地拾九圓	伊藤利吉	地拾八圓	畑山長左衛門
地拾九圓	小玉百松	地拾八圓	淺野忠助
		地拾五圓	小林才吉
		地拾三圓	小林丹四郎

地三拾圓	小林和助	地百四十八圓	兒玉倉治
地四拾圓	大石友藏	地拾九圓	沼田由五郎
地五拾八圓	松田清治	地貳拾四圓	安田嘉一郎
地貳拾八圓	工藤金藏	地拾九圓	安田仁吉郎
地拾八圓	松橋長治	地拾五圓	安田與平治
地拾五圓	工藤八十吉	地拾四圓	櫻庭清吉
地貳拾貳圓	松橋岩太郎	地拾四圓	丸谷友吉
地貳拾圓	工藤善左衛門	地拾九圓	石川喜太郎
地四拾壹圓	工藤七郎左衛門	地拾八圓	伊藤梅之助
地拾六圓	工藤善五右衛門	地拾七圓	藤原三右衛門
地貳拾四圓	猿田忠治	地拾七圓	藤原五兵衛
地貳拾圓	石井助右門	地拾七圓	藤原七藏
地貳拾八圓	千葉與右門	地拾七圓	三浦周助
地貳拾四圓	澤田石永吉	地拾六圓	吉田新助
地貳拾四圓	澤田石字吉	地拾六圓	三浦金治郎
地拾九圓	石井新左門	地貳拾五圓	三浦長藏
地拾九圓	石井新之丞	地貳拾五圓	吉田辰五郎
地貳拾壹圓	石井久三郎	地拾五圓	三浦清兵衛

地二百三十五圓	地二百八圓	地三百三十二圓	地七百拾九圓	地九拾九圓	地六十四圓	地八十一圓	地三十三圓	地百八圓	地三十八圓	地百八圓	地百八圓	地百八圓	地百八圓	地百八圓	地百八圓	地百八圓	地百八圓	地百八圓	地百八圓	地百八圓
越	拂		村	村	村	村	村	村	村	村	村	村	村	村	村	村	村	村	村	村
三浦六松	海道由松	中田五平	木元仁右工門	鎌田多吉	加藤政治	戸島政治	安田長治郎	天野龜五郎	塚貝政治	太田政助	天野吉右工門	太田政光	安田伊惣治	大野永之助	太田政胤	西村丈夫	太田政胤	大野永之助	太田政胤	西村丈夫
地貳拾九圓	地拾五圓	地拾五圓	地拾五圓	地貳拾九圓	地貳拾四圓	地貳拾七圓	地拾六圓	地拾七圓	地拾八圓	地貳拾壹圓	地貳拾七圓	地貳拾貳圓	地拾九圓	地貳拾貳圓	地貳拾七圓	地貳拾九圓	地貳拾九圓	地貳拾九圓	地貳拾九圓	地貳拾九圓
戸部由松	戸部由松	小澤田勝之助	三村慶助	渡邊景基	船橋文治郎	吉田仁左工門	吉田慶助	吉田慶助	吉田慶助	吉田慶助	吉田慶助	吉田慶助	吉田慶助	吉田慶助	吉田慶助	吉田慶助	吉田慶助	吉田慶助	吉田慶助	吉田慶助

地貳拾貳圓	地貳拾壹圓	地貳拾壹圓	地貳拾壹圓	地貳拾壹圓	地貳拾壹圓	地貳拾壹圓	地貳拾壹圓	地貳拾壹圓	地貳拾壹圓	地貳拾壹圓	地貳拾壹圓	地貳拾壹圓	地貳拾壹圓	地貳拾壹圓	地貳拾壹圓	地貳拾壹圓	地貳拾壹圓	地貳拾壹圓	地貳拾壹圓	地貳拾壹圓
地貳拾壹圓	地貳拾壹圓	地貳拾壹圓	地貳拾壹圓	地貳拾壹圓	地貳拾壹圓	地貳拾壹圓	地貳拾壹圓	地貳拾壹圓	地貳拾壹圓	地貳拾壹圓	地貳拾壹圓	地貳拾壹圓	地貳拾壹圓	地貳拾壹圓	地貳拾壹圓	地貳拾壹圓	地貳拾壹圓	地貳拾壹圓	地貳拾壹圓	地貳拾壹圓
吉田喜三郎	吉田喜三郎	吉田喜三郎	吉田喜三郎	吉田喜三郎	吉田喜三郎	吉田喜三郎	吉田喜三郎	吉田喜三郎	吉田喜三郎	吉田喜三郎	吉田喜三郎	吉田喜三郎	吉田喜三郎	吉田喜三郎	吉田喜三郎	吉田喜三郎	吉田喜三郎	吉田喜三郎	吉田喜三郎	吉田喜三郎
關山甚一	加藤堅之助	加藤庄之助	渡部乙吉	吉田三郎	吉田三郎	吉田三郎	吉田三郎	吉田三郎	吉田三郎	吉田三郎	吉田三郎	吉田三郎	吉田三郎	吉田三郎	吉田三郎	吉田三郎	吉田三郎	吉田三郎	吉田三郎	吉田三郎

地百二十五圓	地百八圓	地百五拾五圓	地拾七圓	地拾九圓	地拾五圓	地拾八圓	地拾七圓	地拾六圓	地拾八圓	地拾九圓	地拾九圓	地拾九圓	地拾九圓	地拾九圓	地拾九圓	地拾九圓	地拾九圓	地拾九圓	地拾九圓	地拾九圓
高橋專之助	佐藤甚兵衛	佐藤萬治	佐藤名七	佐藤堅助	佐藤小四郎	大關作助	板橋幾松	板橋雀松	伊藤重五郎	武藤銀兵衛	武藤清七	板橋喜内	佐藤三藏	高橋弁治	佐藤長三郎	高橋弁治	佐藤長三郎	佐藤長三郎	佐藤長三郎	佐藤長三郎
地拾九圓	地拾九圓	地拾九圓	地拾九圓	地拾九圓	地拾九圓	地拾九圓	地拾九圓	地拾九圓	地拾九圓	地拾九圓	地拾九圓	地拾九圓	地拾九圓	地拾九圓	地拾九圓	地拾九圓	地拾九圓	地拾九圓	地拾九圓	地拾九圓
高橋專之助	佐藤甚兵衛	佐藤萬治	佐藤名七	佐藤堅助	佐藤小四郎	大關作助	板橋幾松	板橋雀松	伊藤重五郎	武藤銀兵衛	武藤清七	板橋喜内	佐藤三藏	高橋弁治	佐藤長三郎	高橋弁治	佐藤長三郎	佐藤長三郎	佐藤長三郎	佐藤長三郎

地拾九圓	地拾五圓	地拾三圓	地拾九圓	地拾四圓	地拾三圓	地拾三圓	地拾三圓	地拾三圓	地拾三圓	地拾三圓	地拾三圓	地拾三圓	地拾三圓	地拾三圓	地拾三圓	地拾三圓	地拾三圓	地拾三圓	地拾三圓	地拾三圓
原田與七郎	原田長三郎	川浦彦兵衛	三浦孫兵衛	三浦市右門	鈴木與作	伊藤佐助	佐藤嘉七	佐藤多吉	佐藤長吉	澤木長吉	鎌田政治	飯澤喜兵衛	江畑寅藏	三浦慶吉	島山定吉	田沼慶吉	田沼長之助	田沼長之助	田沼長之助	田沼長之助
地拾六圓	地拾九圓	地拾九圓	地拾九圓	地拾八圓	地拾八圓	地拾八圓	地拾六圓	地拾六圓	地拾六圓	地拾六圓	地拾六圓	地拾六圓	地拾六圓	地拾六圓	地拾六圓	地拾六圓	地拾六圓	地拾六圓	地拾六圓	地拾六圓
新山政五郎	小田庫吉	小田猪助	鎌田丹治	谷口八五郎	小松善松	安田善左門	安田三五郎	大淵勘助	鳴宮久太郎	登藤久太郎	石垣竹松	加藤佐市	石川運吉	齋藤正梓	目黒彌助	目黒佐吉	目黒平	目黒平	目黒平	目黒平

地三拾五圓	目黑嘉七助	地貳拾貳圓	五里合村	伊藤萬治郎
地三拾九圓	目黑茂助	地貳拾四圓	地二百二十七圓	嵯峨萬治郎
地貳拾六圓	目黑彦五郎	地六拾貳圓	地七圓	佐々木喜平治
地五拾五圓	目黑忠吉	地貳拾三圓	地七拾三圓	杉本喜七
地三拾四圓	目黑市助	地七拾三圓	地貳拾三圓	藤田市藏
地百二十七圓	目黑真治	地貳拾三圓	地貳拾三圓	佐々木利吉
地四拾圓	三浦源藏	地貳拾三圓	地貳拾三圓	薄田文治郎
地三拾壹圓	武田市太郎	地貳拾三圓	地貳拾三圓	薄田貞治
地五拾五圓	三浦重吉	地貳拾三圓	地貳拾三圓	小坂兵作
地三拾貳圓	武田善三郎	地貳拾三圓	地貳拾三圓	薄田太吉郎
地貳拾四圓	大高庄左工門	地貳拾三圓	地貳拾三圓	薄田太三郎
地貳拾貳圓	佐澤久松	地貳拾三圓	地貳拾三圓	小野直吉
地拾五圓	佐澤長市	地貳拾三圓	地貳拾三圓	武田好松
地貳拾圓	大森與市	地貳拾三圓	地貳拾三圓	小野惣吉
地拾六圓	天森甚五郎	地貳拾三圓	地貳拾三圓	佐藤三五兵衛
地貳拾貳圓	武田丈吉	地貳拾三圓	地貳拾三圓	村井怒助
地七拾七圓	武田七十郎	地貳拾三圓	地貳拾三圓	村井助吉
地三拾三圓	大森松藏	地貳拾三圓	地貳拾三圓	真壁平治
		地貳拾三圓	地貳拾三圓	杉本三太郎

地貳拾圓	杉本與助	地貳拾圓	伊藤孫右工門
地百拾壹圓	杉本長松	地貳拾九圓	谷仁右工門
地拾五圓	田沼信之助	地拾六圓	三浦嘉七
地八拾九圓	小川七藏	地拾八圓	大淵吉太郎
地貳拾圓	戶島太吉	地拾六圓	大淵嘉七
地八拾八圓	柴田藤右工門	地三拾五圓	大淵彌平吉
地八拾九圓	渡部助藏	地貳拾壹圓	三浦字右工門
地三拾九圓	相澤丈吉	地四拾壹圓	大淵平吉
地拾五圓	渡部石藏	地三拾四圓	鈴木作大郎
地拾八圓	渡部助治郎	地三拾九圓	鈴木久五郎
地拾五圓	渡部寅藏	地貳拾七圓	山方三太郎
地貳拾七圓	鈴木定三郎	地貳拾七圓	鈴木元吉
地五拾圓	永井永吉	地貳拾壹圓	渡部惣治郎
地拾九圓	鈴木勘治郎	地貳拾壹圓	渡部惣治郎
地貳拾貳圓	加藤常藏	地貳拾壹圓	鈴木嘉七
地三拾貳圓	加藤元吉	地貳拾壹圓	兒玉永助
地貳拾貳圓	鎌田三藏	地貳拾壹圓	兒玉多五兵衛
地拾七圓	伊藤彌左工門	地拾六圓	兒玉惣之助

地五拾圓	佐藤	地四拾六圓	畠山新兵衛
地七拾圓	大淵	地四拾五圓	佐藤新之助
地貳拾七圓	進藤	地四拾七圓	加藤正吉
地拾九圓	兒玉	地五拾九圓	渡部龜吉
地拾六圓	佐藤	地三拾九圓	畠山長作
地貳拾八圓	小玉	地四拾圓	西方常吉
地拾六圓	中田	地貳拾貳圓	佐藤與左工門
地二拾八圓	小田	地拾九圓	佐藤新助
地三拾六圓	佐藤	地拾六圓	佐藤元吉
地拾八圓	鎌田	地拾九圓	佐藤富藏
地拾五圓	佐藤	地貳拾圓	中田久助
地拾五圓	小坂	地四拾圓	中田太郎
地貳拾六圓	佐藤	地八拾四圓	中田藤五郎
地貳拾壹圓	佐藤	地五拾壹圓	中田與吉
地貳拾六圓	佐藤	地貳拾圓	柴田茂八
地拾七圓	佐藤	地拾八圓	柴田喜市
地拾五圓	加藤	地貳拾七圓	佐藤金助
地貳拾六圓	渡部	地貳拾貳圓	大越佐平
地貳拾圓	渡部	地貳拾圓	大越要助

北秋田郡

鷹巢村

地七百七十五圓	河田與惣左工門	地貳拾壹圓	龜山幸吉
地五百八圓	成田儀八郎	地拾五圓	碓谷惣右工門
地貳拾貳圓	河田長五郎	地三拾貳圓	田村善治
地拾七圓	成田文太郎	地五拾三圓	藤島直吉
地二百四圓	相馬友吉	地拾五圓	畠山孫六
地百六十六圓	成田和兵衛	地三拾三圓	村上五兵衛
地三拾三圓	或田多七	地貳拾六圓	本城谷多一郎
地貳拾六圓	長谷川伊左工門	地貳拾壹圓	金澤與八
地貳拾三圓	田島胤隆	地百四十二圓	小坂保太郎
地四十五圓	河田嘉兵衛	地三拾四圓	長谷川彦市
地七拾壹圓	成田茂作	地貳拾三圓	福原勘右工門
地百十七圓	成田良藏	地拾五圓	藤島米吉
地四十二圓	成田甚藏	地拾六圓	松岡治助
地拾八圓	成田龜治	地拾五圓	松尾市五郎
地貳拾五圓	河田與五兵衛	地貳拾四圓	高橋喜代松
地四十九圓	成田庫吉	地拾七圓	松尾藤吉
地三圓		地拾八圓	松尾留吉

築村

地貳拾壹圓	龜山幸吉
地拾五圓	碓谷惣右工門
地三拾貳圓	田村善治
地五拾三圓	藤島直吉
地拾五圓	畠山孫六
地三拾三圓	村上五兵衛
地貳拾六圓	本城谷多一郎
地貳拾壹圓	金澤與八
地百四十二圓	小坂保太郎
地三拾四圓	長谷川彦市
地貳拾三圓	福原勘右工門
地拾五圓	藤島米吉
地拾六圓	松岡治助
地拾五圓	松尾市五郎
地貳拾四圓	高橋喜代松
地拾七圓	松尾藤吉
地拾八圓	松尾留吉

地拾九圓	坊	松尾吉松	地拾八圓	大川忠治
地貳拾五圓	澤	津谷市五郎	地貳拾三圓	戶澤三左衛門
地拾九圓	村	佐藤甚太郎	地貳拾壹圓	野呂常吉
地拾六圓		高坂權八郎	地拾六圓	藤田祐藏
地貳拾貳圓		成田清之助	地拾五圓	澤田治三郎
地拾六圓		津谷金藏	地貳拾五圓	澤田佐吉
地拾九圓		石井久藏	地貳拾四圓	藤內甚之丞
地貳拾四圓		能登谷增五郎	地拾五圓	工藤重藏
地五拾九圓		佐藤又藏	地貳拾壹圓	藤內甚十郎
地六拾圓		津谷喜三郎	綴	村
地貳拾三圓		長崎兵治右工門	地拾八圓	宮野太郎八
地三拾五圓		河田與茂七	地三拾四圓	佐藤與左衛門
地貳拾三圓		櫻庭竹五郎	地三拾一圓	藤嶋喜藏
地貳拾九圓		寺田孫左衛門	地三拾一圓	佐藤與一
地三拾八圓		櫻庭治助	地拾六圓	高橋宇吉郎
地拾九圓	七	佐々木徳五郎	地拾九圓	佐藤與治右衛門
地貳拾圓	座	櫻庭佐市郎	地三拾九圓	齋藤彦松
		大川左右吉	地貳拾壹圓	九嶋彦松

地七拾圓	九嶋仁吉郎	地拾五圓	藤田申松
地拾五圓	畠山重治郎	地拾九圓	工藤兵衛
地貳拾壹圓	村上貞助	地拾五圓	佐藤松
地貳拾壹圓	村上貞助	地拾六圓	伊藤多治兵衛
地拾六圓	村上貞助	地貳拾三圓	工藤藏之助
地貳拾四圓	村上貞助	地貳拾貳圓	高坂與四郎
地貳拾三圓	村上貞助	地四拾六圓	木村松五郎
地貳拾四圓	村上貞助	地四拾三圓	高橋三郎右衛門
地三拾壹圓	村上貞助	地六拾三圓	工藤久助
地貳拾六圓	村上貞助	地八拾貳圓	五十嵐權十郎
地貳拾五圓	村上貞助	地三十九圓	金澤重藏
早	村上貞助	地三十九圓	岸規矩治
地拾八圓	村上貞助	地拾六圓	田村幸助
地拾八圓	村上貞助	地拾七圓	岩澤熊治
地拾五圓	村上貞助	地拾六圓	田村定吉
地拾五圓	村上貞助	地拾六圓	佐藤才六
地拾七圓	村上貞助	地拾六圓	田村三平
地拾五圓	村上貞助	地拾五圓	片岡傳助

地五拾八圓
地貳拾圓
地拾九圓
地拾五圓
地四拾四圓
地拾五圓
地貳拾四圓
地拾六圓
地貳拾貳圓
地拾五圓
地拾五圓
地三拾貳圓
地貳拾七圓
地拾六圓
地拾七圓
地四拾五圓
地拾八圓
地貳拾貳圓
地拾五圓

岩澤兵治右衛門
田村仁藏
岩澤多兵衛
片岡松右衛門
藤嶋梅之助
幸坂三之丞
片岡多七郎
田村助吉
淺利與助
前田常松
赤坂善藏
佐々木菊松
幸坂梅吉
田村弟藏
岩澤申松
片岡文吉
田村喜平治
岩澤金治
淺利與吉
片岡友之助

地拾六圓
地拾六圓
地拾七圓
地貳拾壹圓
地拾五圓
地三拾五圓
地拾七圓
地貳拾圓
地拾六圓
地貳拾五圓
地拾九圓
地四拾九圓
地貳拾壹圓
地百六十九圓
地拾七圓
地拾五圓
地貳拾六圓
地貳拾貳圓

下川沼村
淺利小左衛門
松坂巳之松
佐藤德太郎
石川佐治右衛門
太田喜太郎
安部勘五郎
高清水萬太郎
蛇川岩五郎
石川萬助
石川長助
鎌田永吉
長崎常吉
中嶋政吉
小林重右衛門
佐藤傳七
小林重太郎
佐藤源助
小林喜三郎

地拾八圓
地貳拾貳圓
地貳拾圓
地六拾七圓
地七拾三圓
地貳拾圓
地拾八圓
地拾七圓
地四拾五圓
地三拾貳圓
地貳拾六圓
地拾六圓
地拾六圓
地貳拾四圓
地七拾三圓
地貳拾七圓
地貳拾壹圓
地拾五圓
地三拾圓

上川沿村
工藤長吉
佐藤辰藏
齋藤永太郎
伊藤九八郎
伊藤文右衛門
伊藤幸吉
佐々木仁左衛門
鳴海常吉
兜森伊左門
本多福松
兜森甚太郎
鼠山伊吉郎
兜森幸太郎
本多重三郎
藤原佐五右衛門
藤原多三郎
菅原與右衛門
菅原與吉
菅原勇太郎

地拾六圓
地五十八圓
地三十五圓
地三拾圓
地四拾圓
地七拾圓
地五拾五圓
地貳拾六圓
地八十一圓
地三拾七圓
地七十六圓
地三拾圓
地四拾九圓
地九拾圓
地八拾貳圓
地三拾貳圓
地五拾四圓
地三拾壹圓

菅原小三郎
清水貞利
中田友之助
泉剛助
佐賀直久
太黒力藏
三ツ井正吉
高橋源藏
三ツ井與一郎
根本弦之助
根本永之助
横山勇喜
泉皆吉
石田辰藏
石田鶴之助
濱松新七
石塚源四郎

地貳拾貳圓	地五拾壹圓	地七拾六圓	地三拾三圓	地貳拾壹圓	地六拾九圓	地拾六圓	地百十三圓	地五拾圓	地拾九圓	地拾七圓	地五拾七圓	地三拾九圓	地貳拾圓	地三拾九圓	地四十六圓	地三十三圓
佐々木久吉	石塚良吉	武田孝之助	安穴平四郎	武石常三郎	山内久助	安穴善藏	長山源八郎	佐藤豐治	中田太郎藏	武藤勝十郎	小林永吉	八代庄治	藤田五左衛門	伊藤政藏	藤田又七郎	沼田又七郎
地七十圓	地貳拾九圓	地百十圓	地八拾五圓	地二百三圓	地三拾七圓	所拾九圓	地拾六圓	地六拾九圓	地四拾四圓	地四拾壹圓	地四十七圓	地四十七圓	地百六十五圓	地百七十四圓	地七十九圓	地三拾九圓
平泉喜六	岩澤定吉	石川與三郎	小林寅五郎	金澤榮吉	高橋文右衛門	小野長治	小野吉松	越前慶吉	佐藤茂八郎	小野長藏	藤嶋長右衛門	栗盛吉右衛門	藤島忠治	丸谷儀六	野口長六	橫井常松

地拾五圓	地貳拾九圓	地六拾三圓	地貳拾七圓	地拾六圓	地貳拾壹圓	地九拾四圓	地貳拾貳圓	地三拾壹圓	地拾五圓	地拾八圓	地七拾壹圓	地拾五圓	地貳拾三圓	地貳拾九圓	地貳拾八圓	地三拾四圓
三浦久之加	三浦清藏	石田兵吉	石田長太郎	田中多右衛門	石田三五郎	小笠原彦右衛門	近藤彌四郎	近藤長助	山内清松	田中命助	成田長治	木村永吉	戶田專助	成田長三郎	成田與惣兵衛	工藤養之丞
地三拾圓	地拾五圓	地拾六圓	地貳拾壹圓	地三拾九圓	地拾九圓	地三拾八圓	地拾五圓	地貳拾六圓	地四十二圓	地貳拾四圓	地貳拾四圓	地三拾七圓	地拾六圓	地拾六圓	地拾五圓	地貳拾三圓
佐々木重和	越前谷五三郎	和田治助	日景良達	加藤正治	木村多三郎	泉作太郎	木村與助	日景與吉郎	越前谷藏吉	奥村嘉左衛門	越前谷與市	日景長之助	菅原庄之助	泉子之吉	小松竹三郎	木村長吉

地貳拾七圓
地貳拾壹圓
地拾六圓
地拾八圓
地貳拾圓
地貳拾六圓
地四拾五圓
地貳拾壹圓
地拾五圓
地拾九圓
地拾九圓
地貳拾五圓
地貳拾壹圓
地貳拾三圓
地貳拾四圓
地六拾八圓
地拾六圓

日景平太
伊藤鑑幸
木村留吉
渡部八五地
越前谷玉吉
日景熊太
藤垣敬之助
佐藤善兵衛
島山清四地
島山清義
渡部松之助
渡邊乙松
櫻庭伊助
櫻庭甚助
櫻庭治部左衛門
櫻庭甚太地
田山忠誠
田山岩吉

地貳拾五圓
地三拾四圓
地拾五圓
地拾七圓
花岡
地貳拾貳圓
地拾五圓
地貳拾六圓
地貳拾四圓
地三拾五圓
地貳拾四圓
地貳拾貳圓
地拾五圓
地拾五圓
地拾五圓
地四拾貳圓
地拾七圓
地貳拾三圓
地貳拾五圓
地貳拾壹圓

此川義一
佐々木綱衛
三浦丑松
三浦三左衛門
渡邊久馬
大森孫七
阿部治兵衛
佐藤六右衛門
烏瀨市郎右衛門
高杉作太郎
藤盛與一郎
高杉八藏
佐々木文五郎
藤島藤助
阿部勝之助
藤盛長松
白川留之助
島澤松之助
成田治部之丞

地四拾貳圓
地四拾壹圓
地貳拾八圓
地四拾八圓
地貳拾壹圓
地拾九圓
地三拾九圓
地四拾圓
地拾五圓
地拾五圓
地拾五圓
地三拾三圓
地三拾一圓
地三拾四圓
地三拾五圓
地三拾九圓
地拾六圓
地拾六圓

矢立村
小林菊松
若松久助
笹嶋久藏
佐藤源之助
若狹彦市
佐々木源之丞
岩谷正治
佐藤惣市郎
岩谷勘助
山内金藏
坂本俊吉
麓長治
長岐三八郎
麓平久
加賀敬吉
明石德松
大和米松

地五百六十四圓
地三拾圓
地貳拾壹圓
地三拾三圓
地百九十三圓
地四拾四圓
地拾八圓
地拾九圓
地七拾五圓
地四拾五圓
地四拾壹圓
地四拾五圓
地貳拾七圓
地貳拾七圓
地貳拾七圓
地拾七圓
地三拾六圓
地貳拾貳圓
地五拾壹圓

明石萬助
明石順吉
富田九兵衛
明石多一郎
明石文治
仲谷菊吉
宮越金兵衛
佐藤松太郎
坂本永吉
荒谷五助
仲谷喜六
長岐爲五郎
梅村與兵衛
長岐三九郎
小西笠邦
宮島金治
佐藤半四郎
坂本藤一郎
飛田市三郎
佐藤政五郎

地拾五圓	地四拾圓	地三十三圓	地貳拾五圓	地拾五圓	地拾七圓	地三十二圓	地三拾壹圓	地貳拾三圓	地貳拾七圓	地貳拾六圓	地拾九圓	地拾九圓	地四拾八圓	地貳拾圓	地拾六圓	地貳拾壹圓	地三拾四圓	
麓平治	小林又兵衛	乳井久右衛門	佐藤理三郎	大澤敬助	大黒清藏	藤庭祐教	山脇永助	筒井仁吉	佐藤長吉	大澤吉之助	岩崎治兵衛	小林義禪	佐々木清治	高橋傳八	乳井良助	大和正夫	安藤徳松	大澤彌太郎
地百二十九圓	地五拾五圓	地三拾五圓	地貳拾六圓	地拾五圓	地貳拾七圓	地拾九圓	地貳拾六圓	地貳拾八圓	地貳拾圓	地貳拾四圓	地三拾圓	地三拾四圓	地拾五圓	地拾九圓	地三拾圓	地三拾四圓	地四拾壹圓	
高村周治	野日政吉	吉成昌	渡部昇一	茂木知端	谷田部佐兵衛	谷田部長助	中山謙吾	千葉吉左衛門	諏訪裕	佐々木松太郎	瀧澤善左衛門	前田定之助	千葉勝美	中山助五郎	秋元辰太郎	阿部角右衛門	島山市之助	
阿部忠吉																		

地貳拾九圓	地貳拾八圓	地四拾七圓	地拾七圓	地貳拾壹圓	地五拾五圓	地貳拾七圓	地貳拾圓	地拾八圓	地拾五圓	地五拾三圓	地貳拾六圓	地貳拾四圓	地八十五圓	地三拾五圓	地八拾壹圓	地貳拾壹圓		
畠山八十吉	荒谷桂吉	小松多治右衛門	渡邊和七	野呂喜左衛門	渡邊伊左衛門	小松多吉	武田久太郎	岸吉松	武田三四郎	小松多郎左衛門	武田伊之助	武田萬十郎	武田寅之助	佐藤萬五郎	羽澤誠之進	佐藤徳松	柴田巳之助	
地貳拾五圓	地拾九圓	地拾九圓	地貳拾圓	地拾六圓	地貳拾貳圓	地貳拾壹圓	地貳拾五圓	地拾五圓	地三拾圓	地貳拾壹圓	地拾八圓	地拾九圓	地拾五圓	地拾八圓	地貳拾五圓	地拾九圓	地拾九圓	
立石市松	小松豐藏	野呂清之助	本間又五郎	加藤太左衛門	本間久吉	佐々木良太郎	野呂徳太郎	菅原伊右衛門	根本藤松	野呂多一郎	多賀谷峰吉	芳賀寅吉	渡邊與吉郎	藤原永藏	菅原市太郎	渡邊巳之松	菅原富美	羽澤佐之助

地貳拾九圓	地貳拾八圓	地貳拾七圓	地貳拾六圓	地貳拾五圓	地貳拾四圓	地貳拾三圓	地貳拾二圓	地貳拾一圓	地貳拾圓	地拾九圓	地拾八圓	地拾七圓	地拾六圓	地拾五圓	地拾四圓	地拾三圓	地拾二圓	地拾一圓	地拾圓
渡邊宇一郎	高橋德太郎	松江米五郎	長谷部徳太郎	松江長太郎	高橋武左衛門	長谷部萬右衛門	高橋富松	高宮七治	高橋政吉	渡邊長治	千葉多一郎	一ノ關寅五郎	安達永藏	一ノ關兵太郎	小畑藤吉	仲澤幾之助			
地拾九圓	地拾八圓	地拾七圓	地拾六圓	地拾五圓	地拾四圓	地拾三圓	地拾二圓	地拾一圓	地拾圓	地拾九圓	地拾八圓	地拾七圓	地拾六圓	地拾五圓	地拾四圓	地拾三圓	地拾二圓	地拾一圓	地拾圓
小畑才吉	伊藤佐助	伊藤弁之助	仲澤松之助	富樫仁平	富樫四郎左衛門	小林三治	秋元喜右衛門	小澤万之助	富澤利兵衛	富澤伊吉	富澤寅吉	芳賀福吉	芳賀藏吉	武田與三郎	武田命助				

地貳拾九圓	地貳拾八圓	地貳拾七圓	地貳拾六圓	地貳拾五圓	地貳拾四圓	地貳拾三圓	地貳拾二圓	地貳拾一圓	地貳拾圓	地拾九圓	地拾八圓	地拾七圓	地拾六圓	地拾五圓	地拾四圓	地拾三圓	地拾二圓	地拾一圓	地拾圓
和田万助	石戸谷佐治兵衛	長崎永太郎	石戸谷孫吉	平泉慶吉	小畑善之助	富樫丈吉	富樫重藏	富樫庄左衛門	安達久助	武田政之助	石戸谷豐吉	長崎利四松	此川清松	此川貞吉	石戸谷万之助	此川六助	此川友之助		
地貳拾八圓	地拾九圓	地拾八圓	地拾七圓	地拾六圓	地拾五圓	地拾四圓	地拾三圓	地拾二圓	地拾一圓	地拾圓	地拾九圓	地拾八圓	地拾七圓	地拾六圓	地拾五圓	地拾四圓	地拾三圓	地拾二圓	地拾一圓
佐藤藤太郎	佐藤東吉	富山長助	花田富吉	佐藤七太郎	小塚久米藏	中島利左衛門	小塚儀兵衛	花田幸吉	小塚孫太郎	佐藤儀左衛門	中嶋儀左衛門	花田芳松	中嶋與五左衛門	中嶋山長助	佐藤和吉	長岐貞治			

地拾六圓	地拾五圓	地拾六圓	地拾九圓	地拾六圓	地拾五圓	地拾八圓	地拾八圓	地拾八圓	地拾八圓	地拾八圓	地拾八圓	地拾八圓	地拾八圓	地拾八圓	地拾八圓	地拾八圓	地拾八圓	地拾八圓	地拾八圓	地拾八圓
佐藤市五郎	清藤福太郎	佐藤水彌藏	相馬易五郎	佐藤文七助	藤原佐七	布田嘉助	長岐忠四郎	千葉菊權	島山忠左衛門	岩本重三郎	堀部三左衛門	千葉三藏	近藤岩松	木村文五郎	木村逸之助					
地拾九圓	地拾六圓	地拾八圓	地拾八圓	地拾六圓	地拾九圓	地拾五圓	地拾五圓	地拾七圓	地拾三圓	地拾八圓	地拾八圓	地拾八圓	地拾八圓	地拾六圓	地拾五圓	地拾八圓	地拾八圓	地拾八圓	地拾八圓	地拾八圓
近藤與八郎	樽岡松之助	泉谷友吉	武石九郎右衛門	武石嘉吉	武石實助	九島慶助	佐藤七助	秋元源之丞	柴田政五郎	金竹之助	金久左衛門	金逸郎	柴田作太郎	金七郎	九島己之松	鈴木多右衛門	鈴木吉五郎	鈴木萬之助	鈴木梅之助	金梅之助

地拾六圓	地拾六圓	地拾六圓	地拾六圓	地拾六圓	地拾六圓	地拾六圓	地拾六圓	地拾六圓	地拾六圓	地拾六圓	地拾六圓	地拾六圓	地拾六圓	地拾六圓	地拾六圓	地拾六圓	地拾六圓	地拾六圓	地拾六圓	地拾六圓
工藤東十郎	工藤重助	米倉辰五郎	永井德太郎	工藤熊五郎	佐藤名左門	永井金平	二階堂秀松	工藤甚兵衛	正田長左門	米倉重吉	米倉松太郎	工藤佐五郎	工藤東一郎	工藤佐五郎	工藤東一郎	工藤東一郎	工藤東一郎	工藤東一郎	工藤東一郎	工藤東一郎
地拾六圓	地拾六圓	地拾六圓	地拾六圓	地拾六圓	地拾六圓	地拾六圓	地拾六圓	地拾六圓	地拾六圓	地拾六圓	地拾六圓	地拾六圓	地拾六圓	地拾六圓	地拾六圓	地拾六圓	地拾六圓	地拾六圓	地拾六圓	地拾六圓
工藤文五郎	後藤茂市郎	佐藤富藏	櫻井平兵衛	高橋忠五郎	後藤長四郎	木村清五郎	後藤久八郎	櫻井辰五郎	後藤源治	後藤卯七郎	佐藤七郎兵衛	佐藤伊三郎	吉田勘六郎	佐藤米吉	櫻庭榮太郎	佐藤長十郎	吉田喜助	佐藤七右門	佐藤七右門	佐藤七右門

地拾六圓	吉田吉太郎	地拾五圓	佐藏重吉	地拾七圓	吉田多兵衛	地拾六圓	松橋德五郎	地拾七圓	松橋平三郎	地拾七圓	永坂長左門	地拾七圓	小林重治郎	地拾四圓	澤藤傳藏	地拾五圓	佐藤万七郎	地拾三圓	島山德藏	地拾八圓	伊藤久藏	地拾三圓	小野太郎兵衛	地拾四圓	藤嶋伊兵衛	地拾八圓	小田鶴吉	地拾七圓	藤島為吉	地拾五圓	杉澤德松	地拾五圓	高橋勘四郎	地拾三圓	藤田子之助	地拾三圓	高橋勘兵衛	地拾九圓	村岡長八
地拾六圓	高橋長四郎	地拾五圓	木村六郎左衛門	地拾七圓	藤岡三郎左衛門	地拾六圓	庄司易五郎	地拾七圓	近藤惣太郎	地拾六圓	藤岡三平	地拾九圓	成田長八郎	地拾七圓	鈴木富藏	地拾七圓	鈴木佐太郎	地拾六圓	齋藤甚助	地拾五圓	齋藤儀七	地拾五圓	土濃塚彦八	地拾六圓	櫻庭左門	地拾六圓	杉淵忠五郎	地拾六圓	伊藤萬藏	地拾八圓	伊東喜一郎	地拾八圓	伊藤三之助	地拾六圓	伊藤三之助	地拾六圓	伊藤三之助		

下小阿仁村

地拾九圓	伊藤金藏	地拾六圓	松淵源一郎	地拾六圓	伊東東三郎	地拾六圓	三浦甚之丞	地拾五圓	三浦平兵衛	地拾五圓	三浦吉松	地拾五圓	金田與市	地拾九圓	福岡孫左衛門	地拾八圓	成田久七	地拾八圓	福岡駒八	地拾八圓	金田勘五郎	地拾八圓	田中吉五郎	地拾七圓	荻野德吉	地拾七圓	武野清吉	地拾三圓	武石和三郎	地拾五圓	武石彦五郎	地拾七圓	石上庄五郎	地拾七圓	武石寬三郎	地拾七圓	武石為吉
地拾九圓	大澤勘助	地拾六圓	齊藤與助	地拾七圓	齊藤財吉	地拾七圓	田口彌右衛門	地拾五圓	小林常藏	地拾五圓	小林七藏	地拾六圓	小林東之助	地拾六圓	加々谷善太郎	地拾六圓	富山源助	地拾六圓	鈴木要助	地拾六圓	鈴木政八	地拾六圓	原田和七郎	地拾六圓	高橋善五郎	地拾五圓	高橋善五郎	地拾五圓	松浦八郎右衛門	地拾五圓	庄司兵太郎	地拾六圓	森川德五郎	地拾七圓	清水吉五郎	地拾七圓	清水吉五郎

前田村

地拾六圓
地拾五圓
地貳拾圓
地貳拾四圓
地貳拾五圓
地貳拾六圓
地貳拾七圓
地貳拾八圓
地貳拾九圓
地貳拾十圓
地貳拾一圓
地貳拾二圓
地貳拾三圓
地貳拾四圓
地貳拾五圓
地貳拾六圓
地貳拾七圓
地貳拾八圓
地貳拾九圓
地貳拾十圓

工藤健五郎
多賀谷重兵衛
土佐市十郎
土佐米太郎
庄司善吉
新林定五郎
吉田甚太郎
司庄兵之助
佐藤重吉
庄司啓太郎
加賀平四郎
庄司友五郎
宮越惣兵衛
庄司半五郎

地貳拾壹圓
地貳拾貳圓
地貳拾三圓
地貳拾四圓
地貳拾五圓
地貳拾六圓
地貳拾七圓
地貳拾八圓
地貳拾九圓
地貳拾十圓
地貳拾一圓
地貳拾二圓
地貳拾三圓
地貳拾四圓
地貳拾五圓
地貳拾六圓
地貳拾七圓
地貳拾八圓
地貳拾九圓
地貳拾十圓

計平助
山田忠胤
山田理左衛門
吉田豐吉
武田吉松
佐藤長治
湊勇吉
松橋久左衛門
高橋萬藏
佐藤忠太
鈴木久治
中島菊藏

鹿角郡

地三百五十六圓
地三百五十七圓
地三百五十八圓
地三百五十九圓
地三百六十圓
地三百六十一圓
地三百六十二圓
地三百六十三圓
地三百六十四圓
地三百六十五圓
地三百六十六圓
地三百六十七圓
地三百六十八圓
地三百六十九圓
地三百七十圓
地三百七十一圓
地三百七十二圓
地三百七十三圓
地三百七十四圓
地三百七十五圓
地三百七十六圓

花輪村
吉田清兵衛

地三百七十七圓
地三百七十八圓
地三百七十九圓
地三百八十圓
地三百八十一圓
地三百八十二圓
地三百八十三圓
地三百八十四圓
地三百八十五圓
地三百八十六圓
地三百八十七圓
地三百八十八圓
地三百八十九圓
地三百九十圓
地三百九十一圓
地三百九十二圓
地三百九十三圓
地三百九十四圓
地三百九十五圓
地三百九十六圓
地三百九十七圓

田村又右工門
關廣治

鹿角郡

地四十二圓
地四十三圓
地四十四圓
地四十五圓
地四十六圓
地四十七圓
地四十八圓
地四十九圓
地五十圓
地五十一圓
地五十二圓
地五十三圓
地五十四圓
地五十五圓
地五十六圓
地五十七圓
地五十八圓
地五十九圓
地六十圓
地六十一圓
地六十二圓

南部康保
奈良善治
井上廣治
奈良半兵衛
關久兵衛
菅原佐次助
石木田由五郎
小野寺熊治
小田島治右工門
田中傳吉
管生佐七
工藤治六
花田榮次郎
柳田周治
黑澤藤一郎
高瀬徳次郎
工藤彦助
佐々木富八郎

地拾五圓
地拾六圓
地拾七圓
地拾八圓
地拾九圓
地貳拾圓
地貳拾壹圓
地貳拾貳圓
地貳拾三圓
地貳拾四圓
地貳拾五圓
地貳拾六圓
地貳拾七圓
地貳拾八圓
地貳拾九圓
地貳拾十圓
地貳拾一圓
地貳拾二圓
地貳拾三圓
地貳拾四圓
地貳拾五圓

田村茂助
武村龜太郎
奈良庄太郎
石木田小太郎
石井留之助
武村喜七
中島藤左工門
關尋次郎
小田島昌藏
菅原庄助
阿部定助
高瀬慶太郎
大越新吉
工藤治右工門
阿部五助
大里禎次郎
淺利歡作
關長十郎
村山義和

地貳拾貳圓	川村左學	地貳拾壹圓	佐藤健助
地三拾三圓	高田伊四郎	地九拾七圓	奈良正敬
地拾八圓	村山元司	地九十八圓	大里壽
地百三拾六圓	賀川寅太郎	地拾六圓	折戸龜太郎
地三拾三圓	佐藤要之助	地百四十四圓	關村清之助
地拾五圓	奈良熊之助	地六圓	工藤豐五郎
地十一圓	佐々木六彌	地五拾圓	工藤清次郎
地七十七圓	高杉寅五郎	地四十五圓	川口理七郎
地十五圓	奈良長兵衛	地百四拾圓	尾去澤村
地貳拾貳圓	金澤元祐	地五十八圓	內藤慎吾
地拾五圓	赤坂善助	地貳拾六圓	越後俊道
地拾五圓	安保忠彌	地貳拾五圓	阿部佐太郎
地九十四圓	石井未吉	地拾八圓	工藤專太郎
地三拾五圓	兔澤五兵衛	地九拾三圓	高谷長右衛門
地六拾四圓	村木壽平	地三拾七圓	佐藤市郎兵衛
地拾五圓	奈良定吉	地貳拾六圓	高杉良藏
地百五十七圓	奈良金平	地拾六圓	渡部小太郎
地百五十四圓	小田島由義	地貳拾四圓	阿部忠右衛門
			安倍嘉律馬

地貳拾八圓	齋藤長助	地四拾圓	阿部鶴藏
地拾六圓	古家半九郎	地百六十六圓	根本五郎
地百五十三圓	阿部藤助	地四圓	兒玉善藏
地五拾九圓	阿部吉之助	地三百二十九圓	米田半七
地拾九圓	阿部定之助	地百三圓	倍賞友之助
地貳拾五圓	阿部條助	地貳拾三圓	兔澤長兵衛
地拾五圓	坂本春松	地貳拾貳圓	兒玉善治
地貳拾五圓	阿部連之助	地三拾六圓	兒玉小次郎
地七拾六圓	渡部文藏	地九十二圓	戸嶋與助
地拾八圓	似鳥彌惣助	地三拾八圓	朝霧乙吉
地拾八圓	佐藤喜藏	地貳拾圓	木村富彌
地貳拾六圓	阿部忠七	地四拾九圓	石田實繼
地拾七圓	畠山清之助	地三拾八圓	川又久八
地三拾圓	阿部喜之助	地三拾九圓	關源太郎
地百六十三圓	佐藤甚藏	地七拾五圓	倍賞善太郎
地拾七圓	佐藤常吉	地四拾四圓	金澤重次郎
地二拾三圓	佐々木直太郎	地三拾七圓	安保源治
地貳拾四圓	田中六助	地拾九圓	錦木村
地拾七圓	阿部治助		

地拾五圓
地四拾圓
地貳拾壹圓
地三拾四圓
地貳拾壹圓
地三拾壹圓
地貳拾壹圓
地貳拾圓
地貳拾圓
地四拾四圓
地貳拾四圓
地六拾八圓
地拾八圓
地拾八圓
地貳拾四圓
地拾八圓
地拾七圓
地五拾貳圓

高橋賢藏
柳澤喜代助
村木長太郎
板橋勘作
米澤源五郎
米澤源五郎
米澤吉之助
米澤久之助
立山嘉助
米澤直之助
青山孫右衛門
赤坂平助
田子嘉八
石川六助
村木伊三郎
池田金次郎
佐藤鍋吉
大森慶作
賀川勇助

地拾六圓
地貳拾七圓
地四拾八圓
地貳拾六圓
地四拾貳圓
地三拾三圓
地百六十七圓
地拾八圓
地貳拾六圓
地貳拾六圓
地七拾貳圓
地拾六圓
地四拾七圓
地四拾四圓
地拾八圓
地拾八圓
地貳拾六圓
地九十三圓
地四圓

石川祐五郎
石山伊八
田口傳三郎
駒ヶ嶺政則
勝又平太郎
橫田富藏
中津山延賢
大里已代治
馬淵長太郎
和井内治右衛門
内藤金七
立山周助
石垣和吉
田中茂八郎
豐口勇次郎
豐口與市
石川與次郎
藤原甚兵衛
内藤周藏

地貳拾四圓
地貳拾貳圓
地六拾七圓
地貳拾八圓
地九十八圓
地三十八圓
地三十七圓
地四拾八圓
地三拾六圓
地貳拾壹圓
地三十八圓
地拾五圓
地貳拾四圓
地四拾壹圓
地拾六圓
地三拾五圓
地四拾四圓
地三拾四圓
地貳拾圓
地拾七圓
地八拾四圓

能勢吉之助
高橋新之助
大里喜三郎
勝又敬太郎
奈良佐太郎
石田榮次郎
高橋七郎兵衛
豐口木曾彌
關勇次郎
馬淵平兵衛
兒玉吉六
高橋六彌
津嶋作太郎
大里善藏
柳澤清助
鎌田倉吉
田口和七
高橋良吉
練塚久三郎
松田專助

地七拾壹圓
地貳拾四圓
地三拾七圓
地拾八圓
地貳拾圓
地貳拾七圓
地貳拾七圓
地七拾貳圓
地拾七圓
地貳拾四圓
地四拾貳圓
地百二十五圓
地拾五圓
地貳拾壹圓
地拾七圓
地貳拾六圓
地拾五圓
地四拾貳圓
地拾六圓

柳澤仁哉
勝又貞助
樋口權平
石川甚平
豐口甚平
安保惣次郎
高橋久助
岩泉源藏
豐口唯志
石田一學
川谷徳次郎
豐口萬藏
石川和助
關長右工門
大森與兵衛
田原市松
勝又庄司
成田多吉
成田市太郎
齊藤平助

地六拾貳圓	地六拾九圓	地七拾三圓	地七拾四圓	地七拾五圓	地七拾六圓	地七拾七圓	地七拾八圓	地七拾九圓	地八拾圓	地八拾一圓	地八拾二圓	地八拾三圓	地八拾四圓	地八拾五圓	地八拾六圓	地八拾七圓	地八拾八圓	地八拾九圓	地九拾圓	地九拾一圓	地九拾二圓	地九拾三圓	地九拾四圓	地九拾五圓	地九拾六圓	地九拾七圓	地九拾八圓	地九拾九圓	地百圓	
高橋慶助	田村巳之松	平川直吉	平川孫十郎	田長之助	藤田與十郎	藤田三治郎	田中藏松	田中吉之助	田中倉松	秋元久米之助	秋元利吉郎	佐々木由藏	藤田友吉	藤田與八郎	藤田與治兵衛	藤田養助	船山惣三郎	船山永助												
地六拾貳圓	地六拾七圓	地七拾四圓	地七拾五圓	地七拾六圓	地七拾七圓	地七拾八圓	地七拾九圓	地八拾圓	地八拾一圓	地八拾二圓	地八拾三圓	地八拾四圓	地八拾五圓	地八拾六圓	地八拾七圓	地八拾八圓	地八拾九圓	地九拾圓	地九拾一圓	地九拾二圓	地九拾三圓	地九拾四圓	地九拾五圓	地九拾六圓	地九拾七圓	地九拾八圓	地九拾九圓	地百圓		
藏田永助	納家弁藏	武田吉五郎	武田松五郎	佐々木長之丞	大山長右衛門	小玉彦三郎	芳賀榮司	清水文治	大金山吾七	大金山由松	山田兵吉	山田寅五郎	大塚徳五郎	山田仁八	山田應治	袴田仁助	袴田卯三郎	袴田與藏												

六十四

地六拾貳圓	地六拾九圓	地七拾三圓	地七拾四圓	地七拾五圓	地七拾六圓	地七拾七圓	地七拾八圓	地七拾九圓	地八拾圓	地八拾一圓	地八拾二圓	地八拾三圓	地八拾四圓	地八拾五圓	地八拾六圓	地八拾七圓	地八拾八圓	地八拾九圓	地九拾圓	地九拾一圓	地九拾二圓	地九拾三圓	地九拾四圓	地九拾五圓	地九拾六圓	地九拾七圓	地九拾八圓	地九拾九圓	地百圓	
山田政治	佐藤重三郎	田中藏松	宮腰泰順	田中與吉	大山中萬藏	大山中勝藏	佐々木勝藏	大塚兵太郎	大塚三平	原田吉五郎	原田長治	梅田由五郎	島川久太郎	平川政之助	平川寛助	山田傳治郎	平川彌四郎	山田安五郎												
地六拾貳圓	地六拾七圓	地七拾四圓	地七拾五圓	地七拾六圓	地七拾七圓	地七拾八圓	地七拾九圓	地八拾圓	地八拾一圓	地八拾二圓	地八拾三圓	地八拾四圓	地八拾五圓	地八拾六圓	地八拾七圓	地八拾八圓	地八拾九圓	地九拾圓	地九拾一圓	地九拾二圓	地九拾三圓	地九拾四圓	地九拾五圓	地九拾六圓	地九拾七圓	地九拾八圓	地九拾九圓	地百圓		
原田岩八	保坂仁嘉七	野呂田喜久藏	野呂田與吉	野呂田長三郎	野呂田半五郎	野呂田善治	今野小左門	今野吉五郎	今野万左衛門	今野彌七郎	小川米藏	小川福松	小川重太郎	金谷祐藏	金谷萬治郎	武田穀松	佐藤易吉	大塚勘左衛門												

山本郡

六十五

地七拾五圓	兒玉 要助	地三拾圓	柴田 德太郎
地六拾三圓	佐々木 多郎兵衛	地拾六圓	田村 藤藏
地三拾貳圓	兒玉 東吉	地拾九圓	川田 久吉
地四拾六圓	渡邊 甚七	地拾七圓	鎌田 直吉
鹿	成田 三十郎	地五拾四圓	牧野 重吉
地貳拾五圓	藤原 佐吉	地百九十七圓	牧野 健藏
地貳拾壹圓	渡邊 嘉一郎	地貳拾四圓	牧野 彦之丞
地四拾七圓	田村 勝藏	地拾五圓	伊藤 重太郎
地三拾九圓	伊藤 半治	地拾六圓	國塚 半兵衛
地拾七圓	伊藤 林藏	地三拾八圓	小塚 惣吉
地貳拾七圓	川村 万太郎	地八拾貳圓	國塚 半三郎
地貳拾六圓	近藤 三太郎	地貳拾壹圓	小塚 榮藏
地四拾壹圓	工藤 金之助	地貳拾七圓	齋藤 勇助
地六拾八圓	近藤 勘右工門	地拾六圓	川村 長吉
地拾八圓	近藤 六三郎	地貳拾七圓	神田 雄亮
地貳拾四圓	近藤 久米之丞	地四拾貳圓	神田 正一郎
地拾八圓	見上 作右工門	地拾八圓	兒玉 順之助
地五拾三圓	平塚 仁三郎	地拾七圓	近藤 久助
地三拾圓	近藤 政五郎	地貳拾八圓	鎌田 石五郎

地拾八圓	近藤 政吉	地拾八圓	田中 藤助
地拾七圓	伊藤 永吉	地貳拾三圓	田中 丹藏
地貳拾圓	近藤 吉六	地貳拾四圓	田中 友藏
地拾七圓	兒玉 甚三郎	地三拾五圓	田中 長十郎
地六拾五圓	田村 又藏	地拾五圓	近藤 敬助
地七拾貳圓	佐々木 甚四郎	地貳拾圓	鎌田 善右衛門
地三拾五圓	杉山 駒五郎	地三拾八圓	宮田 新藏
地三拾圓	藤原 權藏	地貳拾四圓	大塚 彌市
地四拾圓	田中 長四郎	地三拾九圓	小塚 時治
地貳拾壹圓	藤原 駒吉	地三拾壹圓	富山 三治郎
地七拾三圓	平塚 又十郎	地拾九圓	齊藤 長助
地三拾圓	牧野 彦太郎	地拾九圓	板垣 久之助
地八拾壹圓	川田 久米藏	上岩川村	
地貳拾三圓	鎌田 和助	地貳拾三圓	川村 久吉
地拾六圓	宮田 長右衛門	地九拾九圓	岡村 福太郎
地貳拾四圓	田中 鏡一	地三拾五圓	山本 祐太郎
地拾六圓	近藤 整三	地六拾壹圓	渡邊 善左工門
地五拾壹圓	大山 五左衛門	地四拾壹圓	渡邊 和吉
地三拾圓	大山 彦兵衛	地貳拾七圓	渡邊 三吉
地貳拾貳圓	大山 仁三郎	地貳拾圓	渡邊 元吉

地拾六圓	加藤門十郎	地拾五圓	近藤菊松
地拾九圓	飯塚作左工門	地拾七圓	板倉勇吉
地三拾貳圓	工藤健治	地貳拾九圓	板倉禮左工門
地拾九圓	工藤喜市	地拾九圓	北林金十郎
地拾六圓	小野林之助	地拾六圓	川村藤吉
地貳拾四圓	小野野金助	地拾五圓	川村勇吉
地拾九圓	加藤嘉兵衛	地三拾貳圓	板倉和三郎
地拾七圓	工藤豐吉	地四拾五圓	後藤甚九郎
地貳拾四圓	工藤三郎兵衛	地拾八圓	西村與市
地貳拾九圓	加藤五郎八	地五拾圓	小澤文五郎
地拾五圓	工藤與治右工門	地三拾五圓	北林仁五郎
地拾六圓	山崎與吉	地三拾五圓	北林與惣右工門
地拾六圓	川村與八郎	地三拾八圓	田中長徵
地拾六圓	工藤政吉	地三拾貳圓	北林文治
地貳拾圓	加藤喜太郎	地貳拾五圓	北林長太
地貳拾五圓	加藤慶太郎	地貳拾四圓	近藤永助
地貳拾五圓	渡邊久吉	地拾九圓	北林七左工門
地貳拾五圓	近藤金吾	地百八十四圓	內藤謙吉
地五拾壹圓	板倉重吉	地百八十四圓	北林與治右工門

地百二十七圓	板倉幾藏	地貳拾六圓	三浦駒吉
地百二十二圓	伊藤源吉	地百二十八圓	石川鐵五郎
地貳拾壹圓	工藤直造	地三拾九圓	石川松藏
地拾七圓	池田儀左工門	地貳拾圓	石川辰五郎
地貳拾壹圓	野呂田周吉	地三拾三圓	石川萬五郎
地拾七圓	三浦慶五郎	地貳拾六圓	石川永藏
地拾七圓	島田儀助	地百十九圓	石川健之助
地拾七圓	島田善吉	地拾七圓	安藤與四右工門
地貳拾五圓	島田五助	地拾七圓	石川與藏
地貳拾壹圓	高松寅吉	地貳拾四圓	石井文吾
地貳拾壹圓	渡邊重右工門	地三拾壹圓	安藤慶右工門
地貳拾七圓	井瀨彌六	地拾九圓	吉田金藏
地五拾六圓	小山内久太郎	地貳拾七圓	渡邊鶴治
地九十七圓	島田宗之助	地三拾圓	野呂田丑五郎
地拾六圓	三浦角左工門	地貳拾圓	渡邊勇太郎
地拾五圓	渡邊寅吉	地貳拾五圓	三浦清吉
地貳拾四圓	三浦三右工門	地三拾貳圓	神馬捨吉
地貳拾六圓	三浦駒之助	地八拾三圓	王藤甚四郎

地拾六圓	地百貳拾六圓	地四拾七圓	地四拾壹圓	地貳拾三圓	地三拾六圓	地貳拾圓	地三拾圓	地拾七圓	地拾六圓	地貳拾六圓	地貳拾圓	地三拾八圓	地拾五圓	地四拾七圓	地貳拾圓	地四拾壹圓	地拾六圓	
川井武治	館岡彦五郎	中田丈助	信太藤助	新堀喜太郎	中田定吉	清水字一郎	信太七兵衛	信太三吉	信太佐七郎	志戸田永太郎	梅田重吉	信太金助	高松米吉	田村尾治	中田岩吉	高橋吉太郎	伊藤長藏	吉田誠之
地三拾圓	地三拾壹圓	地三拾九圓	地四拾五圓	地拾九圓	地拾九圓	地貳拾五圓	地拾五圓	地拾六圓	地貳拾六圓	地貳拾圓	地拾五圓	地拾五圓	地三拾六圓	地貳拾三圓	地拾八圓	地貳拾三圓	地拾八圓	地拾八圓
信太昌治	珍田喜代治	佐々木庄之丞	内藤與一郎	櫻田子之助	山田文治	金子彌市	金子百之助	田中定吉	石井勘治	渡邊子之助	渡邊佐七	袴田嘉助	石井喜助	川村林藏	袴田與七郎	信太文治	塚本勘助	福田松太郎

地貳拾八圓	地四拾五圓	地貳拾貳圓	地貳拾壹圓	地貳拾四圓	地貳拾圓	地拾六圓	地貳拾壹圓	地貳拾四圓	地貳拾四圓	地貳拾四圓	地貳拾四圓	地貳拾三圓	地百十二圓	地三拾貳圓	地拾六圓	地貳拾六圓	地五拾八圓	地拾六圓
渡邊丑五郎	佐長土豐	野村嘉吉	石田周助	齋藤竹治	野村松五郎	矢田部政五郎	雄鹿長之助	長岡惣助	渡邊佐助	川田百治	田村菊五郎	藤田重藏	加藤重一郎	野呂彦右工門	鈴木長治郎	山口甚右左門	小杉山幸之助	戸松多郎助
地拾八圓	地貳拾貳圓	地拾六圓	地四拾三圓	地拾八圓	地四拾六圓	地拾七圓	地貳拾貳圓	地六拾圓	地拾八圓	地貳拾五圓	地貳拾貳圓	地四拾四圓	地拾六圓	地五拾圓	地貳拾圓	地拾五圓	地百二十八圓	地貳拾四圓
高山應治	笠井禮吉	笠井惣左工門	五十嵐五郎左門	笠井多吉	柴田市松	柴田市兵衛	柴田嘉市	塚本政之助	塚本庄治	塚本庄右工門	塚本政右工門	堀内定之丞	柴田市兵衛	小林竹之助	小林久右工門	小林甚左工門	藤原武治	小林吉藏

地四拾壹圓 地貳拾壹圓 地拾九圓 地拾七圓 地貳拾四圓 地拾七圓 地拾八圓 地拾六圓 地三拾貳圓
 地拾六圓 地拾七圓 地貳拾壹圓 地拾八圓 地貳拾七圓 地四拾四圓 地拾八圓
 高橋傳之丞 若松永藏 小林四郎兵衛 小內甚吉 長內熊五郎 若松藤四郎 飯坂助作 飯坂堅藏 高橋物七
 田村安五郎 戶松宇吉 柴田與太郎 竹嶋與三郎 柴田與三郎 竹島與市助 戶松長之助 戶松源吉 中川禮吉 小川勇吉
 地貳拾壹圓 地拾八圓 地拾八圓 地拾六圓 地拾八圓 地六拾七圓 地拾八圓 地拾五圓 地四拾壹圓 地拾八圓
 佐々木文五郎 佐々木左衛門 佐々木永助 佐々木辰五郎 佐々木長吉 小林七右衛門 工藤庄治郎 福岡孫吉 小井甚太郎 笠井福太郎
 工藤利左衛門 米川勘一郎 米川久五郎 智田五三郎 池端新助 米川長松 工藤勘太郎 智田喜左衛門 山谷文治郎
 富根村

地四拾四圓 地四拾貳圓 地拾六圓 地拾九圓 地貳拾貳圓 地七拾壹圓 地貳拾九圓 地貳拾五圓 地三拾圓 地四拾貳圓 地三拾七圓 地拾八圓 地拾五圓 地貳拾圓 地拾六圓 地百十二圓 地貳拾三圓 地拾五圓
 山谷權四郎 山谷佐助 山谷久助 山谷仁三郎 池端金助 工藤東一郎 山谷三藏 山谷三郎 山谷市三郎 山本庄司 工藤文五郎 池端與吉郎 山端與吉郎 工藤藤庄治郎 福岡孫吉 吉岡多郎兵衛 今野茂助 島山雄三 島山與三 吉岡多市
 地拾八圓 地貳拾貳圓 地貳拾圓 地拾七圓 地貳拾壹圓 地貳拾八圓 地拾七圓 地拾六圓 地五拾貳圓 地四拾三圓 地拾五圓 地三拾五圓 地拾八圓 地拾八圓 地拾八圓 地拾七圓 地拾七圓 地拾七圓 地拾七圓 地拾七圓 地拾七圓
 富山安五郎 成田茂吉 成田堅吉 七尾文之助 七尾文之助 清水七右門 櫻田永太郎 松島甚太郎 松島助藏 佐藤半三郎 佐藤孫作 工藤三太郎 森田忠治 櫻田孫藏 工藤久太 豐澤勘助 佐藤甚之丞 豐澤小八郎 豐澤長六
 山本

地拾五圓
地三拾壹圓
地拾八圓
地三拾圓
地拾五圓
地貳拾圓
地拾六圓
地三拾三圓

常盤

安井六郎兵衛
佐藤總一
齋藤米吉
安井駒藏
安部長十郎
安部定五郎
齋藤市右衛門
山崎福治郎
高山銀兵衛
建部豐太郎
佐藤三太郎
佐藤直吉
佐藤三右衛門
佐藤三太郎
工藤備左衛門
佐藤庄吉
土谷慎左衛門
佐藤新三郎

地拾九圓
地貳拾貳圓
地八拾四圓
地拾六圓
地貳拾八圓
地拾八圓
地拾五圓
地貳拾四圓
地三拾壹圓
地貳拾五圓
地拾八圓
地拾七圓
地拾六圓
地三拾圓
地三拾六圓
地拾九圓
地拾七圓
地貳拾六圓
地貳拾六圓
地拾八圓

佐藤宇三郎
佐藤圓之助
桐越勇次郎
松山三太郎
大倉嘉兵衛
佐藤榮藏
佐藤弟助
大倉助四郎
佐藤佐吉郎
佐藤長藏
大柄多吉
佐々木八右衛門
丹波清助
須合治左衛門
山崎久三郎
與齋與助
齊藤五郎右衛門
佐藤龜五郎
大高政治

地拾八圓
地拾七圓
地拾六圓
地拾七圓
地拾七圓
地貳拾三圓
地貳拾壹圓
地三拾六圓
地拾六圓
地拾七圓
地三拾五圓
地三拾壹圓
地貳拾三圓
地拾六圓
地拾五圓
地四拾五圓
地四拾四圓
地百八十四圓

東雲

大高治兵衛
大高卯吉郎
大高甚三郎
三澤又吉
大高孫右工門
大高條助
三浦龜治
三浦由松
西村長兵衛
清水賢藏
清水菊松
松嶋芳治郎
松嶋定吉
赤塚伊右工門

地四拾八圓
地拾八圓
地貳拾四圓
地拾五圓
地三拾七圓
地拾六圓
地貳拾圓
地三拾壹圓
地貳拾六圓
地貳拾四圓
地拾五圓
地三拾八圓
地拾八圓
地貳拾四圓
地貳拾圓
地拾八圓
地貳拾圓
地三拾貳圓
地拾七圓
地拾九圓

赤塚市右工門
平塚市藏
平塚万藏
大淵三四郎
佐藤寅之助
鎌田仁左工門
鎌田周藏
熊谷惣右工門
佐藤三五郎
鎌田政吉
鎌田長兵衛
熊谷恭一
永井助右工門
永井芳藏
佐藤市五郎
金谷金藏
佐藤倉吉
永井米藏
佐藤祐治郎
大高嘉之助

地貳拾四圓
地貳拾三圓
地貳拾五圓
地貳拾八圓
地貳拾七圓
地貳拾七圓
地貳拾五圓
地貳拾五圓
地貳拾六圓
地貳拾五圓
地貳拾貳圓
地貳拾貳圓
地貳拾五圓
地貳拾五圓
地貳拾五圓
地貳拾七圓
地貳拾七圓

川村

大谷藤七
大谷三四郎
大谷清吉
大谷多七
木村金藏
高杉久治
高杉清松
藤島佐助
今井善左衛門
松森長兵衛
今平喜市
三浦清三郎
松森萬之丞
高杉保三
嶋津七三郎
島津藤右衛門
米森万藏
田中藤助
小澤長五郎

地拾六圓
地拾九圓
地拾七圓
地拾六圓
地拾三圓
地貳拾七圓
地貳拾七圓
地貳拾九圓
地貳拾貳圓
地貳拾九圓
地貳拾九圓
地貳拾八圓
地拾八圓
地拾六圓
地拾貳圓
地貳拾壹圓
地貳拾六圓

目村

米森卯助
福士清左衛門
渡邊平吉
佐藤茂吉
工藤永藏
工藤健藏
工藤新三郎
佐藤忠吉
工藤甚五右衛門
工藤龍五右衛門
神馬寅五郎
後藤長右衛門
山崎喜左衛門
山崎定吉
武田政五郎
田村和助
武田隆玄
越中喜二郎

地貳拾九圓
地拾九圓
地拾九圓
地貳拾八圓
地貳拾六圓
地貳拾貳圓
地貳拾貳圓
地貳拾三圓
地拾七圓
地拾六圓
地拾六圓
地貳拾貳圓
地貳拾貳圓

笠原金藏
笠原藤吉
阿部嘉一郎
阿部喜七郎
菊地與市
阿部長之助
笠原長之助
阿部祐助
皆川龍庵
淺谷專之助
川尻茂左衛門
土崎彌藏
森田新兵衛
福司孫三郎
鈴木喜市
笠原石松
錢谷芳藏
柴田重五郎
山谷由五郎
柴田喜助

地六拾四圓
地貳拾四圓
地拾六圓
地拾五圓
地拾九圓
地拾九圓
地拾九圓
地拾七圓
地拾七圓
地拾八圓
地貳拾圓
地貳拾貳圓
地拾五圓
地貳拾貳圓
地貳拾九圓
地拾八圓
地拾六圓
地貳拾貳圓

淺田喜之助
浦嶋由松
佐々木丈吉
柴田茂助
淺田喜左衛門
柴田久兵衛
柴田長十郎
稻葉長兵衛
鈴木重左衛門
鈴木重左衛門
鈴木重左衛門
鈴木重左衛門
長門彌一
柴田重吉
伊藤利兵衛
金谷平四郎
小林清藏
小林清藏
小林清藏
木藤喜三郎

河邊郡

地三拾四圓
地五拾八圓
地貳拾貳圓
地貳拾八圓
地貳拾四圓
地拾七圓
地八拾五圓
地拾六圓
地五拾壹圓
地九十九圓
地拾五圓
地拾五圓
地貳拾貳圓
地拾五圓
地三拾三圓
地拾五圓
地拾八圓
地拾八圓

森

村

淺野藤右衛門
木藤政吉
淺野利市
若狹梅吉
大高利七
武內吉藏
大高已之松
九山五郎右衛門
菊地新吉
龜田甚八
金田茂八
菊地菊藏
豐田門左衛門
豐田竹松
工藤彌一郎
熊谷多三郎
須藤庄右衛門
諸澤寅助
吉田庄吉

地貳拾壹圓
地五拾貳圓
地拾六圓
地貳拾五圓
地拾九圓
地拾八圓
地貳拾壹圓
地貳拾九圓
地拾七圓
地拾八圓
地拾五圓
地拾五圓
地貳拾三圓
地貳拾壹圓
地三拾九圓
地貳拾四圓

岩

館

工藤東藏
齋藤善藏
石岡佐五衛門
佐藤米八
山內多三郎
山本與八郎
山本文治郎
山本勇藏
日沼老之助
日沼太市
門脇彌市
工藤彌市
武田喜一郎
庄內勘三郎
武田健治
工藤米太郎
須藤三四郎
鈴木專藏

地三拾六圓
地三拾壹圓
地五拾五圓
地五十七圓
地貳拾五圓
地三拾圓
地二十一圓
地拾七圓
地貳拾四圓
地拾六圓
地拾五圓
地三拾貳圓
地拾六圓
地四拾八圓
地貳拾八圓
地貳拾圓

牛嶋村

武田鉄五郎
進藤八郎兵衛
三浦辰藏
青池豐治
進藤彦太郎
宮野金右衛門
布川新之丞
吉田市郎左衛門
平澤助太郎
武田喜助
菅原丹藏
佐川重兵衛
三浦七郎兵衛
三浦三藏
三浦一藤助
泉圓之丞
菅原新太

地貳拾七圓
地三十二圓
地三十四圓
地四拾六圓
地拾六圓
地貳拾六圓
地三十一圓
地拾七圓
地拾五圓
地七十九圓
地三拾九圓
地三十三圓
地四十九圓
地五十九圓
地百四圓
地貳拾七圓

屋

村

菅原金藏
菅原傳次郎
大嶋源右衛門
辻永佐藤治
大島定吉
大門彦右衛門
渡邊吉之助
川口長吉
川口金治
三浦總吉
高橋九郎左衛門
仙葉善之助
小西豐德
森川源三郎
相原忠治

河邊郡

頁十三

地貳拾圓 地三百二十圓
地三拾七圓 豐
地三拾圓
地四拾圓
地八拾五圓
地三拾九圓
地貳拾壹圓
地貳拾六圓
地貳拾六圓
地貳拾九圓
地貳拾五圓
地貳拾八圓
地貳拾壹圓
地八拾圓

岩 村
齊藤福治
相原卯吉
相原倉吉
古谷佐太郎
武藏茂兵衛
武藏藤五助
田口永吉
田口八右衛門
田口八右衛門
田口八太郎
鈴木多郎右衛門
鈴木重藏
鈴木岩松
鈴木久之助
嵯峨重治
五十嵐金五郎
鈴木久之藏
嵯峨亥之助

地百四圓
地拾九圓
地貳拾壹圓
地貳拾六圓
地貳拾壹圓
地八拾三圓
地貳拾九圓
地三拾八圓
地拾五圓
地貳拾八圓
地貳拾六圓
地貳拾八圓
地貳拾八圓
地貳拾八圓
地貳拾八圓
地貳拾八圓
地貳拾八圓
地拾五圓

鈴木藤四郎
佐藤孫左衛門
池田源藏
佐藤藤藏
齊藤常吉
大倉金藏
佐藤圓右衛門
堀川多治兵衛
佐藤小三郎
佐藤仁左衛門
佐藤長左衛門
安田辰藏
佐賀九助
中村五郎右衛門
中村勇吉
齋藤清治
池田庄右衛門
鈴木徳藏
近藤藏松

八十四

地拾七圓
地四拾三圓
地拾七圓
地拾七圓
地六拾壹圓
地拾五圓
地貳拾圓
地拾七圓
地拾六圓
地拾九圓
地貳拾圓
地四拾五圓
地三拾三圓
地三拾三圓
地三拾三圓
地貳拾八圓
地貳拾壹圓
地拾五圓

仁井田村
佐賀萬吉
池田勘之丞
近藤徳太郎
熊井直政
志賀光胤
小玉幾松
寺門永吉
堀井文藏
寺門文五郎
白山嘉一郎
白山長八郎
堀井林藏
相場善之助
相場丹藏
鈴木清藏
相場清兵衛
工藤鉄五郎
佐藤萬藏

地貳拾壹圓
地貳拾壹圓
地貳拾五圓
地貳拾七圓
地四拾三圓
地貳拾九圓
地貳拾九圓
地貳拾九圓
地貳拾九圓
地貳拾九圓
地貳拾九圓
地貳拾九圓
地貳拾九圓
地貳拾九圓
地貳拾九圓
地貳拾九圓
地貳拾九圓
地貳拾九圓

佐藤竹松
寺門五郎兵衛
河村萬右衛門
佐藤佐五兵衛
堀川鉄五郎
高橋實吉
高橋金藏
相場重三郎
川村多兵衛
熊谷長之助
新田市兵衛
今野三之助
堀川喜兵衛
今野金藏
佐藤長助
新田兼五郎
上村三五郎
伊藤儀右衛門
熊谷総四郎
熊谷総八

河邊郡

八十五

地三拾壹圓
地四拾九圓
地四拾六圓
地四拾七圓
地五拾八圓
地四拾七圓
地四拾四圓
地四拾壹圓
地拾八圓
地拾六圓
地拾七圓
地六拾六圓
地拾七圓
地四拾圓
地六拾八圓
地六拾四圓
地三拾六圓

依 野 澤
中 村 富 藏
齋 藤 善 藏
熊 谷 直 藏
工 藤 廉 之 助
相 場 勘 太 郎
相 場 喜 惣 兵 衛
相 場 重 五 郎
相 場 重 之 助
白 山 嘉 右 衛 門
工 藤 喜 作
上 村 專 太
吉 川 幸 助
堀 井 多 八
加 藤 佐 吉
相 場 清 吉
熊 谷 勇 助
相 場 久 松
鈴 木 松 右 衛 門
熊 地 米 藏

地拾五圓
地四拾壹圓
地拾六圓
地拾九圓
地三拾五圓
地拾五圓
地五拾四圓
地三拾貳圓
地百貳拾七圓
地四拾貳圓
地拾五圓
地貳拾六圓
地貳拾貳圓
地拾八圓
地貳拾四圓
地拾六圓

熊 地 熊 藏
熊 谷 長 之 助
鈴 木 嘉 吉 郎
佐 藤 幸 吉
佐 々 木 多 吉
原 田 藤 藏
佐 々 木 市 之 助
堀 井 嘉 左 衛 門
菊 地 仁 左 衛 門
佐 々 木 甚 三 郎
佐 々 木 三 藏
佐 々 木 茂 三 郎
佐 々 木 久 助
佐 々 木 鉄 五 郎
佐 々 木 文 治 郎
堀 井 久 助
堀 井 勇 吉
堀 井 三 藏
堀 井 太 郎

地貳拾六圓
地貳拾三圓
地五拾三圓
地拾六圓
地拾七圓
地貳拾三圓
地四拾四圓
地六拾五圓
地拾六圓
地拾七圓
地拾五圓
地七拾貳圓
地四拾七圓
地拾五圓
地貳拾八圓
地拾八圓
地拾五圓
地三拾六圓

櫻 橋 太 郎
伊 藤 金 五 郎
櫻 橋 金 藏
伊 藤 勘 右 衛 門
加 賀 景 八
伊 藤 倉 松
伊 藤 作 兵 衛
伊 藤 三 右 衛 門
伊 藤 虎 吉
伊 藤 龜 之 助
加 藤 音 吉
櫻 橋 右 衛 門
櫻 橋 愼 太
櫻 橋 平 四 郎
櫻 橋 作 之 丞
伊 藤 廉 長 若
伊 藤 孫 十 郎
鈴 木 助 左 衛 門
鈴 木 爲 藏

地貳拾圓
地三拾五圓
地貳拾九圓
地三拾八圓
地貳拾八圓
地貳拾圓
地三拾四圓
地四拾五圓
地貳拾壹圓
地三拾三圓
地三拾三圓
地貳拾三圓
地拾五圓
地拾九圓
地五拾五圓
地貳拾四圓
地拾六圓
地三拾貳圓

鈴 木 孫 十 郎
堀 井 萬 藏
鈴 木 富 藏
橋 本 幸 助
三 浦 三 太
鈴 木 友 吉
三 浦 吉 藏
堀 田 源 五 右 衛 門
石 井 多 助
藤 澤 長 助
加 賀 源 治
川 村 芳 藏
鈴 木 久 治 郎
島 田 三 助
杉 澤 久 之 丞
堀 井 廉 右 衛 門
堀 井 彌 助
佐 藤 嘉 七
堀 井 久 松

添村

地貳拾圓
地拾七圓
地三拾三圓
地貳拾九圓
地三拾三圓
地貳拾貳圓
地拾八圓
地拾九圓
地貳拾五圓
地拾五圓
地拾五圓
地拾四圓
地貳拾六圓
地拾六圓
地三拾九圓
地貳拾八圓
地拾九圓
地貳拾壹圓

堀井長十郎
堀井久二郎
佐藤梅五郎
東海林鶴松
高田專助
船山長治郎
東海林辰五郎
黑崎宗治
佐藤長左衛門
渡邊久治
黑崎萬太郎
山内市五郎
佐藤政治
山内末松
佐藤辰五郎
星川易五郎
木谷鉄五郎
細井善三郎
堀井熊吉
池田與惣右衛門

地拾九圓
地拾九圓
地拾六圓
地拾五圓
地拾六圓
地拾六圓
地拾五圓
地拾五圓
地拾六圓
地百四圓
地貳拾三圓
地三拾貳圓
地七拾圓
地三拾壹圓
地貳拾壹圓
地貳拾壹圓
地三拾四圓
地貳拾七圓
地貳拾四圓

石澤甚三郎
石澤原藏
藤原銀藏
池田孫左衛門
藤原竹松
池田友吉
永澤半藏
平澤清左衛門
伊藤友吉
伊藤房吉
伊藤才治
伊藤周藏
佐藤金藏
堀井三四郎
伊藤長左衛門
堀井市右衛門
堀井甚太郎
堀井金助
堀井三五郎
堀井長吉

地拾七圓
地貳拾七圓
地拾七圓
地貳拾圓
地貳拾八圓
地六拾貳圓
地拾九圓
地貳拾貳圓
地拾七圓
地拾七圓
地三拾三圓
地拾八圓
地拾九圓
地貳拾四圓
地貳拾三圓
地拾八圓
地七拾五圓
地貳拾圓

堀井宇吉
深井藏松
深井卯之松
鈴木新藏
鈴木藤吉
深井長右衛門
永澤久之助
丸山三太郎
丸山房松
佐藤傳四郎
佐々木直吉
佐々木吉兵衛
柏谷治兵衛
齋藤善太
鈴木藤藏
鈴木辰之助
鈴木源治
鈴木與助
佐藤友吉
堀井林藏

地三拾九圓
地拾五圓
地拾九圓
地貳拾四圓
地貳拾四圓
地四拾九圓
地貳拾貳圓
地貳拾六圓
地貳拾貳圓
地拾六圓
地貳拾四圓
地貳拾四圓
地貳拾五圓
地貳拾五圓
地拾八圓
地四拾八圓
地三拾三圓
地百四十五圓

池田勇吉
長谷川久之助
栗石彌右衛門
中川助太郎
小介川與兵衛
阿部多三郎
長谷川重兵衛
堀井平藏
佐藤久吉
長谷川七太郎
伊藤彦右衛門
阿部三郎
池田八藏
長谷川久太郎
佐藤卯助
池田吉之丞
小介川政治郎
齋藤萬之助
齋藤友吉